

ざ こう じ なか じま い せき
座 光 寺 中 島 遺 跡

1999年3月

長野県飯田市教育委員会

ざ こう じ なか じま い せき
座 光 寺 中 島 遺 跡

1999年3月

長野県飯田市教育委員会

序

飯田市座光寺地区は飯田市街地の北東部、天竜川河岸から木曾山脈前山の麓までの細長い範囲を占めています。川沿いの平坦地から段丘面・扇状地等に、比較的広い耕地が広がっています。また、古来交通の要衝に位置しており、古代伊那郡衙である恒川遺跡群等の埋蔵文化財をはじめ多くの文化財を残しています。これらは私たちの地域社会や文化を形作ってきた様々なる証であり、できる限り現状のままで後世に伝えることが私たちの責務でしょう。けれども、同時に私たちはよりよい社会や生活を求めていく権利を持っています。ですから、日常生活の様々な場面で文化財の保護と開発という相容れない事態に直面することが多くなっています。こうした場合、発掘調査を実施して記録にとどめることもやむを得ないものといえましょう。

下伊那地方事務所は、松川町から飯田市を結ぶ広域農道の新設を計画しました。工事は松川町側から着工していく、平成7年度からは飯田市座光寺地区にかかるようになりました。農道を建設して農業の近代化に対応することは、車が欠くことのできない交通手段であることを考えれば、必要な事業といえます。しかし、当該事業地には数多くの埋蔵文化財包蔵地が存在し、座光寺中島遺跡もその一つで、工事実施によって壊されてしまうおそれがでてきました。そこで、次善の策ではありますが、工事実施に先立つて緊急発掘調査を実施して、記録保存を図ることになりました。

調査成果は本文で述べられているとおりでありますが、調査で得られました様々な知見は、これからこの地域の歴史を知っていく上で貴重な資料となると確信しています。

最後になりましたが、調査に当たって多大なご理解とご協力をいただいた下伊那地方事務所と隣接地の方々、現地作業及び整理作業に従事された作業協力員の皆さんほか関係各位に深く感謝を申し上げますとともに、ここに発掘調査報告書が刊行できますことに対して厚くお礼申し上げます。

平成11年3月

飯田市教育委員会

教育長 小林 恭之助

例　　言

1. 本書は広域営農団地農道整備事業伊那南部2期地区工事に先立って実施された、飯田市座光寺「座光寺中島遺跡」の緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は、下伊那地方事務所からの委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
3. 調査は、平成8・9年度に現場作業、平成10年度に整理作業及び報告書作成作業を行った。
4. 調査実施に当たり、基準点測量・航空測量・航空写真撮影・遺物写真撮影を株式会社ジャステックに委託した。
5. 発掘作業・整理作業に当たり、Z NKを一貫して用いた。なお、以下により遺跡の中心地番である数字を略号に統けて付した。第Ⅰ地区 - 1987-4 第Ⅱ地区 - 1977-2 第Ⅲ地区 - 1994-3 第Ⅳ地区 - 2949
6. 本報告書では以下の遺構番号を使用している。竪穴住居址 - S B、掘立柱建物址 - S T、方形周溝墓 - S M、溝址 - S D、土坑 - S K
7. 本報告書の記載順は竪穴住居址を優先した。遺構図は本文とあわせ挿図とし、遺物及び写真図版は本文末に一括した。
8. 土層の色調については、『新版標準土色帖』の表示に基づいて示した。
9. 本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により山下誠一が行った。
10. 本書の執筆と編集は調査員の協議により山下誠一が行った。
11. 本書の遺構図の中に記した数字は、検出面・床面からそれぞれの穴の深さ（単位cm）を表している。
12. 本書に関連した出土遺物及び図面写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

本文目次

序

例 言

I 経 過	1
1. 調査に至るまでの経過	1
2. 調査の経過	1
1) 平成8年度調査	1
2) 平成9年度調査	2
3) 平成10年度調査	2
3. 調査組織	2
1) 調 査	2
2) 指 導	3
3) 事務局	3
II 遺跡の環境	5
1. 自然環境	5
2. 歴史環境	5
III 調査結果	9
1. 調査の方法と概要	9
2. 基本層序	9
3. 造構と遺物	10
1) 第Ⅰ地区	10
2) 第Ⅱ地区	24
3) 第Ⅲ地区	52
4) 第Ⅳ地区	55
IV まとめ	64
報告書抄録	163

挿図目次

挿図 1	座光寺中島遺跡位置図	4
挿図 2	座光寺中島遺跡調査位置図及び周辺図	7
挿図 3	基準メッシュ区画調査位置図	8
挿図 4	基本層序	9
挿図 5	第Ⅰ地区全体図	10
挿図 6	S B 1 7	11
挿図 7	S B 1 8	12
挿図 8	S B 3 8	13
挿図 9	S B 3 9	14
挿図10	S B 4 0	15
挿図11	S T 0 1	15
挿図12	S D 0 1・1 1	16
挿図13	S K 0 1～0 8	18
挿図14	第Ⅰ地区柱穴・穴(1)	20
挿図15	第Ⅰ地区柱穴・穴(2)	21
挿図16	第Ⅰ地区柱穴・穴(3)	22
挿図17	第Ⅰ地区柱穴・穴(4)	23
挿図18	S B 1 9	24
挿図19	第Ⅱ地区全体図	25・26
挿図20	S B 2 0	27
挿図21	S B 2 1	28
挿図22	S B 2 2	29
挿図23	S B 2 3	30
挿図24	S B 2 4	31
挿図25	S B 2 5	32
挿図26	S B 2 6	33
挿図27	S B 2 7	34
挿図28	S B 2 8	35
挿図29	S B 2 9	36
挿図30	S B 3 0	37
挿図31	S B 3 1	38
挿図32	S B 3 2	39
挿図33	S B 3 3	40
挿図34	S B 3 4・3 7	41

挿図35	S B 3 5 · 3 6	42
挿図36	S D 0 2	43
挿図37	S D 0 3 ~ 0 6	44
挿図38	S D 0 7 · 0 8	45
挿図39	S D 0 9	46
挿図40	S D 1 0	46
挿図41	第Ⅱ地区柱穴・穴(1).....	47
挿図42	第Ⅱ地区柱穴・穴(2).....	48
挿図43	第Ⅱ地区柱穴・穴(3).....	49
挿図44	第Ⅱ地区柱穴・穴(4).....	50
挿図45	第Ⅱ地区柱穴・穴(5).....	51
挿図46	第Ⅲ地区全体図.....	52
挿図47	S B 4 1	53
挿図48	S M 0 1	54
挿図49	第Ⅳ地区全体図.....	55
挿図50	S B 4 2	56
挿図51	S B 4 3	57
挿図52	S B 4 4	57
挿図53	S B 4 5	58
挿図54	S B 4 6	59
挿図55	S B 4 7	59
挿図56	S M 0 2	60
挿図57	S D 1 2	60
挿図58	S D 1 3	61
挿図59	S K 0 9 ~ 1 5	63
挿図60	甕の形態分類.....	65
挿図61	座光寺中島遺跡出土土器編年表.....	66
挿図62	集落の変遷.....	68
挿図63	座光寺中島遺跡・座光寺原遺跡調査位置図.....	70

図 版 目 次

第1図	S B 1 7 · S B 1 8 出土遺物.....	73
第2図	S B 1 8 · S B 3 8 出土遺物.....	74
第3図	S B 3 8 · S B 3 9 出土遺物.....	75
第4図	S B 3 9 出土遺物.....	76
第5図	S B 4 0 · S D 0 1 · S K 0 5 · 第Ⅰ地区遺構外 · S B 1 9 出土遺物	77

第6図	SB19出土土器	78
第7図	SB19出土石器	79
第8図	SB19・SB20出土遺物	80
第9図	SB20・SB21出土遺物	81
第10図	SB21・SB22出土遺物	82
第11図	SB22・SB24出土遺物	83
第12図	SB24出土遺物	84
第13図	SB24出土石器	85
第14図	SB24・SB25出土遺物	86
第15図	SB25・SB26出土遺物	87
第16図	SB26・SB27・SB28・SB29出土遺物	88
第17図	SB29・SB30出土遺物	89
第18図	SB30・SB31出土遺物	90
第19図	SB31・SB32出土遺物	91
第20図	SB32	92
第21図	SB32・SB33出土遺物	93
第22図	SB33・SB34出土遺物	94
第23図	SB34・SB35出土遺物	95
第24図	SB35・SB36・SB37出土遺物	96
第25図	SD・柱穴・第II地区遺構外出土遺物	97
第26図	SB41出土遺物	98
第27図	SB41出土石器	99
第28図	SM01・第III地区遺構外・SB42出土遺物	100
第29図	SB42・SB43出土遺物	101
第30図	SB43・SB44・SB45出土遺物	102
第31図	SB47・SM02・第IV地区遺構外・トレンチ出土遺物	103
第32図	小型石器・管玉	104

写真図版目次

図版1	SB17 SB17炉址 SB17炉址断ち割り	105
図版2	SB18 SB18炉址 SB18炉址断ち割り SB18炉址断ち割り SB18甕出土状態	106
図版3	SB38 SB38炉址 SB38炉址断ち割り SB38入口部	107
図版4	SB39 SB39炉址 SB39炉址断ち割り SB39遺物出土状態	108
図版5	SB40 ST01(北西から) ST01(北東から)	109
図版6	SD01(西から) SD01(東から) SD11	110

図版7	SK01 SK02 SK03 SK04 SK05 SK06 SK07 SK08	…111
図版8	第I地区南西部全景（南西から） 第I地区南西部全景（北東から）	…112
図版9	第I地区北東部全景（南西から） 第I地区北東部全景（北東から）	…113
図版10	SB19 SB19炉址 SB19炉址断ち割り SB19入口部 SB19石器出土状態	…114
図版11	SB20 SB20炉址 SB20炉址断ち割り SB20入口部	…115
図版12	SB21 SB21炉址断ち割り	…116
図版13	SB22 SB22炉址 SB22炉址断ち割り SB22石器出土状態	…117
図版14	SB23 SB22・25 SB20・21・22・25	…118
図版15	SB24 SB24編物用石錐出土状態 SB24壺出土状態 SB24器台出土状態 SB24管玉出土状態	…119
図版16	SB25 SB25遺物出土状態	…120
図版17	SB26 SB26炉址 SB26炉址断ち割り	…121
図版18	SB26炭分布状態 SB26炭分布状態（部分） SB26炭分布状態（部分） SB26炭分布状態（部分）	…122
図版19	SB27 SB28	…123
図版20	SB29 SB29炉址 SB29炉址断ち割り SB29遺物出土状態	…124
図版21	SB30 SB30炉址 SB30炉址断ち割り SB30壺出土状態	…125
図版22	SB31 SB31炉址 SB31炉址断ち割り SB31入口部 SB30壺出土状態	…126
図版23	SB32 SB32炉址 SB32炉址断ち割り	…127
図版24	SB33 SB33炉址 SB33炉址断ち割り	…128
図版25	SB34 SB34炉址 SB34炉址断ち割り SB34壺出土状態 SB34筋錐車出土状態	…129
図版26	SB35 SB35炉址 SB35炉址断ち割り SB35入口部	…130
図版27	SB36 SB37	…131
図版28	SD02 SD03・04・05	…132
図版29	SD07・08 SD09 SD10	…133
図版30	第II地区南西部全景（南西から） 第II地区南西部全景（北東から）	…134
図版31	第II地区中央部全景（南西から） 第II地区中央部全景（北東から）	…135
図版32	第II地区北東部全景（南西から） 第II地区北東部全景（北東から）	…136
図版33	SB41 SM01（南東から）	…137
図版34	SM01（北東から） SM01土器棺出土状態	…138
図版35	第III地区南西部全景（北東から） 第III地区北東部全景（南西から） 第III地区北東部全景（北東から）	…139
図版36	SB42 SB43・46	…140
図版37	SB44 SB45 SB47	…141

図版38	SM02	SM02壺出土状態	142
図版39	SD12	SD13	143
図版40	SK09	SK10 SK11 SK12 SK13 SK14 SK15	144
図版41	第Ⅳ地区全景	(南西から) 第Ⅳ地区全景 (北西から)	145
図版42	第Ⅰ地区北部 (上空から)	第Ⅰ地区北部・第Ⅱ地区中央部 (上空から) 第Ⅰ地区南部・第Ⅲ地区北部 (上空から)	146
図版43	第Ⅱ地区南部 (上空から)	第Ⅱ地区中央部 (上空から) 第Ⅱ地区北部 (上空から)	147
図版44	第Ⅱ地区南部・北部 (上空から)	第Ⅱ地区南部・北部 (斜め上空南西から) 第Ⅰ地区北部・第Ⅱ地区中央部 (斜め上空南西から)	148
図版45	第Ⅰ地区南部・第Ⅲ地区北部 (斜め上空南西から)	第Ⅰ地区北部・第Ⅱ地区中央部 (斜め上空南西から) 中島遺跡全景 (斜め上空南から)	149
図版46	SB17壺	SB17石器 SB18壺 SB18石器 SB18砾石 SB18壺	150
図版47	SB38石器	SB38石器 SB38石匙 SB39壺 SB39石器 SB39石器	151
図版48	SB39石器	SB40石器 SK05石器 SB19壺 SB19石器 SB19石器	152
図版49	SB19石器	SB20壺 SB20石器 SB20石器 SB21壺 SB21壺	153
図版50	SB21石器	SB22壺 SB22石器 SB24器台 SB24石器 SB24石器	154
図版51	SB24石器	SB24石器 SB24石器 SB24管玉 SB25壺 SB25石器	155
図版52	SB26壺	SB26石器 SB26石器 SB27壺 SB29壺 SB29石器	156
図版53	SB30壺	SB30壺 SB30石器 SB31壺 SB31壺 SB31石器	157
図版54	SB32壺	SB32石器 SB32石器 SB33壺 SB33壺 SB33石器	158
図版55	SB33石器	SB34石器 SB35壺 SB35石器 SB36石器 SB37石器	159
図版56	第Ⅱ地区石器	SB41石器 SB41石器 SB41石器 SB41石器 SM01壺	160
図版57	SM01壺	第Ⅲ地区石器 SB42壺 SB42石器 SB43石器 SB43石器	161
図版58	SB44石器	SB45壺 SB45石器 SM02壺 第Ⅳ地区石器 SB22・SB35・SK11打製石鎌	162

I 経過

1. 調査に至るまでの経過

下伊那地方事務所土地改良課は、下伊那郡松川町と飯田市を結ぶ農道の新設を計画した。飯田市としては、座光寺地区の埋蔵文化財包蔵地美女遺跡・半の木遺跡・座光寺城遺跡・座光寺中島遺跡・松林遺跡・南本城々跡に影響が及ぶことが考えられた。そこで、平成6年9月29日に、長野県教育委員会文化課・下伊那地方事務所土地改良課・飯田市教育委員会社会教育課の三者による保護協議を実施した。その結果、各遺跡ともに遺跡の状況が明らかでないので、試掘調査を実施して、本調査の可否を判断することとした。なお、試掘調査および発掘調査の日程・費用については、事業の進捗状況を見極めながら、下伊那地方事務所・飯田市教育委員会の二者で調整をしていくことが確認された。

座光寺中島遺跡の試掘調査は、座光寺城遺跡・松林遺跡とともに平成8年7月10日から7月15日にかけて実施した。その結果、座光寺中島遺跡のみ造構・遺物が認められた。そこで、座光寺中島遺跡にかかるほぼ路線全体を本調査の対象とし、協議を進めていくこととなった。

試掘が終了した平成8年7月から、本調査の時期と費用について下伊那地方事務所・飯田市教育委員会の二者で調整を進め、平成8年9月から平成9年3月にかけて発掘調査を実施することとなり、平成8年9月20日付で遺跡発掘調査の業務委託契約書を締結した。なお、遺跡北東端部については土地交渉の進捗状況から調査できなくなり、平成9年度で調査することとなった。そこで、平成9年1月29日に変更委託契約書を締結した。

平成9年度当初から、遺跡北東部の未調査箇所の発掘調査について協議を重ね、平成9年7月7日付で埋蔵文化財委託契約書を取り交わした。

調査が終了した段階から整理作業及び報告書刊行の日程及び費用について協議を進め、平成10年度で実施することとなった。平成10年7月28日に委託契約書を締結した。

2. 調査の経過

1) 平成8年度調査

平成8年9月27日に重機を導入して第Ⅱ地区北西側調査区及び第Ⅰ地区南東側調査区の拡張を実施し、10月7日には作業員を使っての本調査を開始した。調査区が耕作道によって4箇所に分かれ、それぞれで調査廃土の処理をしなければならなかったために、何回かにわたって重機を使って土の移動を実施した。それぞれの調査区で竪穴住居址・溝址等が検出され、順次掘り下げの調査を進めた。並行して写真撮影・図面作成作業を済ませ、平成9年1月16日には現場における作業が終了した。その後、飯田市考古資料館で図面・写真等の基本整理を実施し、平成9年3月21日に完了報告書を提出した。

2) 平成9年度調査

平成9年7月31日・8月1日に重機を使って第IV地区の拡張を実施し、8月4日から作業員による調査を開始した。豊穴住居址・方形周溝墓等を検出して調査を進め、並行して写真撮影・測量作業を実施した。8月27日には作業員を使っての作業が終了し、29日までには現場におけるすべての作業が終了した。その後、飯田市考古資料館で図面・写真等の基本整理を実施し、平成9年9月30日に実績報告書を提出した。

3) 平成10年度調査

整理作業は平成10年8月から作業を開始した。飯田考古資料館において、出土遺物の水洗・注記・接合・復元作業、遺物実測・写真撮影作業、第2原図の作成・トレース・版組等を行い、原稿を執筆して本発掘調査報告書を作成した。

3. 調査組織

1) 調査

調査担当者	山下 誠一					
調査員	佐々木嘉和 下平 博行 西山 克己	吉川 豊 伊藤 尚志	馬場 保之 上沼 由彦	吉川 金利 (平成8年度)	福澤 好見	
作業員	新井 幸子 岡島 豆 木下 義男 北川 彰 小林 千枝 坂下やすみ 高橋 恵子 田中 薫 中野満里子 林 員子 樋本 宣子 細田 七郎 松下 博子 三浦 厚子 吉川 正実	池田 幸子 岡田 直人 木下 貞子 熊谷 義章 小林 定雄 清水 三郎 滝上 正一 塙原 次郎 仲村 信 原田四郎八 福沢 育子 牧田 許江 松下 光利 森藤美知子 柳沢 謙二 吉川紀美子	伊東 裕子 金井 照子 木下 力弥 小平 啓美 齊藤 徳子 清水 恒子 竹本 常子 仲田 昭平 中平けい子 服部 光男 福沢 幸子 牧内 修 松井 明治 柳沢 謙二 山田 康夫	市瀬 長年 唐沢古千代 吉地 武虎 小池金太郎 佐々木美千枝 代田 和登 竹村 定満 中田 恵 鳴海 紀彦 久田 誠 福沢トシ子 牧内 八代 正木実重子 南井 規子	牛山きみゑ 木下 早苗 北沢 豪雄 小島 妙子 佐々木 卓 菅沼和歌子 竹村 和子 中野 充夫 林 悟史 久田きぬゑ 古根 素子 松本 恵子 吉川 和夫	

2) 指導

長野県教育委員会

3) 事務局

飯田市教育委員会社会教育課（平成8年6月30日まで）

横田 穆（社会教育課長）

小林 正春（△ 文化係長）

吉川 豊（△ 文化係）

山下 誠一（△ △ ）

馬場 保之（△ △ ）

吉川 金利（△ △ ）

福澤 好晃（△ △ ）

下平 博行（△ △ ）

伊藤 尚志（△ △ ）

岡田 茂子（△ 社会教育係）

飯田市教育委員会博物館課（平成8年7月1日から）

矢沢 与平（博物館課長 平成9年3月31日まで）

小畠伊之助（博物館課長 平成9年4月1日から）

小林 正春（△ 埋蔵文化財係長）

吉川 豊（△ 埋蔵文化財係）

山下 誠一（△ △ ）

馬場 保之（△ △ ）

吉川 金利（△ △ ）

福澤 好晃（△ △ ）

下平 博行（△ △ ）

伊藤 尚志（△ △ ）

牧内 功（△ 庶務係）



挿図1 座光寺中島遺跡位置図

II 遺跡の環境

1. 自然環境

飯田市座光寺地区は市街地の北東4kmにあり、北東を下伊那郡高森町、南東は天竜川を挟んで同喬木村、南西を飯田市上郷と接しており、飯田市の北端部に位置している。

飯田市は赤石山脈と木曽山脈に挟まれた伊那谷の南端にあたり、両山脈の間を天竜川が南流する。天竜川による典型的な河岸段丘がみられるとともに、山脈の形成に関わる断層地塊運動に伴ない盆地・大きな段丘崖が形成されており、複雑な段丘地形を呈している。

座光寺地区の場合、断層運動でつくられた段丘で大きく上段と下段に分けられる。上段は木曽山脈の山裾部から大規模な扇状地が発達し、扇端から段丘縁辺にかけては小河川の開析・湧水等微地形の変化が著しい。特に地区を区画する北側の南大島川、南側の土曾川・橋ヶ洞川による扇状地の形成、開析谷の浸食は著しい。下段は数段の小段丘からなり、恒川遺跡群が立地する上位の段丘面の場合、北側は南大島川から扇状地が発達するのに対し、南側は比較的段丘面がよく残る等複雑な微地形を呈する。

座光寺中島遺跡は飯田市座光寺地区の中央部に所在する。大規模な扇状地が発達する上段の南東部に位置し、地形的には扇端から段丘先端部にあたる。小河川などに解析される箇所を除いては平坦面が広がっており、その520×180mの範囲が座光寺中島遺跡となる。

微地形をみると、北東側は西の沢川によって開析された谷が北西から南東方向に浸食を深めながら続いている。谷を挟んだ東側の段丘面には稻荷坂遺跡・座光寺城遺跡がある。南西側は南北方向に広がる狭い湿地帯の窪地で地形が画されており、その西側には松林遺跡がある。北側は江戸時代に築造された大堤溜池があり、その付近は明確な段差は認められないが段丘崖となり、北西段丘上には座光寺原遺跡が立地する。

2. 歴史環境

座光寺地区は土器・石器等の遺物や古墳の多いことで古くから知られており、埋蔵文化財包蔵地が濃密に分布している。こうした文化財に表われた先人達の活動の証左は旧石器時代末までさかのばる。前述の自然環境で概観した地形的特徴が当地区の遺跡立地に大きく関わっており、上段・下段で遺跡の分布や性格が異なっている。また、発掘調査された遺跡が多く、全時代にわたって具体的な様相を描くことができる。

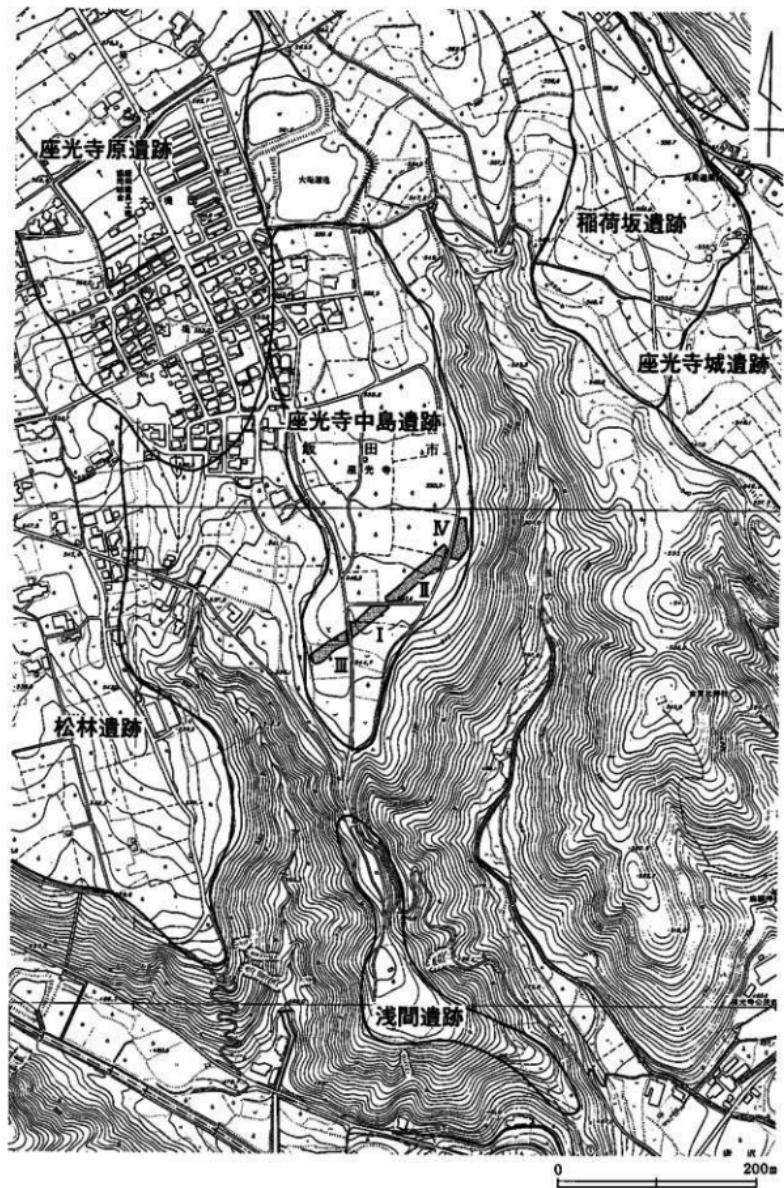
上段は縄文時代から弥生時代にかけての遺跡が多く、とくに山麓部には縄文時代の遺跡が集中し、鳥居龍藏の調査で知られた大門原遺跡等がある。東面した緩傾斜の扇状地扇央部分にあたり、大規模な集落址の存在がうかがえる。平成8年度に農道改良に伴い発掘調査が実施されており、縄文時代中期中葉から後葉の伊那谷有数の大集落が広がっていることが確認されつつある。扇端から上段の段丘崖にかけては弥生時代後期の遺跡が分布する。高燥な台地上に生産基盤を求めた該期に共通する現象であり、具

体的には人口増と生産手段の発達が背景と考えられる。昭和37年、前年の梅雨前線による集中豪雨（36災）の災害復旧工事用採土のため調査された弥生時代後期前半の座光寺原遺跡（今村1967）、昭和50年農業構造改善事業に伴ない道路部分が遺構確認調査された弥生時代後期後半の座光寺中島遺跡（座光寺考古学研究会1976）等該期の典型的な集落があるといえる。段丘崖上部には北本城古墳をはじめとする古墳および中世の山城2つがある。後者は北本城と南本城であり、小河川に開析された複雑な地形を生かしている。

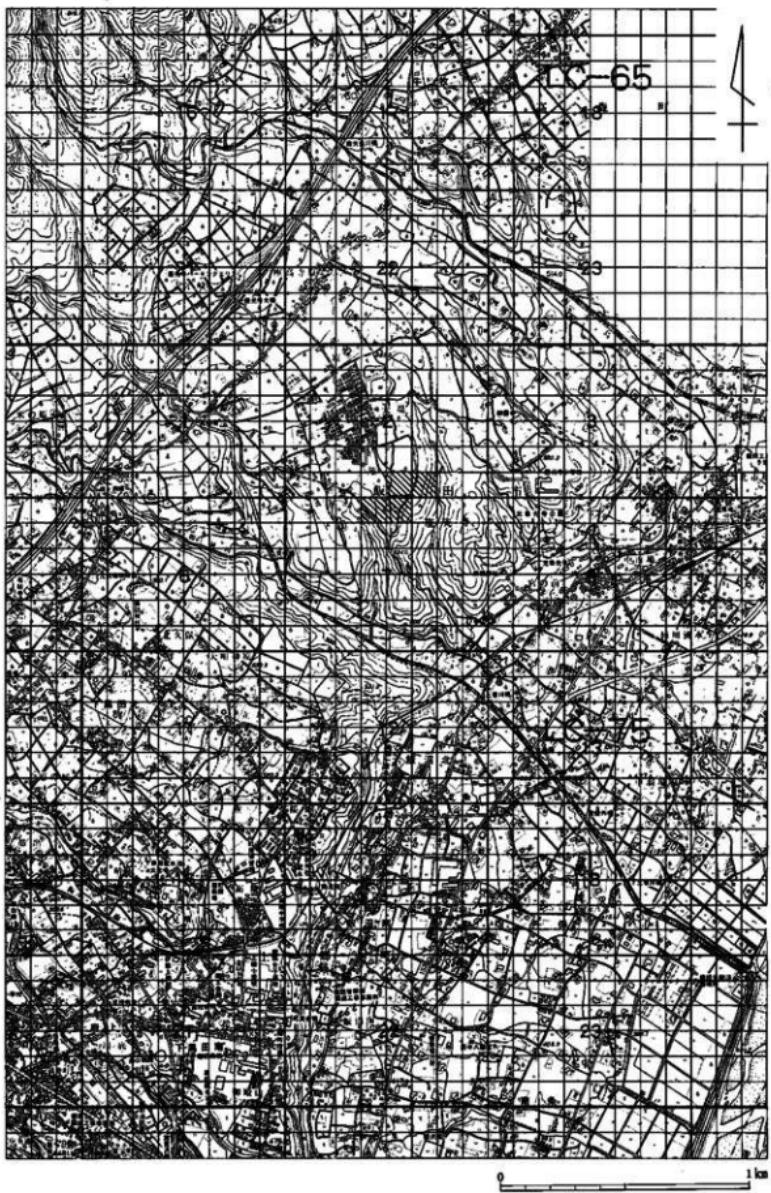
下段地帯は縄文時代から近世にかけての遺跡が複合しており、時代毎占地した地点を若干異にしている。縄文時代の集落は主に南大島川から発達した扇状地上に立地する。縄文時代中期を除く他時期は遺物を中心で集落の実態は明確でないが、資料が十分でない各期にあって比較的良好な資料を提示している。中期は座光寺バイパス路線内の新井原遺跡で後葉の大規模な集落の一部が調査されている（飯田市教育委員会1986）。弥生時代中期から古墳時代前期にかけては弥生時代後期に一時的に拡大するものの基本的に南大島川の扇状地上に位置し、古墳時代後期から平安時代の集落は扇状地および南側の段丘面に拡大する。一方、古墳の分布は該期集落の外縁の、高岡1号古墳を中心とする北部の扇状地扇頂付近および遺跡群東側の段丘崖上にみられる（飯田市教育委員会1986）。これまで調査された古墳は新井原12号古墳・新井原古墳群・畦地1号古墳・高岡3号古墳・高岡4号古墳（飯田市教育委員会1990）・ナギジリ1号古墳（飯田市教育委員会1998）等があり、現在までに調査されずに消滅した古墳は数多くに上る。

昭和51年度から実施された一般国道153号座光寺バイパス建設に先立つ恒川遺跡群発掘調査の結果、大型掘立柱建物址群や硯・鉄鎌・和同開珎銀錢等の官衙的遺構・遺物が多数発見されている（飯田市教育委員会1986）。そして、昭和57年度から飯田市教育委員会が継続実施している範囲確認調査の中で、古代「伊那郡衙」が追究されてきた。その結果、平成6年度の調査で正倉となる大型の掘立柱建物址が調査され、なお郡衙の中心部は不明であるものの、具体的地点をあげて推定される段階に至った。同時に遺跡群内の各地点が果たした役割が遺構分布状況から描出されてきている。また、バイパス周辺の諸開発に先立つ緊急調査の結果、田中・倉垣外地籍・新屋敷地籍周辺の遺構分布が明らかにされつつある（飯田市教育委員会1988・1991A・1991B）。

終わりに、座光寺中島遺跡の調査について触れておく。昭和50年に座光寺中島遺跡に農業構造改善事業による農道が新設されることとなった。それに伴う立会調査が、座光寺考古学研究室と下伊那教育会考古学委員会によって実施され、それを契機として近接地の一部を発掘調査した。立会調査では遺構の確認で終了しており、また発掘調査についても正式な調査報告がされていないため詳細は不明であるが、合計16軒の堅穴住居址が確認されている（下伊那誌編纂會1991・座光寺考古学研究会1976）。この調査による発掘調査を農道調査地点とする。よって、今次調査は第2次調査であり、広域農道調査地点とする。



挿図2 座光寺中島遺跡調査位置図及び周辺図



挿図3 基準メッシュ区画調査位置図

III 調査結果

1. 調査の方法と概要

調査区は遺跡内を通過する農道によって4箇所に分かれた。よって、それぞれにI～IVのローマ数字を付して調査にあたることとした。なお、第I地区は1987-4地番、第II地区1977-2地番、第III地区1994-3地番、第IV地区は2494地番が中心となる。

測量用の基準杭設置は、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づいて、㈱ジャステックに委託して実施した。なお、基準メッシュ図の区画については「三尋石遺跡 三尋石(II)遺跡」(飯田市教育委員会1996)に詳しく記述されているので、そちらを参照していただきたい。本調査地の区画は挿図3で示したように第I地区がLC75-2-44・45、第II地区がLC75-7-4、第III地区がLC75-7-3・7-4、第IV地区がLC75-2-45である。

今次調査で検出された遺構は以下のとおりである。

竪穴住居址………31軒

掘立柱建物址………1棟

方形周溝墓………2基

溝 址………13本

土 坑………13基

穴・柱穴………多数

調査区のはば全面で耕作による擾乱を受けており、一部は竪穴住居址の床面より深く掘られているものもあった。地表面から遺構確認面までが極めて浅く、かつ果樹園地帯のために深耕して施肥するという事情があるにせよ、残念なことであった。

2. 基本層序

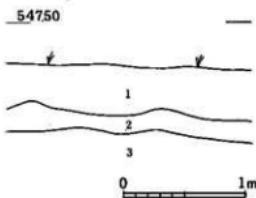
第I地区SB17の南西側、用地外との南東に面する壁面の層序を挿図4で示した。

1層：暗褐色(10YR3/4CL)、耕土

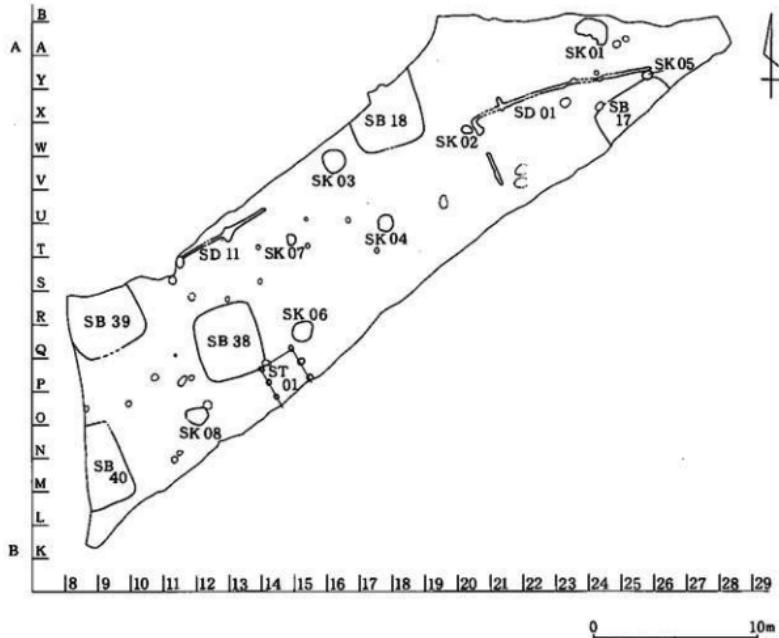
2層：褐色(10YR4/6CL)

3層：にぶい黄褐色(10YR5/4L)、基盤

遺構検出面は基盤の3層上面で、容易に検出できた。段丘上の遺跡立地のため地区毎に基本層位に変わりはないが、台地先端部の第III・IV地区は表土が薄く、2層がなくして基盤の遺構検出面まで20cm程度であった。



挿図4 基本層序



挿図5 第I地区全体図

3. 遺構と遺物

1) 第I地区

(1) 竪穴住居址

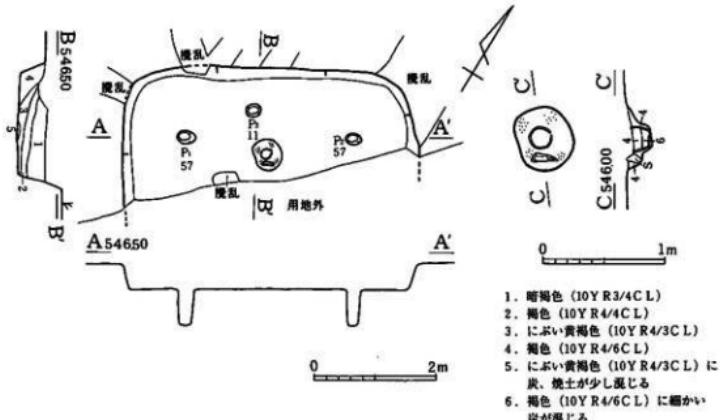
① SB 17 (挿図6・第1図・図版1・46)

遺構 BX25を中心にして検出し、南東側が用地外のため全体の1/3程を調査した。SK 05を切る。主軸に直交する方向の長さが4.8mを測る隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN32°Wを示す。壁高は45~34cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。床面はほぼ平坦で、全面がたたき状に堅くきわめて良好であった。調査終了後に床面の掘り下げ調査を実施したが、貼り床や掘り方はみられなかった。主柱穴はP 1・P 2で、いずれも主軸に直交する方向に細長く検出され、割材使用の柱が考えられる。プラン検出時に、P 1は土がやわらかくわかりやすいのに対し、P 2は柱掘り方のへりがわずかに高まり堅く分かりにくかった。住居址廃棄時の違いがあらわれているのかもしれない。炉址は北西側主柱穴中間やや

内側寄りに位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を $49 \times 44\text{cm}$ の楕円形に掘りくぼめ、壺の胴部を埋め、別個体の壺の破片を使って底としていた。土器の周辺に焼土が認められ、土器内部の底付近の土には細かな炭が混じっていた。

遺物 土器・石器がある。1-6が炉址の埋設土器で、1-5が炉址の底にしていた個体である。弥生土器壺(1-1~4)・壺(1-5・6)・横刃型石器(1-7)がある。

出土遺物から弥生時代後期後半に位置づけられる。



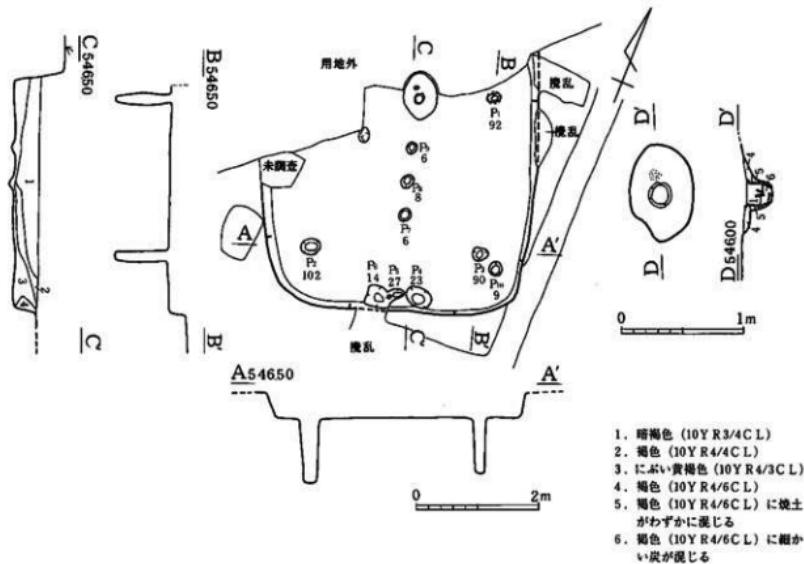
挿図6 SB 17

② SB 18 (挿図7・第1・2図・図版2・46)

遺構 BX17を中心にして検出し、北西側が用地外のため全体の2/3程を調査した。主軸に直交する方向の長さが4.4mを測る隅丸方形の堅穴住居で、主軸方向はN11°Wを示す。壁高は49~36cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。床面はほぼ平坦で、全面がたたき状に堅くわめて良好であった。調査終了後に床面の掘り下げ調査を実施したが、貼り床や掘り方はみられなかった。主柱穴はP1~P3で、P1・P2は主軸に直交する方向に細長く検出され、P3は主軸方向に細長く検出され、いずれも割材使用の柱が考えられる。P4~P6は南壁下中央にあり、入り口部と考えられる。P5は、斜めに掘られて壁面・底面共たたき状に堅く、階段用と考えられる。P7~P9は入り口部から炉址に直線的に並び、壁面・底面共にたたき状に堅く、間仕切りと考えられる。P10も同様に堅かった。炉址は西側主柱穴中間に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を $78 \times 52\text{cm}$ の楕円形に掘りくぼめ、底部を欠く壺を埋め、別個体の壺の破片を使って底としていた。壺の内部には床面上の個体と接合する壺底部が入れ子状になつてあり、底付近の土には細かな炭が混じていた。

遺物 土器・石器がある。1-9は入口部北側の床面上から出土し、炉址内部にあった底部と接合した。1-10は炉址の埋設土器である。弥生土器壺(1-8)・同壺(1-9~14, 2-1~6)・砥石(2-7)があり、2-6は台付壺となる。

出土遺物から弥生時代後期後半に位置づけられる。



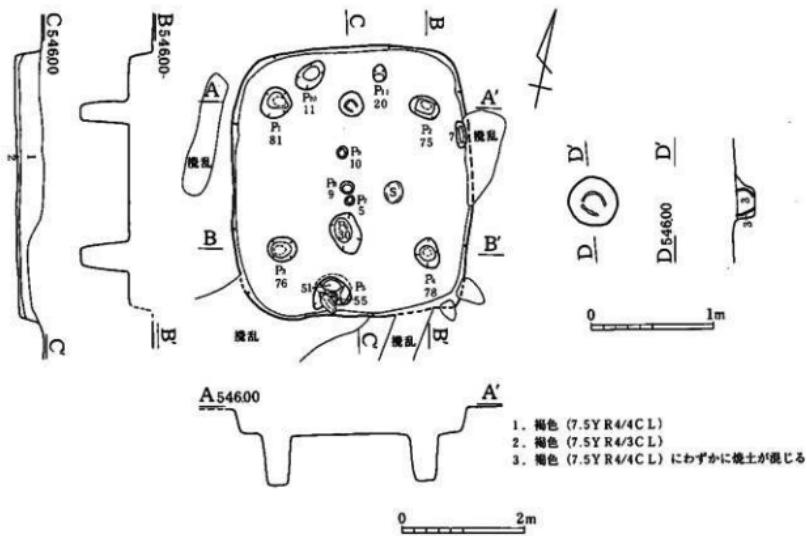
插図7 SB 18

③ SB 38 (挿図8・第2・3・32図・図版3・46・47)

遺構 BQ14を中心にして検出し、全体を調査した。弥生時代後期のST01と重複する。4.2×3.8mの隅丸方形の竪穴住居で、主軸方向はN13°Wを示す。壁高は41~35cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。床面はほぼ平坦で、全面がたたき状に堅くわめて良好であった。調査終了後に床面の掘り下げ調査を実施したが、貼り床や掘り方はみられなかった。主柱穴はP1~P4で、いずれも主軸に直交する方向で細長く検出され、割材使用の柱が考えられる。平面図では柱掘り方を示したので、点線で柱痕検出の形を示した。南壁下に位置するP5は、斜めに掘られる穴を伴い入り口部と考えられる。P6には焼成粘土塊が入れられていた。P7~P9は入り口部から炉址に直線的に並び、間仕切りと考えられる。P5東側床面上には台石が認められた。炉址は北側主柱穴中間に位置する土器埋設炉で、床面を35×40cmの円形に掘りくぼめ、壺の胴部を逆位で埋めていた。周辺の土にわずかに焼土が混入していたが、顕著な箇所はみられなかった。

遺物 土器・石器があり、石器が比較的多い。2~10は炉址の埋設土器である。弥生土器壺(2~8~11)・壺(2~12~20)・有肩肩状形石器(2~21~22)・3~1)・抉入打製石包丁(3~2)・横刃型石包丁(3~3)・偏平片刃磨製石斧(3~4)・砥石(3~5~6)・敲打器(3~7)・石匙(32~4)がある。2~8~10の頸部から胴部の文様は器面が荒れて確認できなかった。

出土遺物から弥生時代後期後半に位置づけられる。



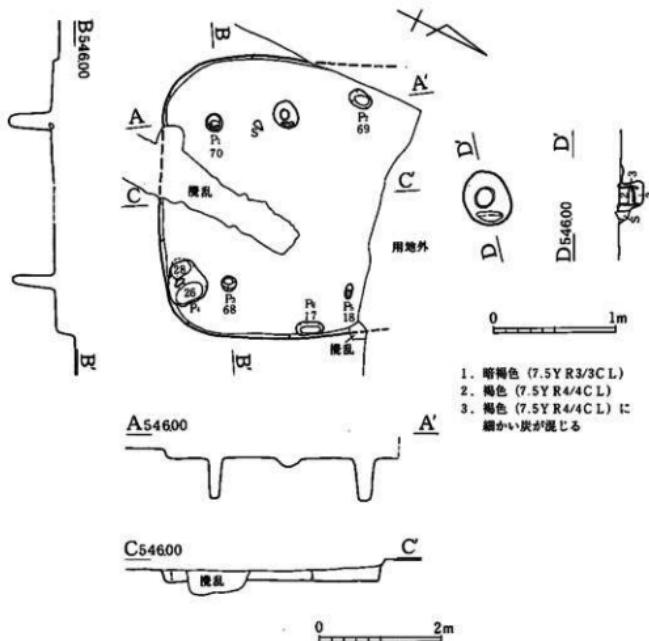
挿図8 SB 38

④ SB 39 (挿図9・第3・4図・図版4・47・48)

遺構 BR 9を中心にして検出し、北側が用地外で全体の3/4程を調査した。主軸方向の長さが4.5mを測る隅丸方形の竪穴住居で、主軸方向はN122°Wを示す。壁高は30~9cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。床面は細かな凹凸があり、たたき状に堅いがやや状態は悪い。調査終了後に床面の掘り下げ調査を実施したが、貼り床や掘り方はみられなかった。主柱穴はP1~P3で、北東隅主柱穴は用地外にかかるて検出できなかった。P3は主軸に直交する方向で14×11cmに細長く検出され、割材使用の柱が考えられる。南東隅寄りに位置するP4は、二つの穴があって入り口部と考えられる。炉址は西側主柱穴中に位置する炉線石を有する土器埋設炉で、床面を42×37cmの楕円形に掘りくぼめ、底部を久く甕を埋め、別個体の甕の破片を使って底としていた。甕内部の底付近の土には細かな炭が混じっていた。

遺物 土器・石器があり、4-1は炉址の埋設土器である。弥生土器甕(3-8~13、4-1~7)・高壺(4-8)・横刃型石包丁(4-9)・横刃型石器(4-10)・磨製石斧(4-11)・砥石(4-12)・敲打器(4-13)がある。

出土遺物から弥生時代後期後半に位置づけられる。



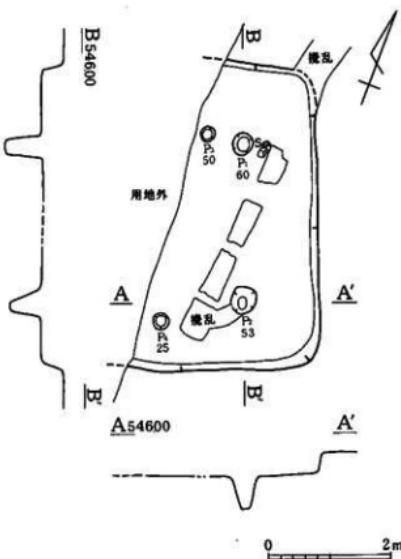
挿図9 SB 39

⑤ SB 40 (挿図10・第5図・図版5・48)

造構 BM 9を中心にして検出し、西側が用地外で全体の1/2程を調査した。南北方向の長さが5.0mを測る隔丸方形の竪穴住居址である。壁高は40~33cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。床面はたたき状に堅いがやや状態は悪く、ミニバックによる搅乱が認められる。調査終了後に床面の掘り下げ調査を実施したが、貼り床や掘り方はみられなかった。主柱穴はP 1~P 2で、P 2は東西方向に16×13cmに細長く検出され、割材使用の柱が考えられる。その他で役割が特定できる穴はない。

遺物 出土量は少なく、弥生土器壺(5-1~6)・甕(5-7~9)、打製石斧(1-10・11)・有肩扁状形石器(5-12)・敲打器(5-13)がある。

出土遺物から弥生時代後期後半に位置づけられる。



挿図10 SB 40

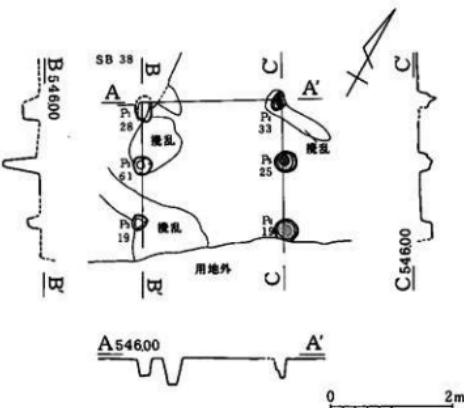
(2) 据立柱建物址

① ST 01 (挿図11・図版5)

遺構 B P.14を中心として検出し、南東側が用地外で一部調査できなかつた。1×1mの据立柱建物址で、桁行方向は N31°Wを示す。柱間は桁行1.0m・梁行2.3mを測る。柱掘り方は円形もしくは楕円形を呈し、径36~20cmを測る。P 4・P 5・P 6の底面は、弥生時代後期竪穴住居址と同様なたたき状に堅いものであった。南東側が未調査のため確定できないが、1×2mの規模で、調査箇所ではほぼ全体が調査できたとの把握も可能である。

出土遺物はない。

遺跡や遺構の状況から弥生時代後期に位置づけられる。



挿図11 ST 01

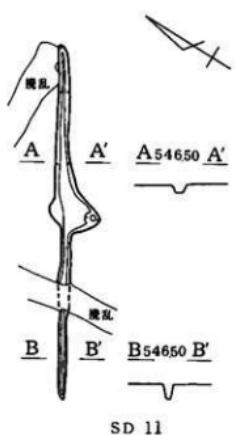
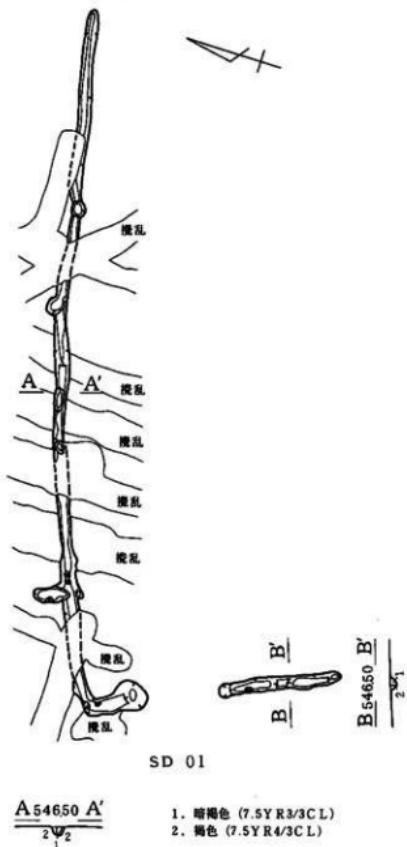
(3) 溝 壴

① S D 0 1 (挿図12・第5図・図版6)

遺構 B V21～B X25にかけて検出し、一部擾乱を受けてはいるが、ほぼ全体を調査した。全体形は幅20cm前後的小溝がL字状に確認され、一部では断絶箇所がある。北溝は長さ11.3m・幅24～16cm・深さ30～6cmを測り、溝内に何箇所かの小穴が認められる。西溝は長さ2.0m・幅24～20cm・深さ18～10cmを測り、断絶箇所は幅1.2mとなる。いずれの断面形も逆台形をなす。

遺物 弥生土器3片があり、裏1点(5-14)を拓影で示した。

遺跡や遺構の状況から弥生時代後期に位置づけられる。



挿図12 S D 0 1 - 1 1

② SD 11 (挿図12・図版6)

遺構 BU11～BU14にかけて検出し、一部擾乱を受けているが、ほぼ全体を調査した。ほぼ直線的な平面形をなし、長さ5.7m・幅32～10cm・深さ22～7cmを測り、長軸方向はN60°Eを示す。断面形は逆台形をなす。

遺物 弥生土器片6点があるが、図示・拓影できる個体はない。

遺跡や遺構の状況から弥生時代後期に位置づけられる。

(4) 土 坑

① SK 01 (挿図13・図版7)

遺構 BI23・24で検出し、上層が擾乱を受けているが、全体を調査した。194×102cmの不整楕円形を呈し、深さ55～8cmを測る。土層は自然埋没の状況を示し、断面形は逆台形をなす。

遺物 土器片1点がある。

② SK 02 (挿図13・図版7)

遺構 BW20で検出し、上層が擾乱を受けているが、全体を調査した。60×45cmの不整楕円形を呈し、深さ38cmを測る。断面形は西側が袋状をなし、東側は途中で段をもつ。

遺物 土器片3点がある。

③ SK 03 (挿図13・図版7)

遺構 BV16で検出し、上層が擾乱を受けているが、全体を調査した。136×130cmの不整円形を呈し、深さ115cmを測る。底面は平坦で、中央部に深さ20cmの小穴が認められる。断面形は逆台形をなす。

出土遺物はない。

④ SK 04 (挿図13・図版7)

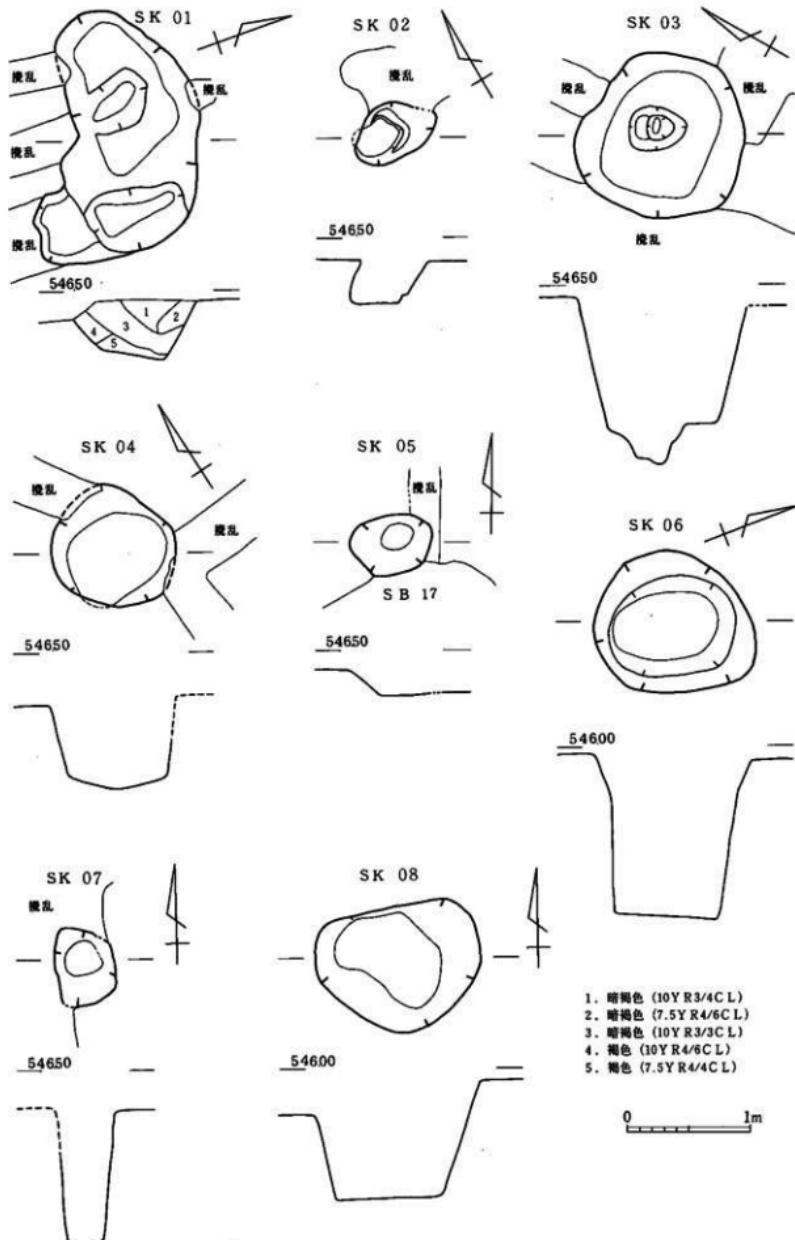
遺構 BT・U17で検出し、上層が擾乱を受けているが、全体を調査した。100×90cmの不整円形を呈し、深さ72cmを測る。底面は船底状を呈し、断面形は逆台形をなす。

出土遺物はない。

⑤ SK 05 (挿図13・図版7)

遺構 BY25で検出し、上層が擾乱を受けているが、全体を調査した。68×48cmの不整楕円形を呈し、深さ24cmを測る。底面は平坦で、断面形は逆台形をなす。

遺物 弥生土器片8点がある。



插図13 SK 01~08

⑥ SK 06 (挿図13・図版7)

遺構 B Q・R 15で検出し、全体を調査した。130×124cmの不整円形を呈し、深さ130cmを測る。底面は平坦で、断面形は逆台形をなし、上層で稜をもつ。

出土遺物はない。

⑦ SK 07 (挿図13・図版7)

遺構 B T 14・15で検出し、上層が搅乱を受けているが、全体を調査した。66×44cmの丸みを帯びた長方形を呈し、深さ107cmを測る。底面は平坦で、断面形は柱状をなす。

出土遺物はない。

⑧ SK 08 (挿図13・図版7)

遺構 B O 11・12で検出し、全体を調査した。134×100cmの不整楕円形を呈し、深さ56cmを測る。底面は平坦で、断面形は逆台形をなす。

出土遺物はない。

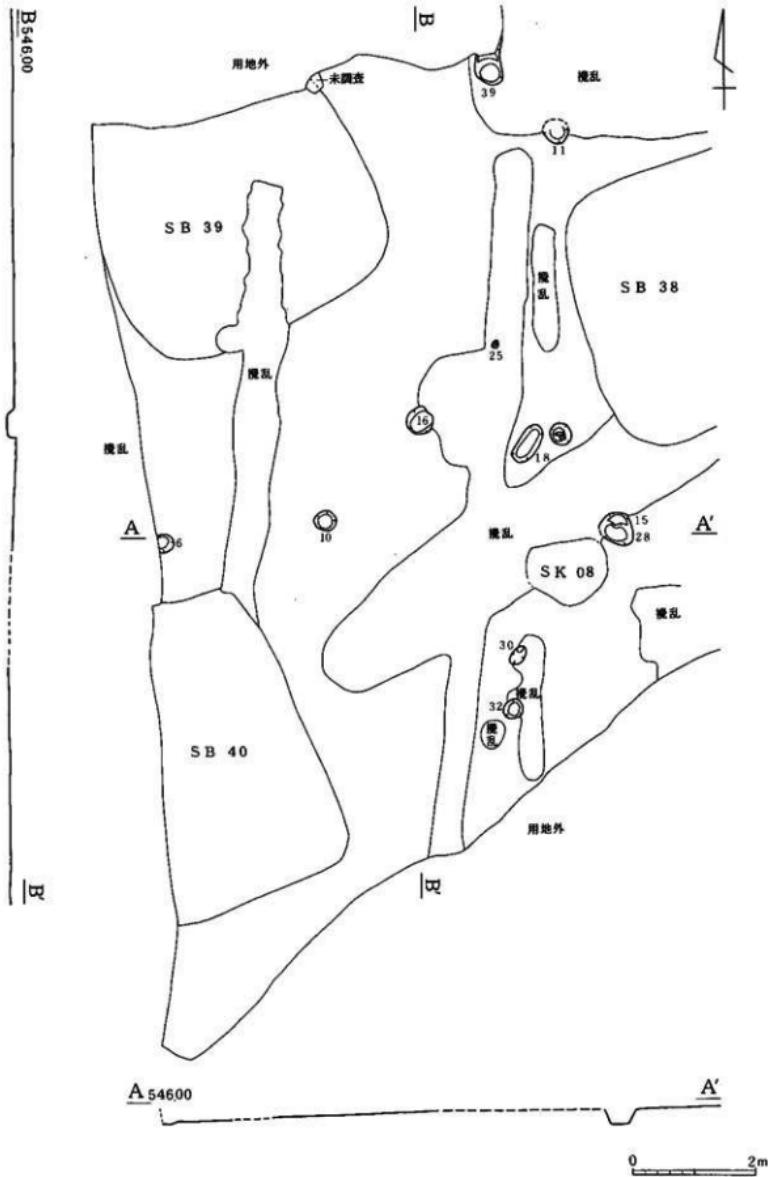
以上が第I地区で検出された土坑である。時期を決定できる遺物の出土がないので、詳細な位置づけが困難はあるが、遺構の状況などからいくらかの判断を下すことはできる。比較的深い掘り方をもつSK 03・06は、縄文時代の落とし穴の可能性が高い。SK 03の底面には逆茂木を埋めたと考えられる小穴を伴っていたのも判断材料となった。覆土の様相も弥生時代の堅穴住居址とは異なっていたので、縄文時代とする根拠とした。その他の土坑も、弥生土器片が出土したSK 05を除けば覆土の様相は弥生時代とは異なっており、縄文時代に位置づけることが可能と考える。ただし、SK 01は遺構の状況が不規則であり、人為的な土坑でない可能性がある。

(5) 柱穴・穴

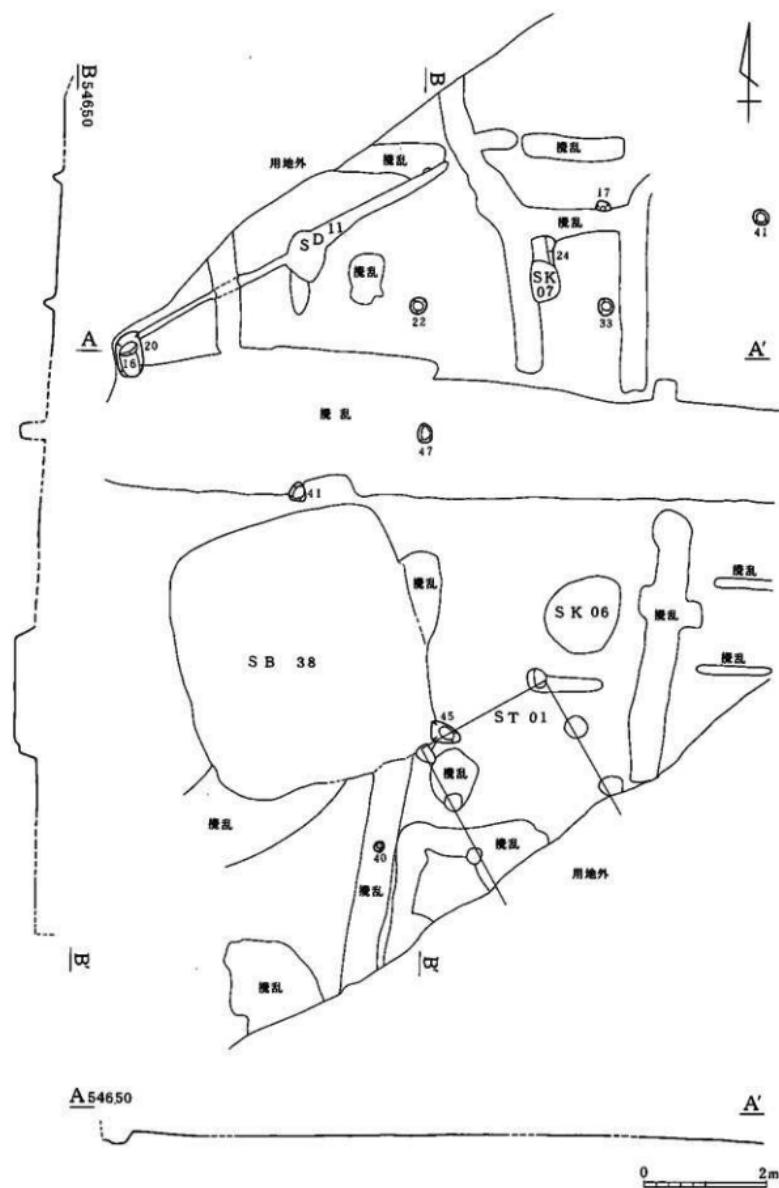
第I地区で確認された柱穴・穴は比較的少なく、挿図14～17で示した。搅乱が多く把握できなかった柱穴・穴の存在も考慮に入れる必要がある。特別な集中箇所はないが、調査区南西側に多い傾向は指摘できる。

(6) 遺構外出土遺物

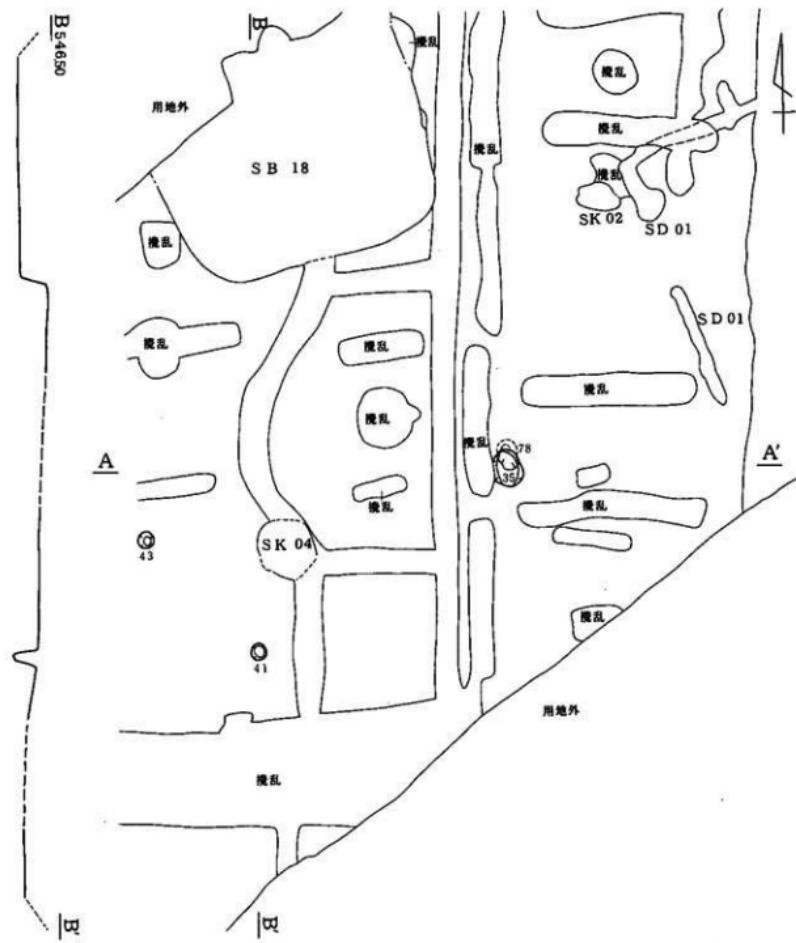
遺構に直接びつかない遺物はきわめて少なく、弥生土器片42点があり、壺1点(5-16)を拓影で示した。こうした遺物についても、遺構検出作業中に出土し、遺構に所属できなかつたものが大半と考えられる。



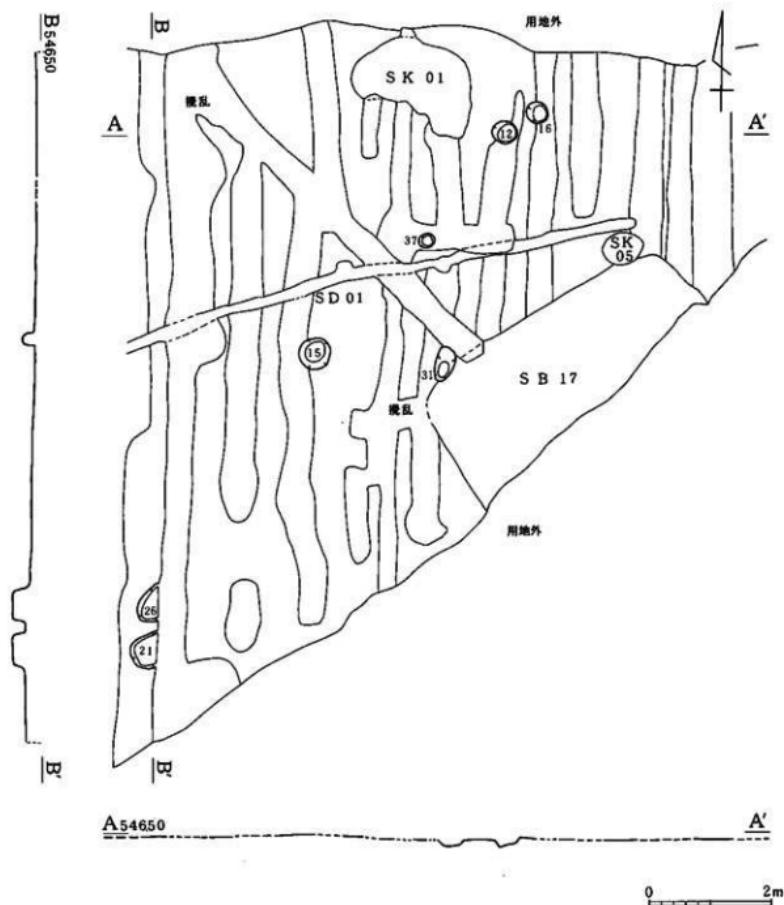
挿図14 第Ⅰ地区柱穴・穴(1)



插図15 第I地区柱穴・穴(2)



擗図16 第I地区柱穴・穴(3)



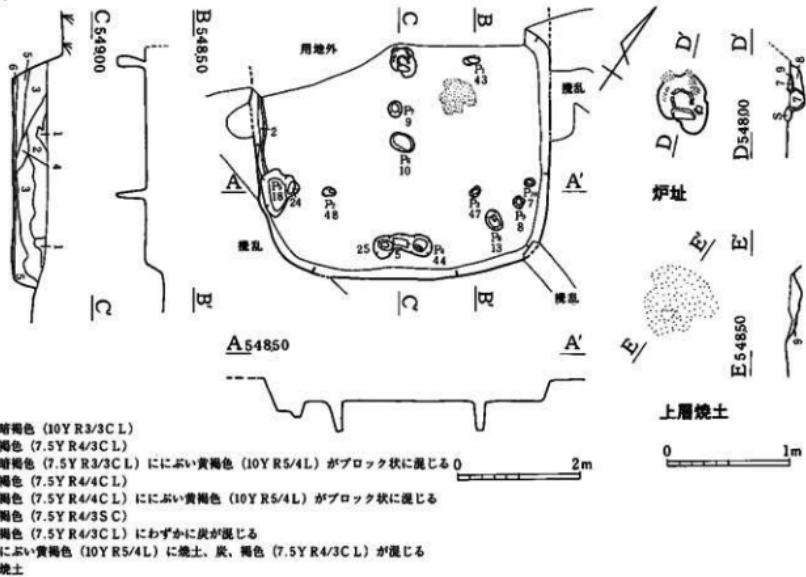
挿図17 第Ⅰ地区柱穴・穴(4)

2) 第Ⅱ地区

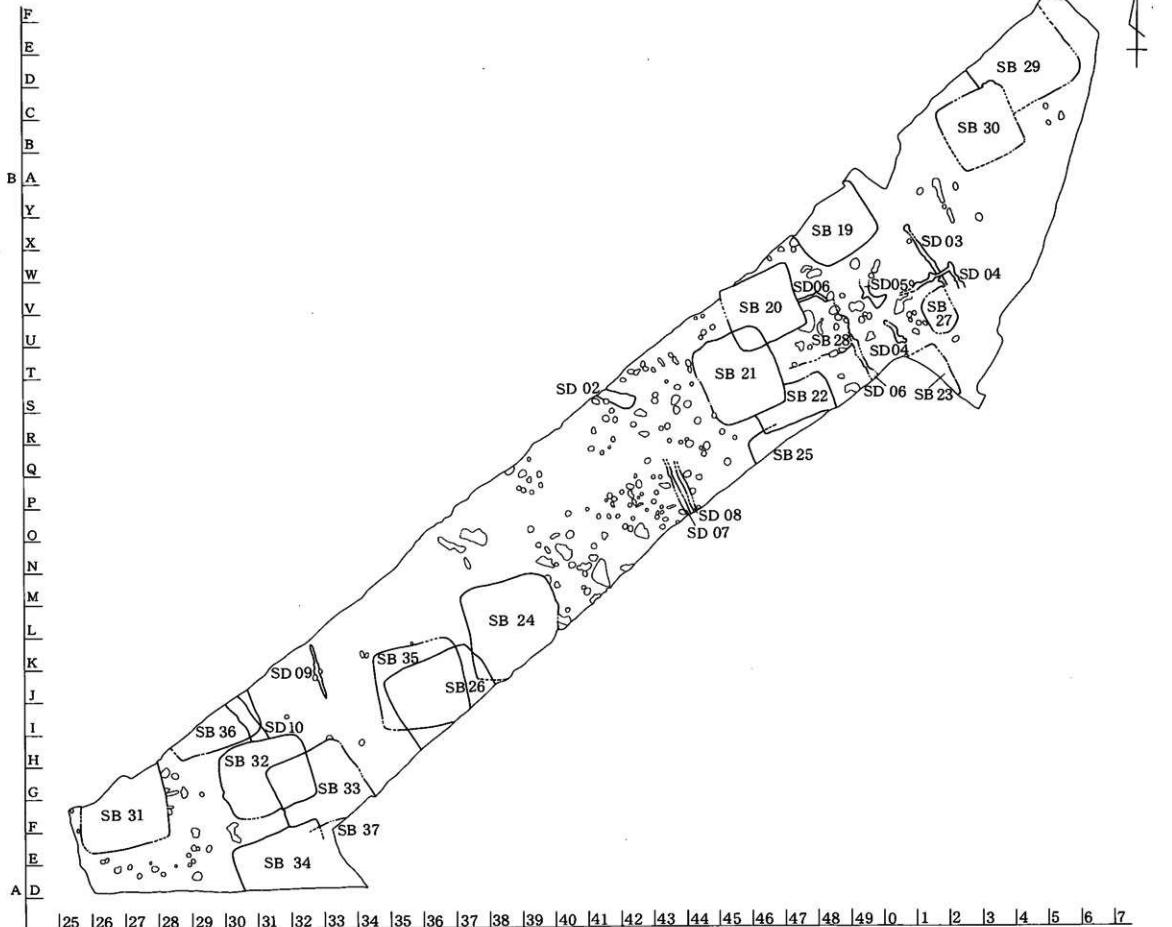
(1) 穫穴住居址

① SB 19 (挿図18・第5~8図・図版10・48・49)

遺構 AX49を中心にして検出し、北西側が用地外で全体の3/4程を調査した。主軸方向に直交する方向の長さが5.2mを測る隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN34°Wを示す。壁高は63~35cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。南西壁下の一部に周溝が認められ、幅16~8cm・深さ2cm前後を測る。床面はP3・P6より北側の部分は凹凸がみられるが、たたき状に堅くわめて良好である。調査終了後に床面の掘り下げ調査を実施したが、貼り床や掘り方はみられなかった。主柱穴はP1~P3で、北西側主柱穴は用地外にかかって検出できなかった。いずれも主柱穴に直交する方向に細長く検出され、割材使用の柱が考えられる。南東壁下中央に位置するP4は、二つの穴があり、南西壁南隅寄りに位置するP5は小穴を伴い、いずれも入り口部と考えられる。入り口を付け替えたものがあるとは住居址を建て替えたのかもしれない。P6・P7は壁面・底部ともにたたき状に堅く、間仕切りと考えられる。炉址は北西側主柱穴中間に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を40×37cmの不整形に掘りくぼめ、底部を欠く壺を埋めていた。壺の周辺には焼土が比較的多く認められ、壺内部の土には細かな炭がわずかに混じっていた。



挿図18 SB 19



挿図19 第II地区全体図

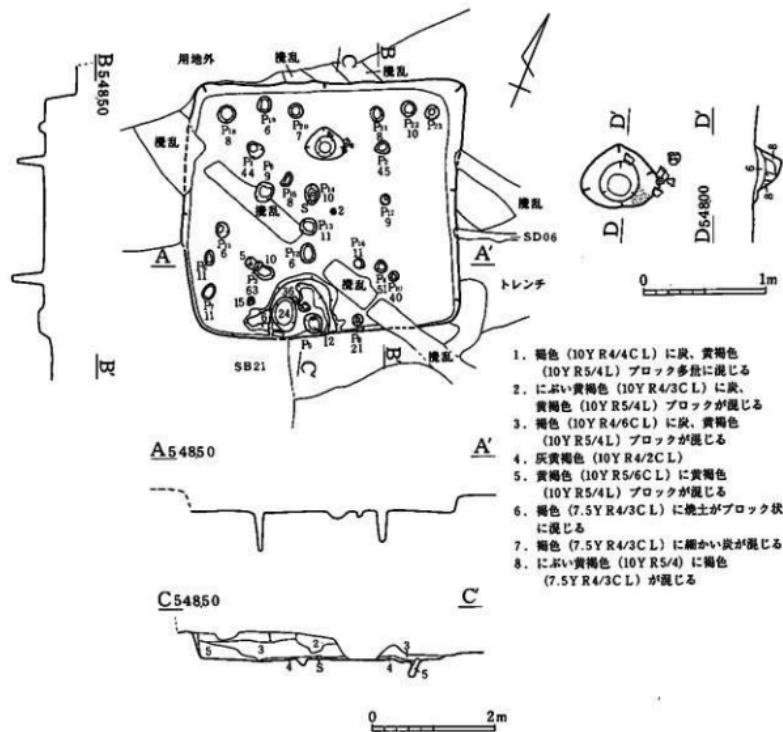
0 10m



なお、同一図版で示した焼土は床面より50cm上の覆土上層中に認められたもので、直径60cm前後の不整形を呈し、厚さ10cm程認められた。形状からは地炉炉的な様相を示し、一時的な火の使用ではここまで厚く焼土が認められることはないと考えられる。住居址が埋まった段階での屋外炉としての役割を考えておく。

遺物 土器・石器があり、ほとんどの個体が覆土中から出土した。5-18は炉址の埋設土器で、8-1が炉縁石として使われていた。弥生土器壺（5-17~19、6-1~14）・壺（6-15~27）・高坏（6-28）、打製石斧（7-1~3）・横刃型石包丁（7-4・5）・有肩肩状形石器（7-6~9・12・13）・横刃型石器（7-10）・砥石（7-11、8-1）・敲打器（8-2）がある。5-14は白っぽい胎土で胴部外面がハケ調整され、東海系の広口壺と考えられる。

出土遺物から弥生時代後期後半に位置づけられる。



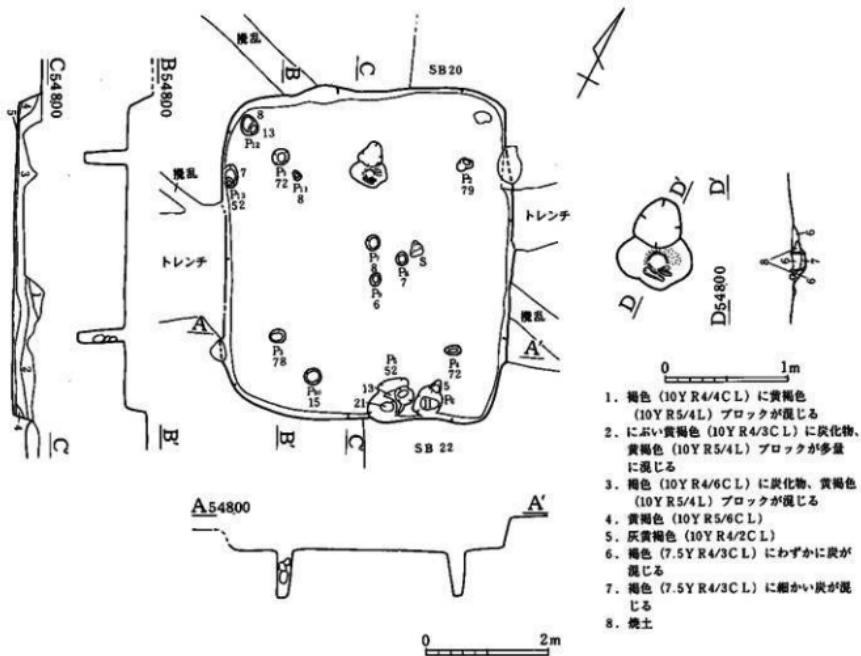
挿図20 SB20

② SB 20 (挿図20・第8・9図・図版11・49)

遺構 AV47を中心にして検出し、全体を調査した。弥生時代後期のSB 21を切る。4.1×4.8mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN19°Wを示す。壁高は49~36cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。床面は平坦で、たたき状に堅くきわめて良好である。調査終了後に床面の掘り下げ調査を実施したが、貼り床や掘り方はみられなかった。主柱穴はP 1~P 4で、いずれも主柱穴に直交する方向に細長く検出され、削材使用の柱が考えられる。南壁下中央に位置するP 5は、土手状縁部の内部に2個の穴があり、さらに斜めに掘られる小穴が伴い、入り口部と考えられる。P 6・P 13・P 14は壁面・底部ともにたたき状に堅く、間仕切りと考えられる。炉址から北壁の間にあるP 18~P 23も壁面・底部ともにたたき状に堅い。炉址は北側主柱穴間に位置する土器埋設炉で、床面を50×62cmの椭円形に掘りくぼめるが、埋設土器は住居廃棄時に抜き取られて残っていない。壺を埋めた穴の東側に焼土が認められた。

遺物 土器・石器がある。8-8は炉址北西側の床面上から出土し、埋設土器である可能性が高い。弥生土器壺(8-3~7)・壺(8-8~10)・打製石斧(8-11)・抉入打製石包丁(8-12・13)・有肩扁状形石器(8-14・9-1)・横刃型石器(9-2・3)・敲打器(9-4~6)・凹石(9-7)がある。

出土遺物から弥生時代後期終末に位置づけられる。



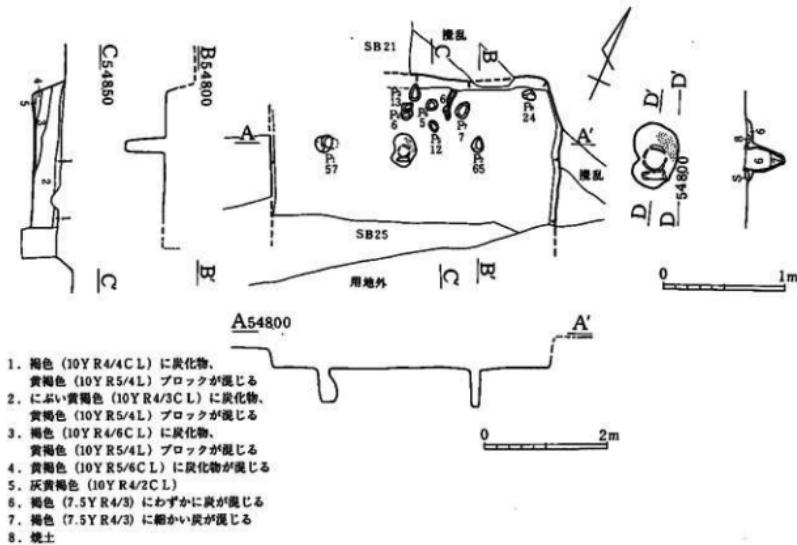
挿図21 SB 21

③ SB 2 1 (挿図21・第9・10図・図版12・49・50)

遺構 AS46を中心にして検出し、全体を調査した。弥生時代後期のSB20・SB22に切られる。5.2×4.8mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN25°Wを示す。壁高は49~33cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。床面は平坦で、たたき状に堅くきわめて良好である。調査終了後に床面の掘り下げ調査を実施したが、貼り床や掘り方はみられなかった。主柱穴はP1~P4で、いずれも主柱穴に直交する方向に細長く検出され、割材使用の柱が考えられる。主柱穴の周りは他の床面よりわずかに高くなっていた。南東壁下東隅寄りに位置するP5は小穴を伴い、入り口部と考えられる。その脇にあるP6も入り口部に関連する穴と考えられる。P7・P9は間仕切りと考えられる。その他の穴で役割が特定できるものはない。P8北側の床面上に石が確認されたが、形状から台石とは考えられない。炉址は北西側主柱穴中間に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を44×60cmの楕円形に掘りくぼめ、甕の胴部を埋める。甕の周囲に焼土が認められ、甕内部底付近の土には細かい炭が混じる。炉址北側の穴は炉址を切る。

遺物 土器・石器が出土し、10-2が炉址の埋設土器で、9-12は炉址の中に入っていた破片である。遺物はP1西側の床面から比較的多く出土した。弥生土器壺(9-8~11)・甕(9-12・13、10-1~5)・高坏(10-6~8)・横刃形石包丁(10-9)・有肩扇状形石器(10-10)・敲打器(10-11)がある。10-6は白く精良な胎土をもち、東海からの搬入品である。10-7は胎土から在地品と考えられる。

出土遺物から弥生時代後期後半に位置づけられる。



挿図22 SB 2 2

④ S B 2 2 (挿図22・第10・11・32図・図版13・14・50・58)

遺構 A S 48を中心にして検出し、全体の1/2程を調査した。弥生時代後期のS B 2 1を切り、弥生時代後期のS B 2 5に切られる。主軸に直交する方向の長さが4.7mを測る竪穴住居址で、主軸方向はN25°Wを示す。壁高は51~33cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。床面は平坦で、たたき状に堅くきわめて良好である。調査終了後に床面の掘り下げ調査を実施したが、貼り床や掘り方はみられなかった。主柱穴はP 1・P 2で、炉址北側に比較的多く穴が認められる。主柱穴の周りは他の床面よりわずかに高くなっていた。炉址は北西側主柱穴中間に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を52×35cmの梢円形に掘りくぼめ、ほぼ完形の壺を埋める。壺の北側に焼土が認められ、壺内部底付近の土には細かい炭が混じる。

遺物 土器・石器があり、11-4が炉址の埋設土器で、11-8はP 1脇の床面上から出土した。弥生土器壺(10-12~15、11-1~3)・壺(11-4~7)、有肩肩状形石器(11-8・9)・磨製石斧(11-10)・打製石鎌(32-1)がある。

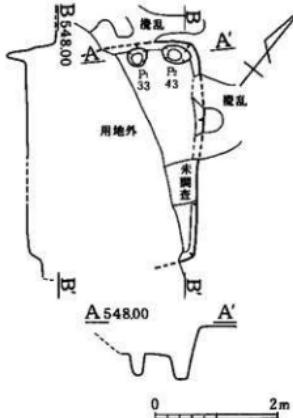
出土遺物から弥生時代後期後半に位置づけられる。

⑤ S B 2 3 (挿図23・図版14)

遺構 A T 2を中心にして検出し、北東側の一部を調査した。北西・南東方向の長さが3.5mを測る竪穴住居址である。壁高は49~23cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。床面は平坦で、たたき状に堅くきわめて良好である。穴で役割の特定できるものはない。

遺物 出土遺物はきわめて少なく、弥生土器片25点があるが、図化・拓影できる個体はない。

遺構の形態などから弥生時代後期に位置づくが、確定した時期を示すことは不可能である。



挿図23 S B 2 3

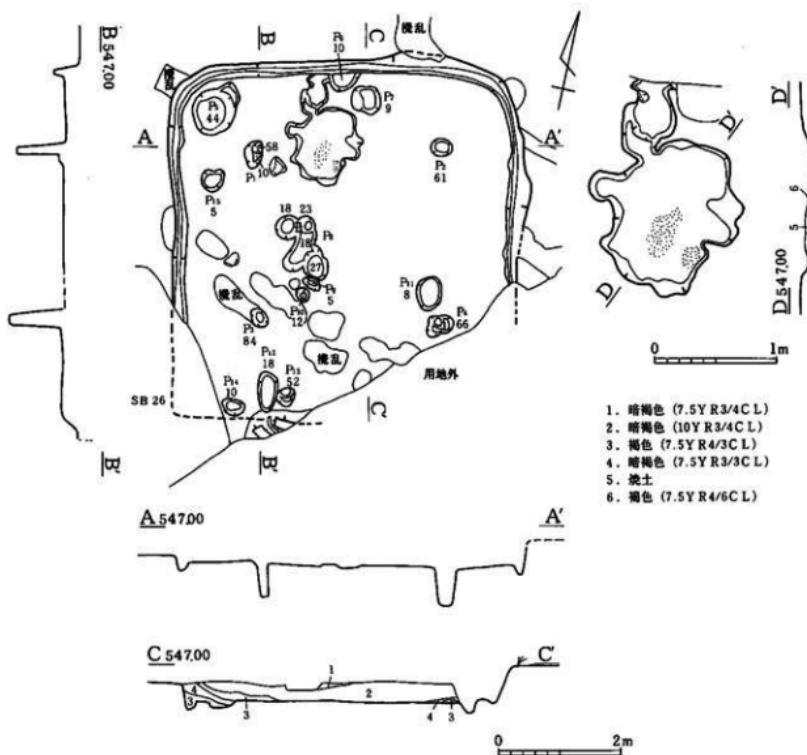
⑥ S B 2 4 (挿図24・第11~14・32図・図版15・50・51)

遺構 A L 39を中心にして検出し、南東隅付近の一部が用地外で、未調査となった。弥生時代後期のS B 2 6を切る。5.8×5.8mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN22°Wを示す。壁高は41~13cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。周溝が確認された部分で壁下を全周し、幅24~10cm・深さ19~6cmを測る。床面はたたき状に堅いが他の住居址と比べると悪く、特に主柱穴より壁際の部分は不良であった。調査終了後に床面の掘り下げ調査を実施したが、貼り床や掘り方はみられなかった。主柱穴はP 1~P 4で、P 1・P 3は主軸方向に、P 2・P 4は主軸に直交する方向で細長く検出され、割材使用の柱が考えられる。北西隅にあるP 5は貯蔵穴的な役割を果たしたと考えられる。その他で役割が特定できた

穴はない。炉址は北側主柱穴中間ややP1寄りにある地床炉で、128×104cmの不整形に床面を浅く掘りくぼめ火床の焼土が認められた。焼土の周りには炭・焼土がブロック状に確認された。

遺物 土器・石器があり、床面かその直上から出土したが、まとまった出土箇所はない。ただし、南壁際に6点の縄物用石錘が2点ずつの対で確認された。土師器壺(11-11~15、12-1~3)・甕(12-4~9)・高坏(12-10)・器台(12-11~15)、抉入打製石包丁(12-16~18)・自然面に敲打痕のある有肩扁状形石器(12-19)・縄物用石錘(13-1~6、14-1~4)・敲打器(14-5)、管玉(32-5)がある。12-1は口縁部が複合口縁をなし棒状浮文が付けられる駿河湾系の土器で、接合しなかったが胴部の破片もある。胎土は地元の土器と変わりがないので、在地品と考えられる。12-5~9は同一個体のS字変胴部で、胎土から搬入品である。

出土遺物から古墳時代前期に位置づけられる。



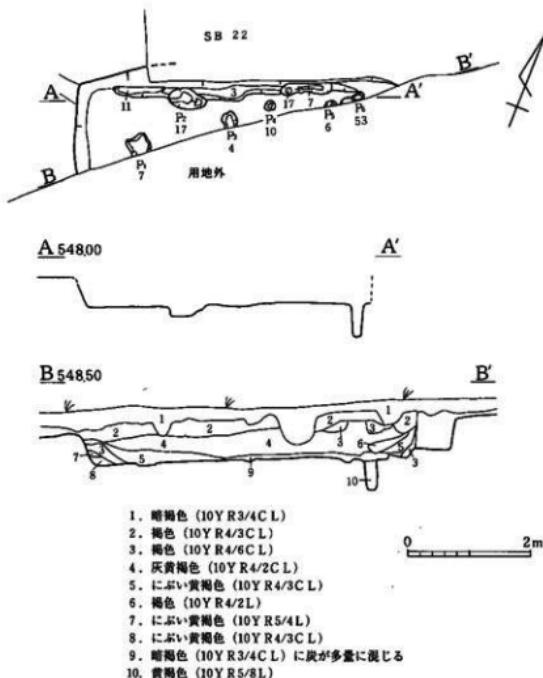
挿図24 SB 24

⑦ SB 25 (挿図25・第14・15図・図版16・51)

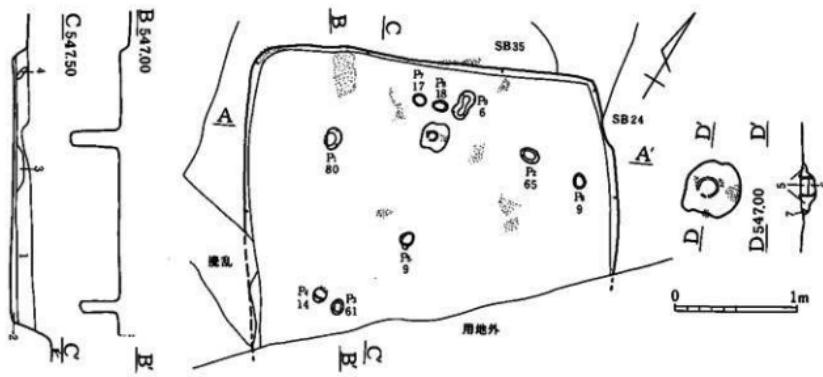
遺構 AR48を中心にして検出し、南東側が用地外で、一部の調査にとどまった。弥生時代後期のSB 22を切る。東西方向の長さが5.3mと推定される竪穴住居址である。壁高は52~49cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。北壁下に周溝が認められ、小穴や深くなる箇所がある。幅28~14cm・深さ11~3cmを測る。床面は細かな凹凸があり、たたき状に堅くわめて良好である。調査終了後に床面の掘り下げ調査を実施したが、貼り床や掘り方はみられなかった。穴で役割が特定できたものはない。

遺物 土器・石器があり、北壁際からまとめて出土した。弥生土器壺(14-6~11)・甕(15-1)・高坏(15-2・3)、砥石(15-4)・敲打器(15-5)がある。14-6の頸部文様は器面の荒れのため確認できなかった。

出土遺物から弥生時代後期終末に位置づけられる。



挿図25 SB 25



1. 暗褐色(7.5Y R3/4 CL)に 黄褐色(10Y R5/4L)ブロック、

炭が混じる

2. 暗褐色(7.5Y R3/4 CL)に、

桃土が混じる

3. 暗褐色(7.5Y R3/4 CL)に

桃土が混じる

4. 炭に暗褐色(7.5Y R3/4 CL)

が混じる

5. 褐色(7.5Y R4/4CL)に桃土、

炭が混じる

6. 褐色(7.5Y R4/4CL)に

細かい炭が多量に混じる

7. 桃土



挿図26 SB26

⑧ SB 26 (挿図26・第15・16図・図版17・18・52)

遺構 AJ 37を中心にして検出し、南東側が用地外で全体の3/4程を調査した。古墳時代前期のSB 24に切られ、弥生時代後期のSB 35を切る。主軸に直交する方向が6.0mを測る隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN26°Wを示す。壁高は26~16cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は平坦で、たたき状に堅く良好であるが、主柱穴を結んだ線より壁際は軟らかい。主柱穴はP 1~P 3で、東側主柱穴は用地外にかかって検出できなかった。他の穴で役割の特定できたものはなかった。炉址は北西側主柱穴中に位置する土器埋設炉で、床面を45×43cmの不整形に掘りくぼめ、底部を欠くを埋める。壺の周囲に焼土が認められ、壺内部底付近の土には細かい炭が多量に混じる。床面上から覆土中に多量の炭が認められ、焼土も点々と確認された。炭は壁から直角の方向で確認できたものが多く、中央部では細かく方向が確認できない炭が多い。北西壁の中央部付近では壁面が焼けている。以上の状況から火事の住居址である。ただし、床面上の遺物が少ないとから、住居廃棄後に火を付けて焼失させた可能性が高いと考えている。

遺物 土器・石器があり、覆土中から炭とともに出土した。壺(15-6~11)・壺(15-12~21)・抉入打製石包丁(15-22~24, 16-1)・横刃型石包丁(16-2)・有肩扇状形石器(16-3)・抉入石器(16-4)・有柄石器(16-5・6)・敲打器(16-7)がある。

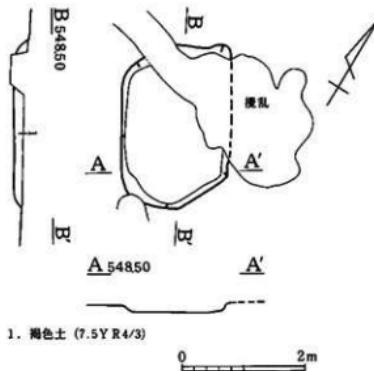
出土遺物から弥生時代後期終末に位置づけられる。

⑨ SB 27 (挿図27・第16図・図版19・52)

遺構 AU 2付近で検出し、北東壁・北西壁・床面の一部は耕作による擾乱を受けている。2.6×1.7mの隅丸長方形の竪穴住居址で、長軸方向は方向はN31°Wを示す。壁高は16~8cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は平坦で全体に軟らかい。床面上に穴はない。規模・形態とも通常の竪穴住居址とは異なり、居住を目的とする遺構とは考えられなく、特殊な用途に使われたものと推定される。

遺物 弥生土器があり、16-8の壺は床面上から出土した。他に壺(16-9)・壺(16-10・11)がある。

出土遺物から弥生時代後期後半に位置づけられる。



挿図27 SB 27

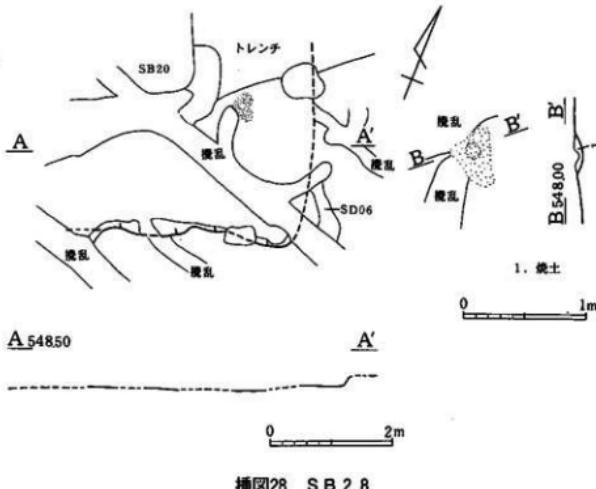
⑩ SB 28 (挿図28・第16図・図版19)

遺構 BT 48で検出し、北西側は試掘調査のトレーンチで床面下まで掘り下げてしまい、全体形の確認はできなかった。規模・主軸方向不明の竪穴住居址である。平面形を推測すると、北側や西側の確認できない部分に大きく広がることは想定しにくいので、4.2×3.2m程度の隅丸長方形を呈すると考えられ

る。壁高は15~9cmを測り、緩やかな壁面をなす。床面は軟らかく、他の竪穴住居の状況とは異なる。本址に直接結びつく穴はない。炉址は東側壁面寄りに位置する地床炉で、床面上に40×33cmの不整形に確認したが、試掘トレンチや耕作の擾乱で一部切られており、本来の規模・平面形は確認できない。断ち割り調査を実施したところ15cm程度焼土の厚みがあり、かなりの火の使用が考えられる。形態や床面の状況等通常の竪穴住居とは様相が異なる。集落内で一定の役割を果たしたと考えられるが、どういった用途かの推測はできなかった。

遺物 出土量はきわめて少なく、図化・拓影できる個体は、弥生土器壺(16-12)・磨製石鎌(16-13)がある。大半は土器片で、小さな袋一杯分ある。

出土遺物が少なく詳細な位置づけは不可能であるが、弥生時代後期に位置づけられる。



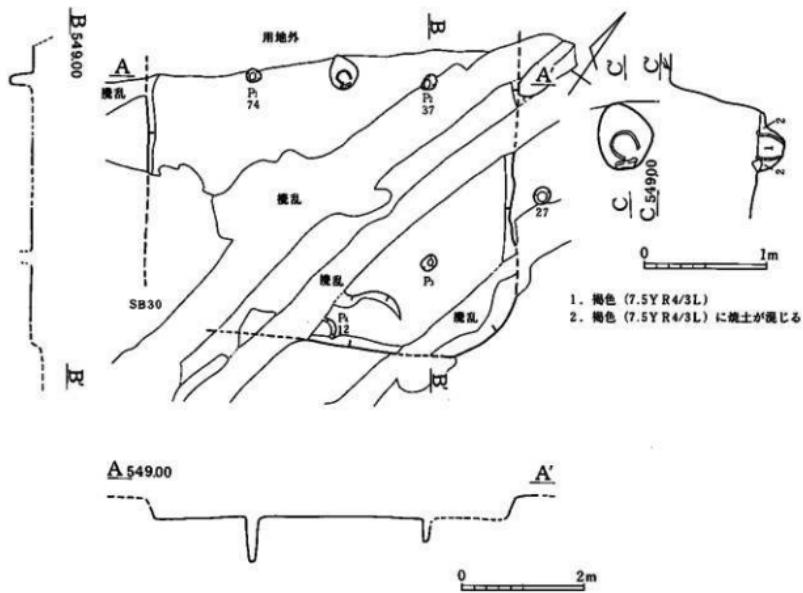
挿図28 SB 28

⑩ SB 29 (挿図29・第16・17図・図版20・52)

遺構 BD 5を中心にして検出し、北西側が用地外で、全体の3/4程を調査した。弥生時代後期のSB 30に切られる。主軸に直交する方向の長さが5.9mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN36°Wを示す。壁高は31~26cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は大きく耕作の擾乱を受けているが、平坦でたたき状に堅くきわめて良好である。調査終了後に床面の掘り下げ調査を実施したが、貼り床や掘り方はみられなかった。主柱穴はP 1~P 3で、南側主柱穴は耕作の擾乱に切られて不明である。南東壁下中央部に位置するP 4は、西側が耕作の擾乱で切られているが、入り口部と考えられる。炉址は北西側主柱穴中間に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を53×44cmの楕円形に掘りくぼめ、底部を欠く壺を埋める。壺の周囲の土に焼土が混じっていた。

遺物 土器・石器があり、17-5は炉址の埋設土器である。弥生土器壺(16-14~17、17-1~4)・壺(17-5~8)、有肩肩状形石器(17-9)・横刃型石器(17-10)・敲打器(17-11)がある。

出土遺物から弥生時代後期後半に位置づけられる。



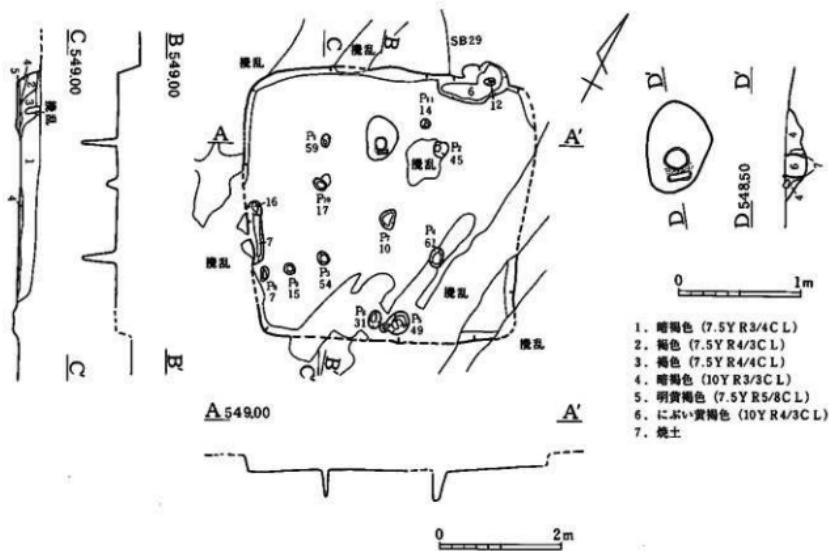
挿図29 SB 29

⑫ SB 30 (挿図30・第17・18図・図版21・53)

遺構 BB 4を中心にして検出し、全体を調査した。弥生時代後期のSB 29を切る。4.4×4.3mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN28°Wを示す。壁高は46~5cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。南西壁下中央部と北西壁下北隅寄りに周溝状の溝が認められた。床面は東側で耕作の搅乱を受けているが、平坦でたたき状に堅くきわめて良好である。壁面から15cm程の範囲は軟らかい床面であった。調査終了後に床面の掘り下げ調査を実施したが、貼り床や掘り方はみられなかった。主柱穴はP 1~P 4で、P 1・P 3・P 4は主軸方向に、P 2は主軸に直交する方向に細長く検出され、割材使用の柱が考えられる。南東壁下中央部に位置するP 5・P 6は、上面が耕作の搅乱で切られているが、入り口部と考えられる。炉址は北西側主柱穴中間に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を68×52cmの梢円形に掘りくぼめ、口縁部と底部を灰く壊を埋める。炉縁石と壊の間に焼土が認められた。

遺物 土器・石器があり、18-2は炉址の埋設土器である。弥生土器壺(17-12~14)・壺(17-15~17、18-1~4)・有肩扁状形石器(18-5)・抉入打製石包丁(18-6)・横刃型石包丁(18-7)・横刃型石器(18-8)・敲打器(18-9)がある。17-12の頸部文様は器面の荒れのため確認できなかつた。

出土遺物から弥生時代後期終末に位置づけられる。



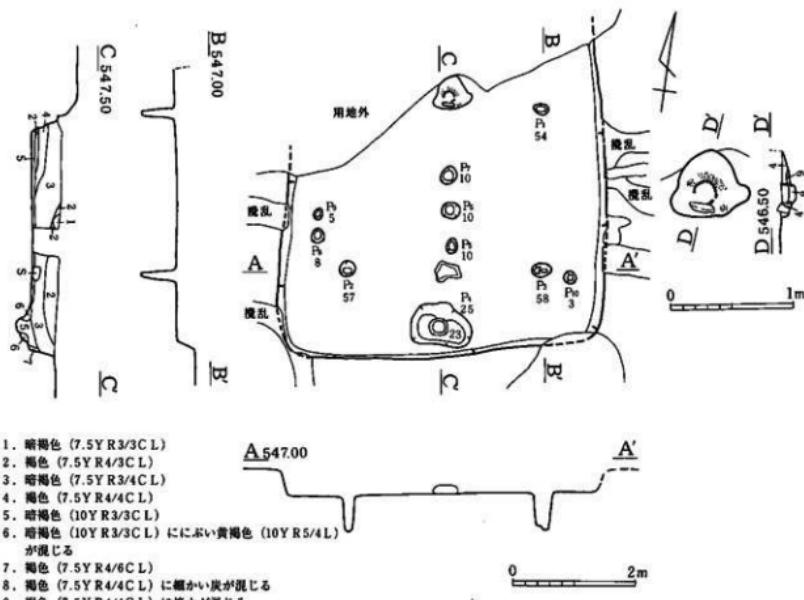
挿図30 SB 30

⑬ SB 31 (挿図31・第18・19図・図版22・53)

遺構 A F 27を中心にして検出し、北側が用地外で全体の3/4程を調査した。主軸に直交する方向の長さが5.2mを測る隅丸方形の堅穴住居址で、主軸方向はN 7° Wを示す。壁高は51~30cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。床面は平坦でたたき状に堅くきわめて良好である。調査終了後に床面の掘り下げ調査を実施したが、貼り床や掘り方はみられなかった。主柱穴はP 1~P 3で、いずれも主軸に直交する方向に細長く検出され、削材使用の柱が考えられる。北西側主柱穴は用地外で確認できなかった。東壁下中央部に位置するP 4は底面に小穴があり、入り口部と考えられる。入り口部から炉址にかけて直線的に並ぶP 5・P 6・P 7は、間仕切りと考えられる。入り口部とP 5の間に台石が認められた。炉址は北側主柱穴中間に位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を54×50cmの楕円形に掘りくぼめ、壺の底部を埋める。壺の周囲に焼土が認められ、壺内部底付近の土には細かい炭が混じる。

遺物 土器・石器があり、18-12は炉址の埋設土器で、19-1は入口部西脇の床面上から出土した。弥生土器壺 (18-10)・壺 (18-11~15、19-1・2)・高坏 (19-3)・手づくね (19-4)・打製石斧 (19-5~7)・横刃型石包丁 (19-9・10)・有肩扁状形石器 (19-10・11)・砥石 (19-12) がある。19-1は頸部に補修孔がある。

出土土器から弥生時代後期後半に位置づけられる。



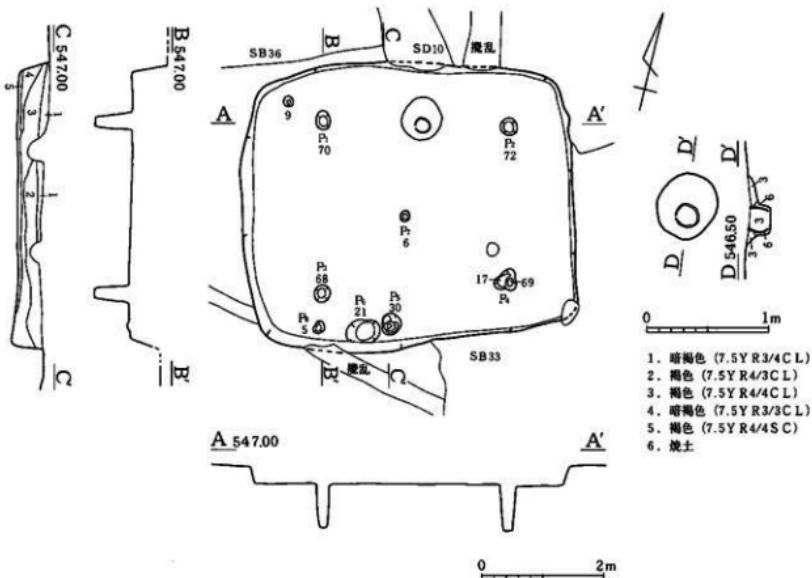
挿図31 SB 31

⑪ SB 32 (挿図32・第19~21図・図版23・54)

遺構 AG32を中心にして検出し、全体を調査した。弥生時代後期のSB33に切られる。4.6×5.4mの隅丸方形の竪穴住居で、主軸方向はN13°Wを示す。壁高は52~33cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。床面は平坦でたたき状に堅くきわめて良好で、P1~P2・P3の周りがわずかに高くなる。調査終了後に床面の掘り下げ調査を実施したが、貼り床や掘り方はみられなかった。主柱穴はP1~P4で、いずれも主軸の方向に細長く検出され、割材使用の柱が考えられる。東壁下南西隅寄りに位置するP5・P6は、入り口部と考えられる。他に役割が特定できた穴はない。炉址は北側主柱穴中間に位置する土器埋設炉で、床面を52×48cmの楕円形に掘りくぼめ、壺の底部を埋める。壺の外側の底付近に焼土が認められ、壺内部の熱によって焼土化したと考えられる。

遺物 土器・石器があり、20-1は炉址の埋設土器である。弥生土器壺(19-13~16)・壺(19-17、20-1~7)・打製石斧(20-8~10)・横刃型石包丁(20-11)・有肩扇状形石器(20-12・13)・凹石(20-14・15)・砥石(21-1)がある。

出土遺物から後期後半に位置づけられる。



挿図32 SB 32

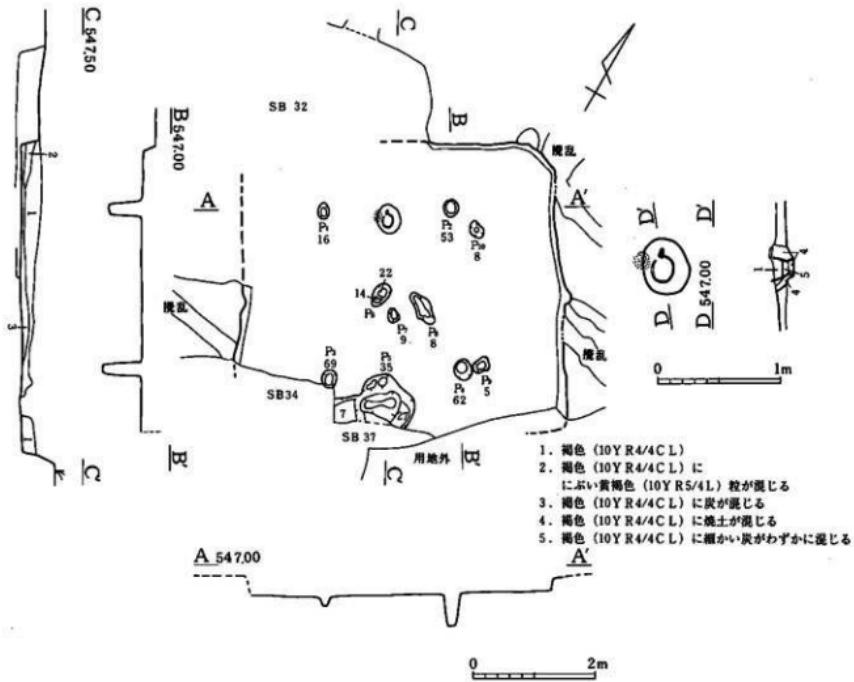
⑬ SB 33 (挿図33・第21・22図・図版24・54・55)

遺構 A G33を中心にして検出し、ほぼ全体を調査した。弥生時代後期のSB 32・34・37を切る。

4.3×5.2mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN33°Wを示す。壁高は32~18cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。床面は平坦でたたき状に堅く良好であるが、他の竪穴住居址に比べると軟らかい。調査終了後に床面の掘り下げ調査を実施したが、SB 32と重複する箇所以外での貼り床や掘り方はみられなかった。主柱穴はP 1~P 4で、いずれも主軸の方向に細長く検出され、割材使用の柱が考えられる。P 1のみ柱掘り方の深さが浅く、掘りたりなかった可能性がある。南東壁下に位置する小穴を伴うP 5は、入り口部と考えられる。他に役割が特定できた穴はない。炉址は北西側主柱穴中間に位置する土器埋設炉で、床面を44×37cmの楕円形に掘りくぼめ、胴部から底部を欠く壺を逆位に埋める。壺の西側に焼土が認められ、壺内部底付近の土に細かな炭が混じる。

遺物 土器・石器があり、21~6は炉址の埋設土器である。弥生土器壺(21-2~5、22-1~2)・壺(21-6、22-3~6)・高杯(22-7)、打製石斧(22-8・9)・抉入打製石包丁(22-10・11)・横刃型石包丁(20-12)・敲打器(22-13)がある。21-2は無文の短頸壺で、これまでほとんど出土したことのない形態である。

出土遺物から弥生時代後期終末に位置づけられる。



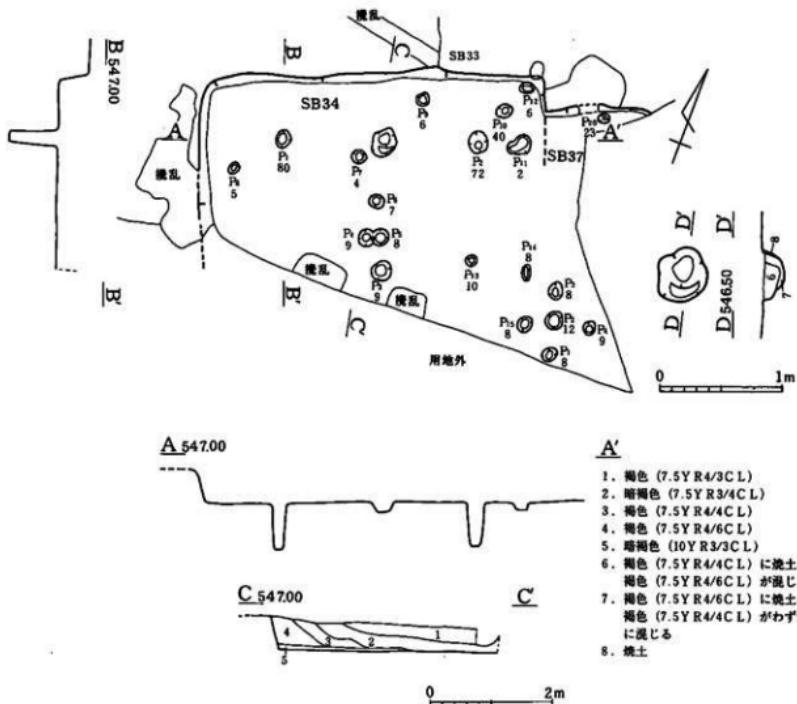
挿図33 SB 3 3

⑯ SB 3 4 (挿図34・第22・23図・図版25・55)

遺構 AD33を中心にして検出し、南東側が用地外で全体の2/3程を調査した。弥生時代後期のSB33に切られ、弥生時代後期のSB37を切る。主軸に直交する方向の長さが5.6mを測る隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN20°Wを示す。壁高は53~50cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。床面は平坦でたたき状に堅くきわめて良好で、P1・P2の周りがわずかに高くなる。調査終了後に床面の掘り下げ調査を実施したが、貼り床や掘り方はみられなかった。主柱穴はP1・P2で、いずれも主軸の方向に細長く検出され、割材使用の柱が考えられる。P3~P10・P13・P15は、壁面・底面ともにたたき状に堅く、P3~P6は間仕切りと考えられる。他に役割が特定できた穴はない。炉址は北側主柱穴中に位置し、床面に42~38cmの穴が確認され、土器埋設炉の土器を抜き取ったものと考えられる。穴の周囲にわずかに焼土が認められた。

遺物 土器・石器がある。弥生土器壺(22-14~16、23-1~3)・甌(23-4~10)、抉入打製石包丁(23-11)・打製石包丁の石核(23-12)・有肩扇状形石器(23-13・14)・紡錘車(23-15)がある。23-8は底部に焼成後の穿孔が認められる。

出土遺物から弥生時代後期後半に位置づけられる。



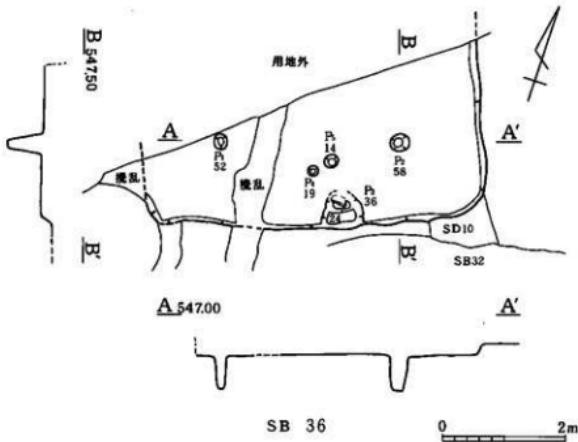
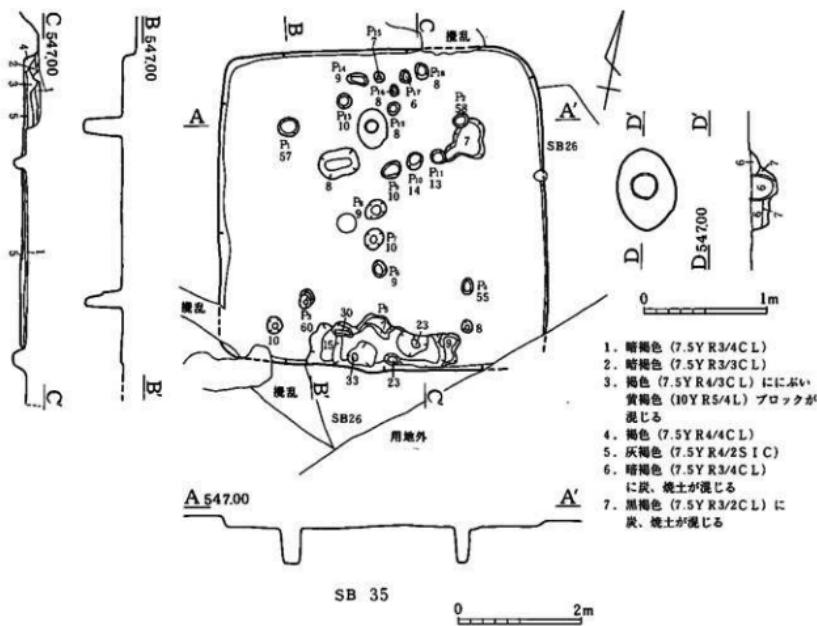
挿図34 SB34・37

⑩ SB35 (挿図35・第23・24・32図・図版26・55・58)

遺構 AJ36を中心にして検出し、全体を調査した。弥生時代後期のSB26に切られる。5.1×5.2mの隅丸方形の竪穴住居で、主軸方向はN18°Wを示す。壁高は33~2cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は平坦でたたき状に堅くきわめて良好で、P1~P4の周りがわずかに高くなる。調査終了後に床面の掘り下げ調査を実施したが、貼り床や掘り方はみられなかった。主柱穴はP1~P4で、P1・P2は主軸に直交する方向、P3・P4は主軸方向に細長く検出され、削材使用の柱が考えられる。P5は南壁下中央部に2.3×0.8mの不整形を呈し、4箇所に穴が認められ、入り口部と考えられる。P6~P8は、間仕切りと考えられ、P10は壁面が焼けている、内部に炭と焼土が多量に認められた。他に柱穴は炉址と北壁の間に集中する。炉址は北側主柱穴中間に位置する土器埋設炉で、床面を63×36cmの楕円形に掘りくぼめ、甕の胴部を埋める。炉址の周辺には焼土・炭が比較的多く認められた。

遺物 土器・石器があり、23~23は炉址の埋設土器である。弥生土器壺(23~16・17)・甕(23~18~23)・抉入打製石包丁(24-1・2)・横刃型石包丁(24-3)・肩肩状形石器(24-4)・横刃型石器(24-5・6)・砥石(24-7)・打製石錐(32-3)がある。

出土遺物から弥生時代後期後半に位置づけられる。



掲図35 SB 35・36

⑩ SB 3 6 (挿図35・第24図・図版27・55)

遺構 AH30を中心にして検出し、北側が用地外で全体の1/3程を調査した。SD10に切られる。東西方向の長さが5.5mを測る隅丸方形の竪穴住居址である。壁高は23~8cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。床面は細かな凹凸があり、たたき状に堅く良好である。調査終了後に床面の掘り下げ調査を実施したが、貼り床や掘り方はみられなかった。主柱穴はP1・P2で、いずれも底面はたたき状に堅くなっていた。P3は南壁下の南東隅寄りに位置し小穴を伴い、入り口部と考えられる。

遺物 出土量は少なく、弥生土器壺(24-8~10)、抉入打製石包丁(24-11)・蔽打器(24-12)がある。

出土遺物から弥生時代後期終末に位置づけられる。

⑪ SB 3 7 (挿図34・第24図・図版27・55)

遺構 AF34を中心にして検出し、東・南側が用地外で全体の1/4程を調査した。弥生時代後期のSB34に切られる。規模・主軸方向とも不明の竪穴住居址である。壁高はSB23の床面から23cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。床面は平坦でたたき状に堅くきわめて良好であり、SB34との高低差はなかった。調査終了後に床面の掘り下げ調査を実施したが、貼り床や掘り方はみられなかった。主柱穴は不明で、P1~P4は底面がたたき状に堅くなっていた。

遺物 出土量は少なく、弥生土器壺(24-13・14)・壺(24-15~17)、横刃型石器(24-18~20)がある。

出土遺物から弥生時代後期後半に位置づけられる。

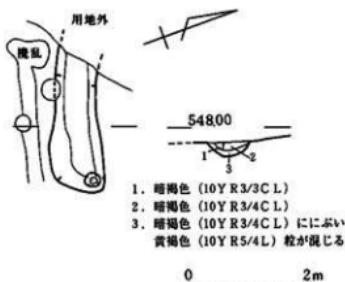
(2) 溝 壴

① SD02 (挿図36・第25図・図版28)

遺構 AS42・43で検出し、東側は調査箇所で途切れ、西側の用地外に延長する。調査延長は2.1mで、幅85~66cm・深さ22cmを測る。断面形は逆台形をなし、土層は自然埋没の様相を示す。底面は船底状で、緩やかな壁面をなす。東壁際にある柱穴は本址に伴うかの判断はできなかった。

遺物 弥生土器片11点があり、壺1点(25-1)を拓影で示した。

出土遺物は弥生土器であるが、覆土の様相が弥生時代の遺構とは異なっていることと、溝址の方向が弥生時代の遺構の方向と異なっていることから、弥生時代以降である可能性が高い。



挿図36 SD02

② SD 03・04・05 (挿図37・第25図・図版28)

第II地区東部で検出した。遺構のまとまりとしての把握が難しく、調査中に判断した単位で番号を付したのを基にして、それぞれに関連が考えられるので、一括して記述する。

SD 03の調査延長は4.3mで、幅32~16cm・深さ24~7cmを測り、方向はN34°Wを示す。断面形は逆台形をなす。

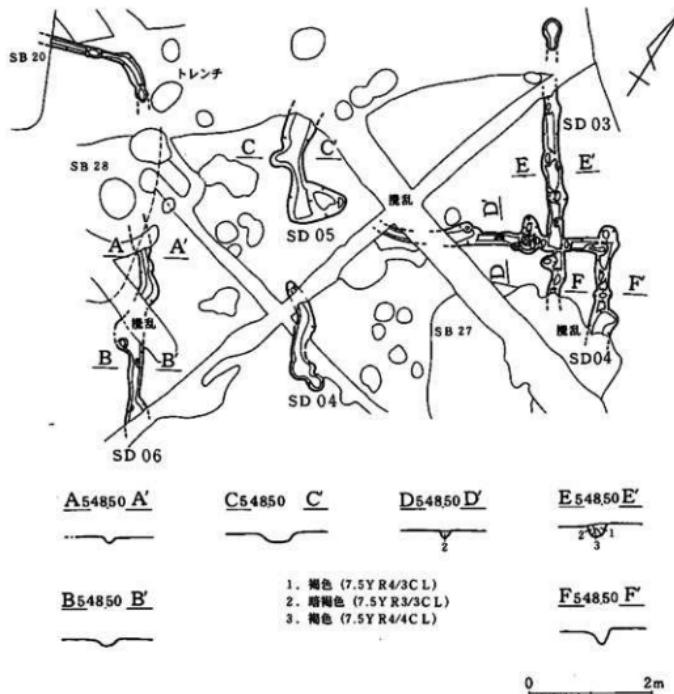
出土遺物は弥生土器片12点があるが、図示・拓影できる個体はない。

SD 04は西隅で断絶をもつがコの字型の平面形を示す。北東溝の調査延長は1.8mで、幅44~20cm・深さ22~6cmを測り、方向はN30°Wを示す。北西溝の調査延長は3.9mで、幅36~12cm・深さ23~5cmを測り、方向はN60°Eを示す。南東溝の調査延長は1.8mで、幅24~20cm・深さ20~16cmを測り、方向はN42°Wを示す。断面形は基本的に逆台形をなす。

出土遺物は弥生土器片5点があるが、図示・拓影できる個体はない。

SD 05の調査延長は1.7mで、幅56~16cm・深さ14~9cmを測り、方向はN34°Wを示す。断面形は逆台形をなす。

出土遺物は弥生土器片が7点あり、堀1点を(25-2)拓影で示した。



挿図37 SD 03~06

いずれの遺構も当地方弥生時代の集落内で確認されるいわゆる囲溝址に類似する。SD03とSD04が切り合い関係を持つことからすべてが同時存在したとは考えられないが、SD03とSD05またはSD04とSD05が同一遺構であることも考えられる。こうした単位の把握は、囲溝址の溝が比較的浅いことから後世の削平を考慮に入れなければならない上、遺構の形態に規則性がみられないために困難が伴う。また、耕作の擾乱で把握できなくなってしまった部分もある。本遺構についてもすべてが把握できたとは考えていない。

時期は弥生時代後期に位置づくが、詳細な時期を決定することはできない。

③ SD06（挿図37）

遺構 A V48～A T0にかけて検出した。弥生時代後期のSB20・28と重複し、一部擾乱を受けていて、全体形は不明である。南東側は用地外に延長し、北西側のSB20との重複箇所も延長していると考えられる。全体形はL字状に確認され、北西溝は調査延長1.4m・幅20～12cm・深さ21～6cmを測り、溝内に一箇所の小穴が認められる。南東溝は擾乱やSB28との重複で確認できない部分があるが、調査延長5.8m・幅30～12cm・深さ14～2cmを測り、長軸方向はN31°Wを示す。断面形はいずれも逆台形をなす。

遺物 弥生土器片8点があるが、図示・拓影できる個体はない。

遺跡や遺構の状況から弥生時代後期に位置づけられる。

④ SD07・08（挿図38・第25図・図版29）

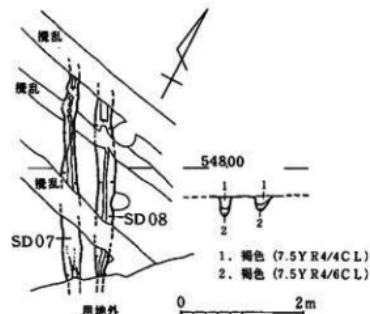
遺構 A O45～A Q44にかけて2本並んで検出

し、南東側用地外に延長する。北西側は擾乱に切られるその先では検出されないので、擾乱箇所までの遺構と考えられる。SD07は調査延長が3.3mで、南東側用地外に延長する。幅26～12cm・深さ33～7cmを測り、底面が狭くV字に近い断面形をなす。SD08は調査延長が2.8mで、南東側用地外に延長する。幅28～10cm・深さ24～7cmを測り、底面が狭くV字に近い断面形をなす。長軸方向はいずれもN23°Wを示す。

遺物 SD07から弥生土器片8点があり、壺2点(25-3・4)を拓影で示し、壺底部1点(25-5)を図示した。

SD08からの出土遺物はない。

出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。



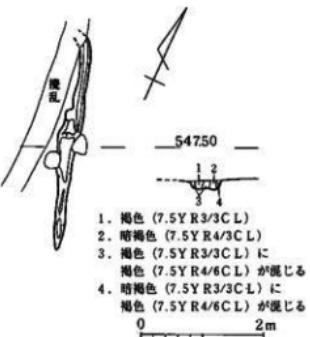
挿図38 SD07・08

⑤ S D 0 9 (挿図39・図版29)

遺構 A K 33～A J 34にかけて直線的に検出し、北西側が擾乱を受ける。調査延長は3.4mで、幅28～12cm・深さ14～7cmを測り、長軸方向はN 25° Wを示す。全体に底面が狭く、V字に近い断面形をなす。平面形は北西側の擾乱を受けた部分でわずかに北西側に曲がる可能性が認められたが、擾乱の先で検出できなかったので、断定はできない。

出土遺物はない。

遺構の状況より弥生時代後期に位置づけられる。



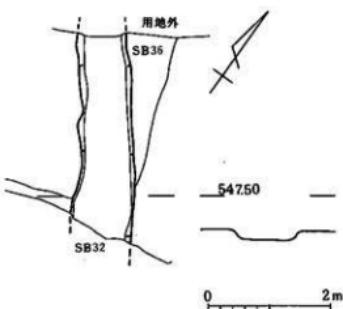
挿図39 SD 0 9

⑥ S D 1 0 (挿図40・第25図・図版29)

遺構 A J 31～A H 32にかけて直線的に検出した。北西用地外に延長し、南東側はSB 3 2と重複して確認できなくなるが、続いていると考えられる。弥生時代後期のSB 3 6を切る。調査延長は3.2mで、幅100～78cm・深さ17～13cmを測り、長軸方向はN 36° Wを示す。底面は平坦で、逆台形の断面形をなす。

遺物 弥生土器片40点があり、壺1点(25-6)を拓影で示した。

切り合い関係から弥生時代後期以降に位置づけられる。

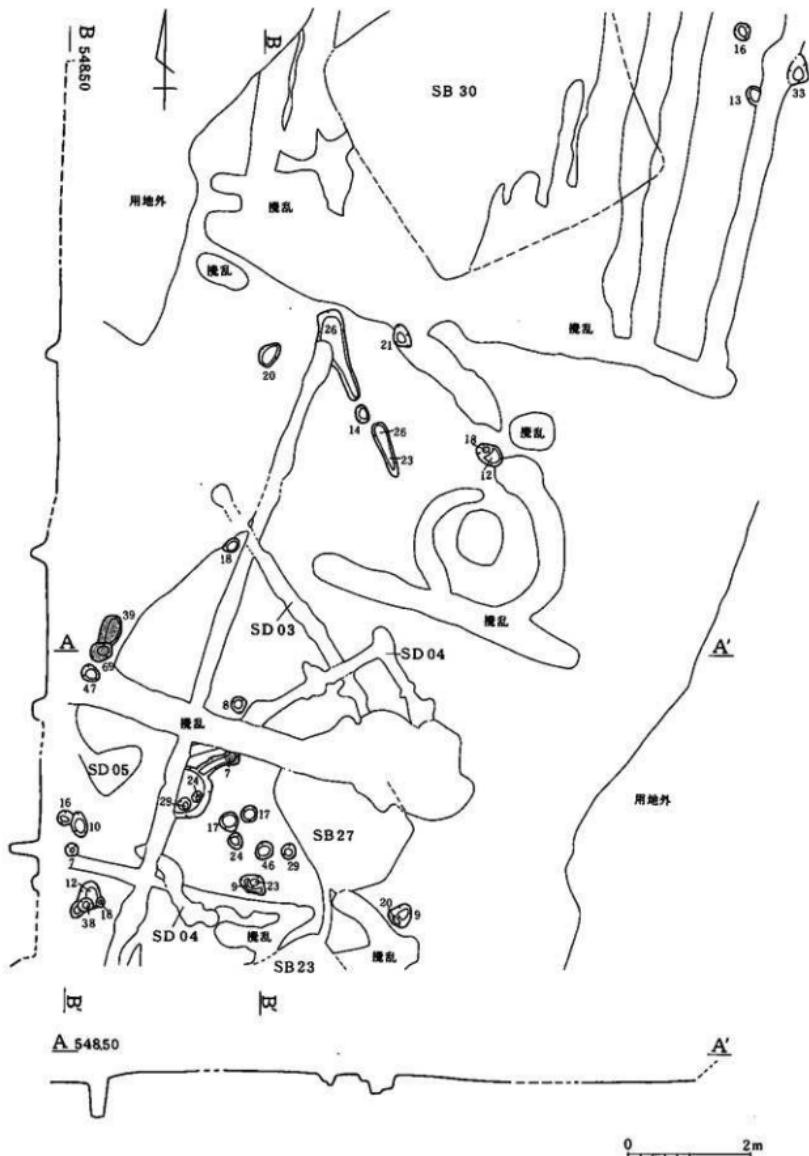


挿図40 SD 1 0

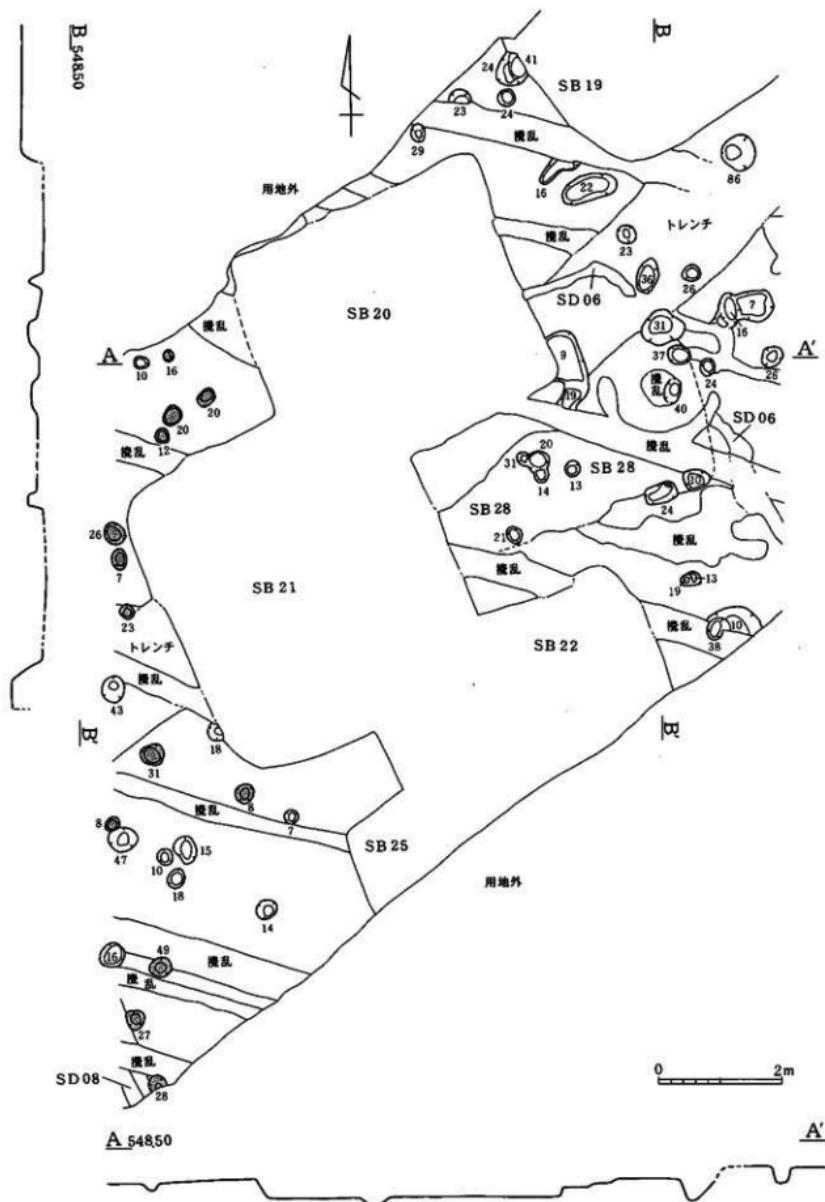
(3) 柱穴・穴

第II地区に柱穴・穴は多数あり、挿図41～45で示した。底面が竪穴住居址の床面と同じ様なたたき状堅くなっているものがあり、網点により示した。他に、溝址として把握すべきものがあるが、ここで一括して示した。擾乱が多く、把握できなかった柱穴・穴の存在も考慮に入れる必要がある。分布をみると、SB 2 1からSB 2 4の間、SB 1 9とSB 2 3の間、SB 3 1南側の3箇所に集中する傾向を指摘できる。底面がたたき状になるものが多いことからも、大半が掘立柱建物址の柱穴と想定されるが、遺構の単位を把握することはその数の多さからできなかった。役割とすれば、集落内の高床倉庫と考えられ、竪穴住居址がある時期を通して何回にも建てられていた結果といえる。

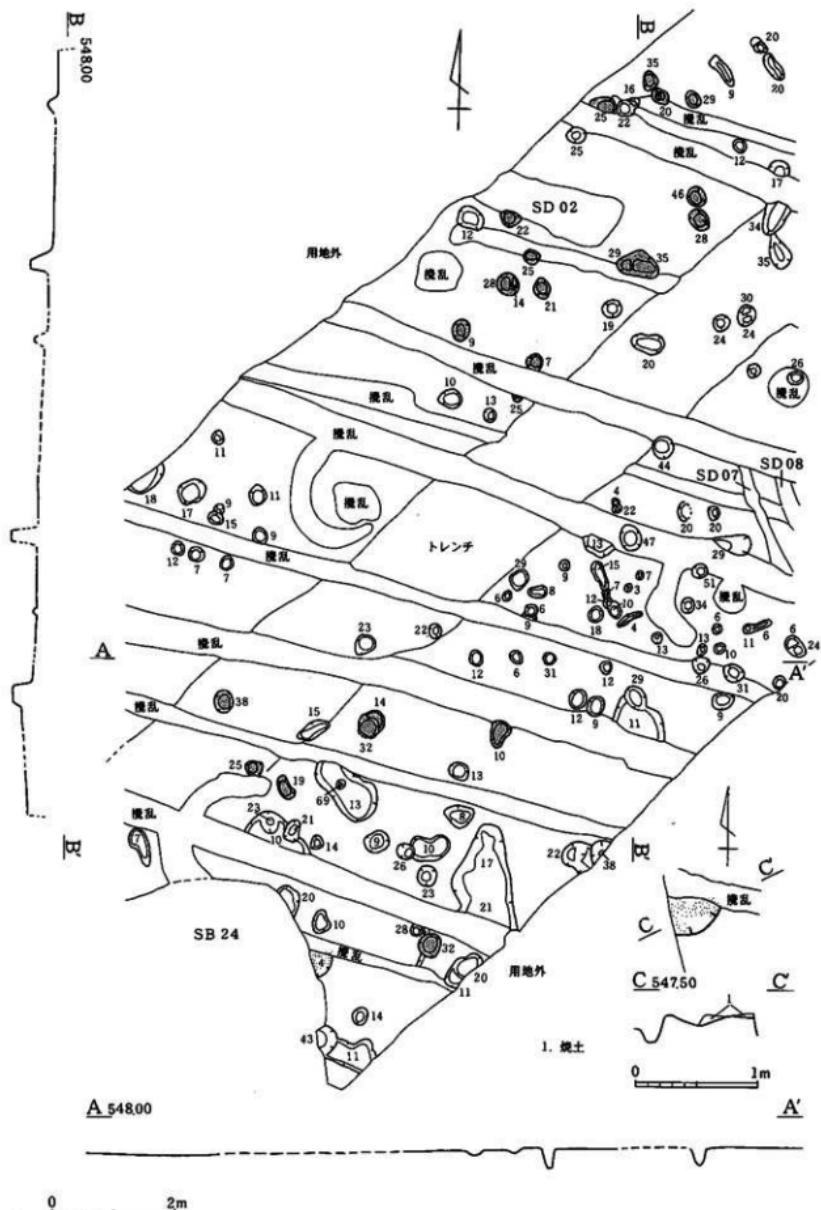
出土遺物は柱穴内から弥生土器片が出土しているが、特別な出土状況を示すものではなく、すべての柱穴から出土するものでもない。弥生土器壺(25-7～10)・壺(25-11～14)を示した。



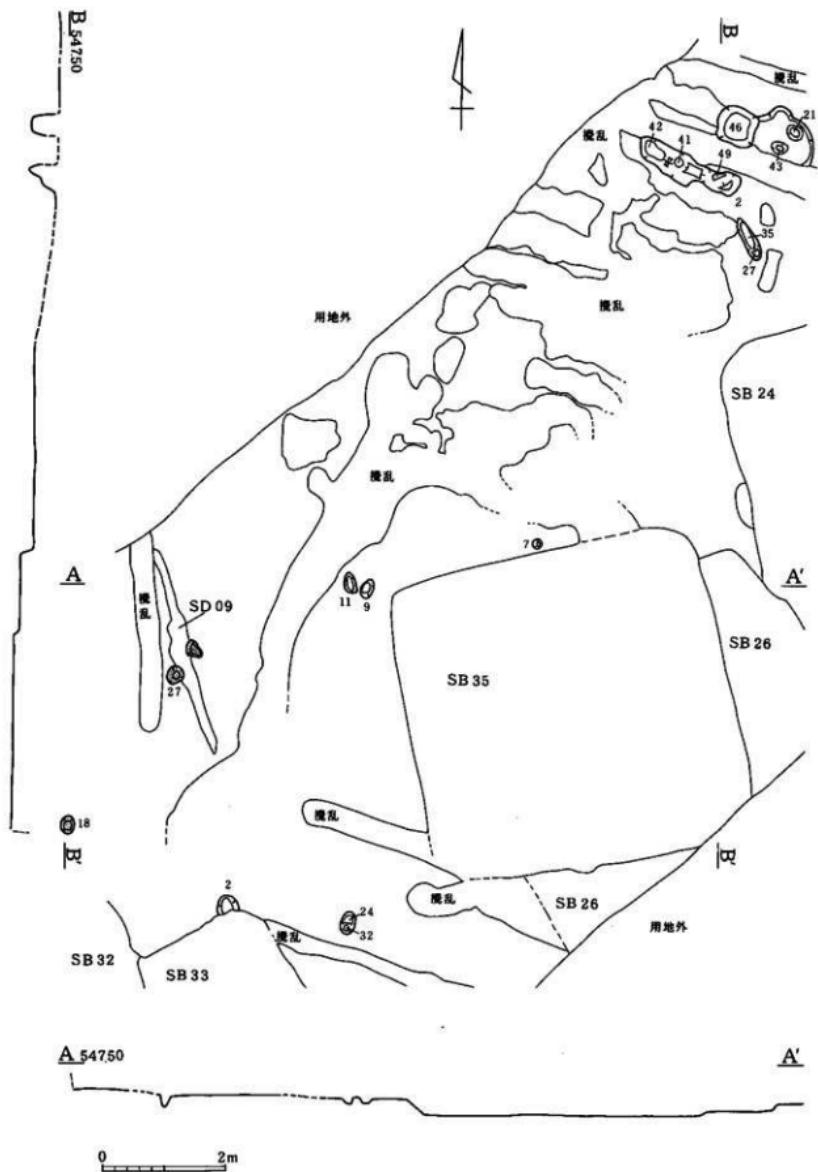
插図41 第II地区柱穴・穴(1)



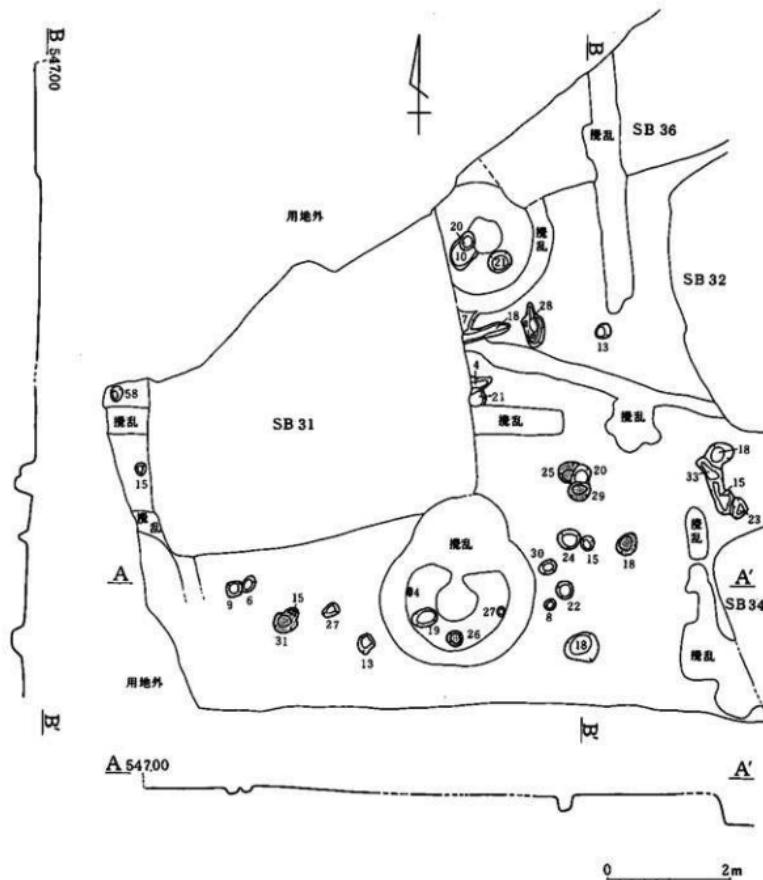
插図42 第II地区柱穴・穴(2)



擇図43 第II地区柱穴・穴(3)



擇図44 第II地区柱穴・穴(4)

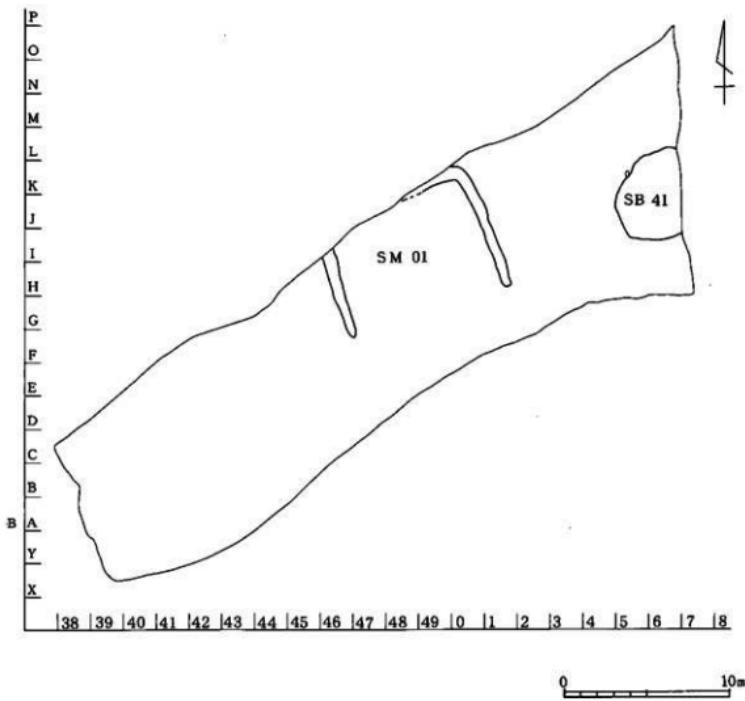


挿図45 第II地区柱穴・穴(5)

(4) 遺構外出土遺物

遺構に直接結びつかない遺物は少なく、縄文時代中期深鉢片（25-15）・弥生時代後期甕（25-16）・高坏（25-17）・打製石斧（25-18）・抉入打製石包丁（25-19-21）・有肩扇状形石器（25-22-24）・砥石（25-25）がある。他に、弥生土器片中袋5・近世陶磁器片38点、有肩扇状形石器3点・抉入打製石包丁2点・横刃型石器4点がある。

他に、試掘調査で第II地区に設定したトレンチから出土した遺物があり、打製石斧（31-6）・有肩扇状形石器（31-8）・磨製石斧（31-9）・敲打器（31-7）を図示した。



挿図46 第III地区全体図

3) 第III地区

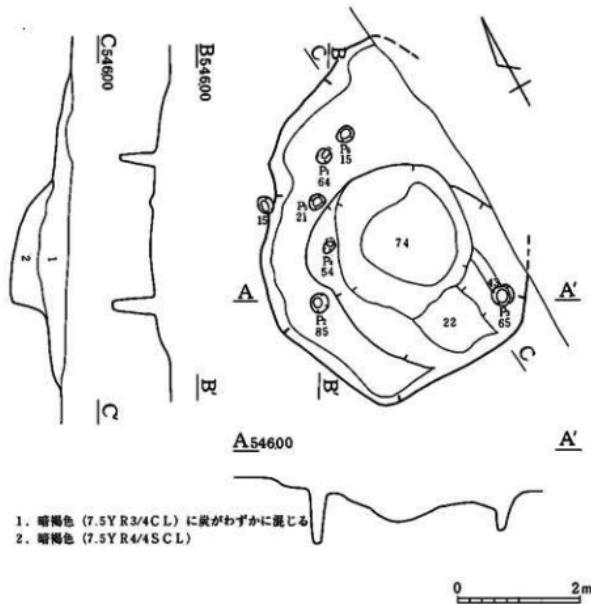
(1) 壇穴住居址

① SB 41 (挿図47・第26・27図・図版33・56)

造構 B J 6を中心にして検出し、東側が調査区外で全体の2/3程を調査した。南北方向の長さが5.9を測る橢円形の壇穴住居址で、長軸方向はN29°Eを示す。壁高は15~7cmを測り、緩やかな壁面をなす。床面は軟らかく不良であり、中央部に2.4×2.2mの円形で、床面から深さ59cmを測る穴が認められる。土層では穴の上に貼り床は認めなかったが、穴と覆土で差があり、穴の上にも床面があったと考えられる。しかし、住居址内にこのような穴が認められる例はほとんどなく、どういった役割をしていったかを推定することはできなかった。主柱穴はP 1~P 3で、東側主柱穴は調査区外にかかるて検出できなかった。

遺物 土器・石器があり、覆土中から出土したが、特に集中箇所は認められなかった。縄文土器（26-1～32）は、深鉢の器形と考えられる。文様は半截竹管を使って施文する個体が多く、縄文が施される個体（30-32）がわずかにある。石器は、打製石斧（26-33～36、27-1～3）、横刃型石器（27-4～6）、打製石錐（27-7～8）、螺旋器（27-9）、打製石錐（27-10）、打製石錐未成品（27-11～13）、両極石器（27-14～15）がある。

出土遺物より縄文時代中期初頭に位置づけられる。



挿図47 SB 41

(2) 方形周溝墓

① SM 01 (挿図48・第28図・図版33・34・56・57)

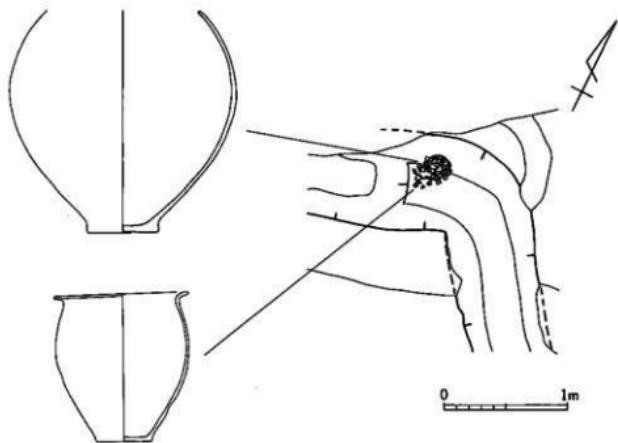
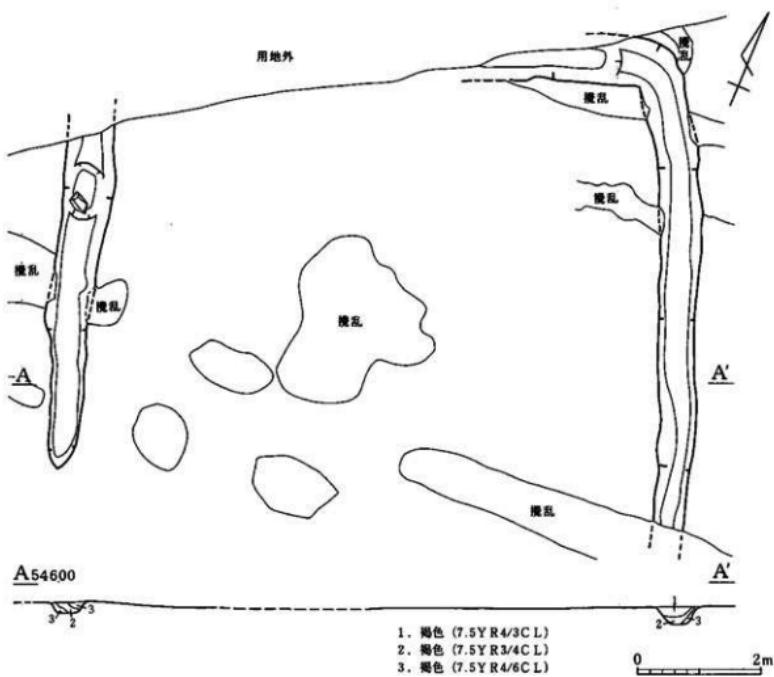
遺構 第Ⅲ地区中央部で西・東側周溝と北側周溝の一部を検出し、方形周溝墓と判明した。南側周溝は検出できなかったが、上層からの攪乱により検出できなくなったものと考えられる。よって、全体形は不明であり、東西方向の規模は10.4mを測る。西周溝の調査延長は5.4mで、幅80～46cm・深さ34～15cmを測る。東周溝の調査延長は7.4mで、幅64～48cm・深さ42～13cmを測る。北周溝の調査延長は3.0mで、幅80cm・深さ66～43cmを測る。主体部は周溝内の中央部を精査したが、攪乱を受けているため確認できなかった。北東隅の周溝内から壺部が残る壺を横にして底面に密着した状態で出土し、ほぼ完形の壺が壺の頸部に口縁部をあわせる形で確認された。土器棺と考えられる。また、西周溝内で長さ86cm・深さ46cmを測る穴が確認された。遺物などの出土はなかったが、周溝内土壤の可能性が高い。

遺物 土器棺として使われた弥生土器壺（28-1）・壺（28-2）がある。

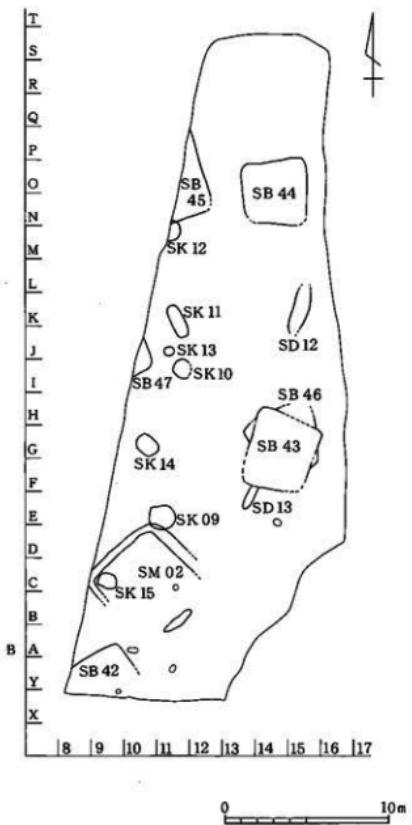
出土遺物から弥生時代後期後半に位置づけられる。

(3) 遺構外出土遺物

遺構に直接結びつかない遺物はきわめて少なく、打製石斧2点（28-3・4）がある。他に、試掘調査で第Ⅲ地区設定したトレンチから打製石斧1点（31-10）が出土した。



挿図48 SM 01



挿図49 第IV地区全体図

4) 第IV地区

(1) 壺穴住居址

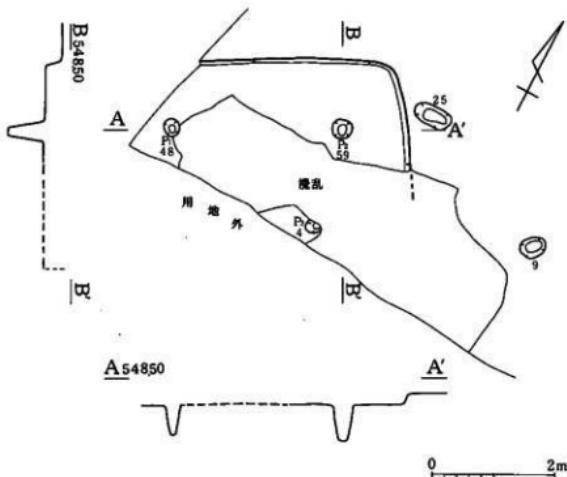
① SB 42 (挿図50・第28・29図・図版36・57)

遺構 A Y 9を中心にして検出し、南・西側が用地外で全体の1/4程を調査した。床面上の大半から東壁外にかけて、調査前の立木伐採時に枝を処理するために重機により大きく掘り下げてあり、全体の様相が分からなくなってしまった。規模・主軸方向とも不明の壺穴住居址である。壁高は26~18cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。床面は残存部分では平坦でたたき状に堅く良好である。調査終了後に床面の掘り下げ調査を実施したが、貼り床や掘り方はみられなかった。主柱穴はP 1・P 2で、P 3の用途

は不明である。炉址は確認されなかつたが、攪乱部分に新しい破損跡のついた甕が確認され、炉址の埋設土器であった可能性が高い。その土器の出土位置からみても、北西側主柱穴中間に土器埋設炉があつたと考えられる。

遺物 土器・石器があり、28-10は炉址の埋設土器の可能性の高い甕である。弥生土器壺（28-5～9）・甕（28-10～13、29-1～4）・高环（29-5）、打製石斧（29-6）・敲打器（29-7～10）がある。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



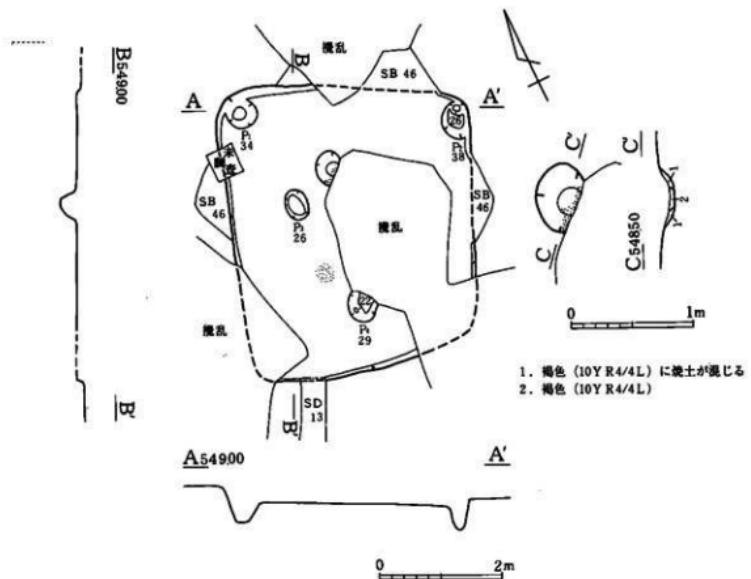
挿図50 SB 4 2

② SB 4 3 (挿図51・第29・30図・図版36・57)

遺構 BG14を中心にして検出し、全体を調査した。床面上や西壁外が調査前の立木伐採時の攪乱を大きく受けしており、全体の様相が分からなくなってしまった。弥生時代後期のSB 4 6を切る。4.7×3.9mの隅丸長方形の堅穴住居址で、主軸方向はN13° Eを示す。壁高は27～8cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は残存部分では平坦であるが軟らかく不良である。調査終了後に床面の掘り下げ調査を実施したが、貼り床や掘り方はみられなかった。主柱穴は北西・北東隅のP 1・P 2で、南東・南西側のものは攪乱により確認できなくなつた。炉址は南東側が攪乱を受けているが、住居址中央北壁寄りに位置する地床炉で、直径54cm程の円形に床面を浅く掘りくぼめ、底や壁面に焼土が認められた。また、住居址中央南東壁寄りの床面上に29×31cmの円形に焼土があり、炉址的な役割が考えられる。

遺物 出土量は少なく、弥生土器壺（29-11・12）・甕（29-13）、打製石斧（29-14）・有肩扁状形石器（29-15）・敲打器（30-1・2）がある。他に、土器片が中袋に一杯分ある。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。



挿図51 SB 4 3

③ SB 4 4 (挿図52・第30図・図版37・58)

遺構 B 014を中心にして検出し、全体を調査した。この箇所は台地先端部で表土から遺構検出面がきわめて浅いので、冬場の凍結等により床面が把握できたのが点線で囲んだわずかの範囲であり、それ以外はかろうじて判別できた土の差により遺構範囲は把握した。3.7×3.9m の隅丸方形の竪穴住居址である。壁高は16~11cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面はわずかな残存部分ではたたき状に堅く良好である。主柱穴や役割が特定できる穴は確認できなかつた。炉址の確認もできなかつた。



挿図52 SB 4 4

遺物 出土量はきわめて少なく、弥生土器片が31点と凹石（30-3）あるのみで、図化・拓影できる個体はない。

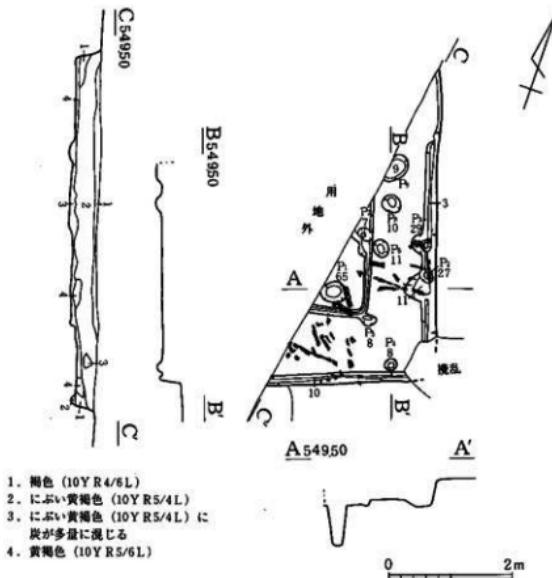
出土遺物から弥生時代後期と考えられるが、詳細な位置づけは不可能である。

④ SB 45（挿図53・第30図・図版37・58）

遺構 BO12を中心にして検出し、西側が用地外で東・南壁と床面の一部を調査した。規模・主軸方向とも不明の竪穴住居址である。壁高は34~30cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。周溝が東壁下に長さ3.2m・幅14~8cm・深さ4~2cm、南壁下で長さ2.2m・幅10cm・深さ8~4cm確認された。さらに、壁から1m程内側でも、壁面と平行する長さ1.7m・幅13~7cm・深さ5~2cmの周溝状の溝が確認できた。床面はたたき状に堅くきわめて良好で、内側周溝の内部はわずかに低くなっていた。主柱穴はP1で、底面はたたき状に堅くなっていた。床面直上には炭が確認され、火事の住居址である。

遺物 出土量は少なく、弥生土器壺（30-4・5）、抉入打製石包丁（30-6・7）がある。

出土遺物から弥生時代後期終末に位置づけられる。



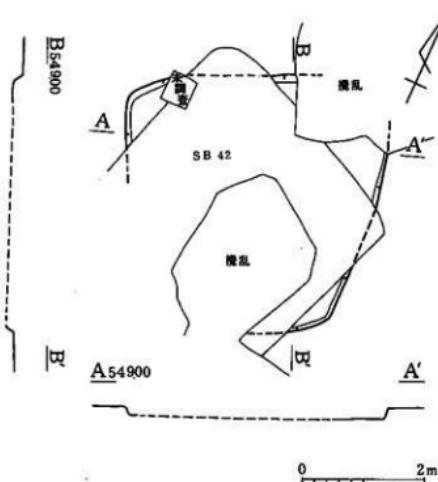
挿図53 SB 45

⑤ SB 46（挿図54・図版36）

遺構 BG14を中心にして検出した。弥生時代後期のSB42に切られる上、北隅が立木伐採時の擾乱を受けており、西・東隅と一部床面を把握したのみである。4.1×4.1mの隅丸方形の竪穴住居址である。壁高は20~10cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は残存部分では軟らかく不良である。その他の住居址施設は確認できなかった。

出土遺物はない。

遺構の形態などから弥生時代後期に位置づくが、遺物の出土がないので、確定した時期を示すことは不可能である。



挿図54 SB 4 6

⑥ SB 4 7 (挿図55・第31図・図版37)

遺構 B I・J 10で検出した。西側が用地外で、南東隅と床面の一部を調査した。規模・主軸方向とも不明の竪穴住居址である。壁高は38~24cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。床面は残存部分ではたき上に堅く良好である。その他の住居址施設は確認できなかった。

遺物 出土量はきわめて少なく、弥生土器片35点があり、壺(31-1)・甕(31-2)を拓影で示した。

出土遺物より弥生時代後期後半に位置づけられる。



挿図55 SB 4 7

(2) 方形周溝墓

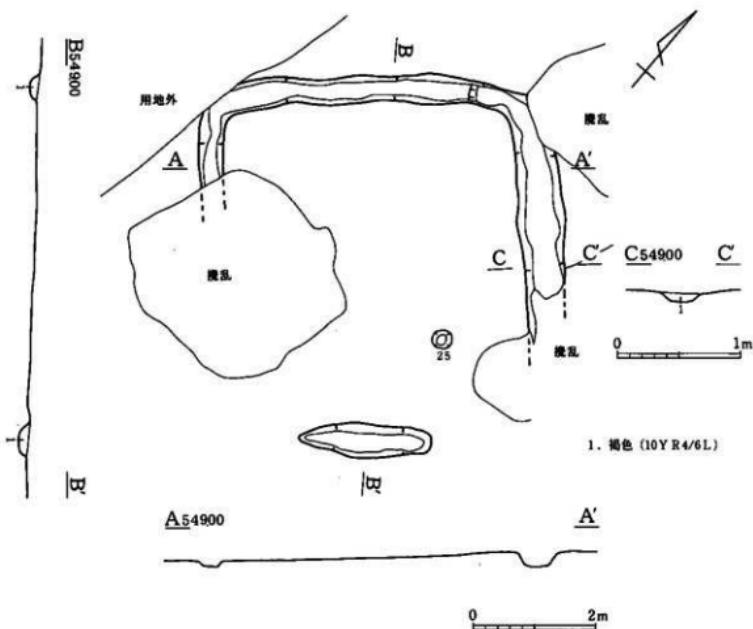
① SM 0 2 (挿図56・第31図・図版38・58)

遺構 第IV地区南西部で四角く溝を検出し、一部擾乱を受けているが方形周溝墓と判明した。周溝の法量は、北西溝が長さ5.0m・幅50~37cm・深さ22~15cm、北東溝が東側に擾乱を受け長さ3.6m・幅73~52cm・深さ24~16cm、南西溝が東側に擾乱を受け長さ1.2m・幅42~38cm・深さ10cm、南東溝が長さ2.1m・幅52~30cm・深さ16~4cmを測る。全体形は南隅と東隅に陸橋部をもつ方形を呈する。周溝外側からの規模は6.5×5.8mを測り、主軸方向はN51°Wを示す。主体部は周溝内側を精査したが確

認できなかった。検出面が表土からきわめて浅いこともあり、削平されてしまったものと判断される。

遺物 北東周溝内の底面から15cm浮いた位置から弥生土器壺の口縁部(31-3)が出土した。この土器が周溝内祭祀などに用いられたかの判断はできなかったが、遺構所属時期を決める材料とはなった。

出土遺物から弥生時代後期後半に位置づけられる。



挿図56 S M 0 2

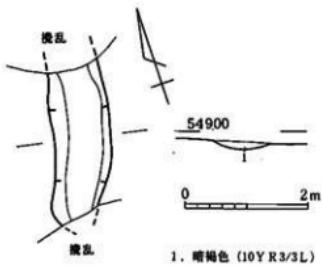
(3) 溝 址

① S D 1 2 (挿図57・図版39)

遺構 B J 15～B L 15にかけて直線的に検出した。北側に延長するが擾乱を受け、南側も擾乱を受けてはいるが、南壁面の状況からこの箇所で終わっていると考えられる。調査延長は2.4mで、幅92～73cm・深さ16～12cmを測り、長軸方向はN16° Eを示す。土層は一層で、半月状に近い断面形をなす。

出土遺物はない。

時期は不明である。



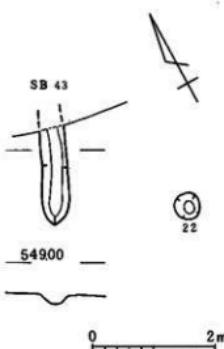
挿図57 S D 1 2

② SD 13 (挿図58・図版39)

遺構 BE13～BF13にかけて直線的に検出した。北側で弥生時代後期のSB43と重複し、南西側で終結する。調査延長は1.5mで、幅84～80cm・深さ15～8cmを測り、長軸方向はN28°Eを示す。土層は一層で、逆台形の断面形をなす。

出土遺物はない。

時期は不明である。



挿図58 SD 13

(4) 土坑

① SK 09 (挿図59・図版40)

遺構 BE10・11で検出し、上層が攪乱を受けているが、全体を調査した。156×146cmの不整円形を呈し、深さ63cmを測る。底面はほぼ平坦で、緩やかな壁面をなす。

遺物 土器片1点がある。

② SK 10 (挿図59・図版40)

遺構 BI11で検出し、東側が攪乱を受けているが、ほぼ全体を調査した。110×102cmの梢円形を呈し、深さ68cmを測る。土層は自然埋没した状況を示し、断面形は丸みを帯びた逆台形をなす。

遺物 土器片3点がある。

③ SK 11 (挿図59・第31図・図版40・58)

遺構 BJ・K11で検出し、全体を調査した。200×80cmの長方形を呈し、深さ21cmを測る。長軸方向はN27°Wを示す。底面は平坦で、ほぼ垂直の壁面をなす。土層は2層に分かれ、底面付近に薄い層が認められる。

遺物 有茎打製石器1点(32-2)が中央部の底面から13cm浮いた位置から出土した。他に、弥生土器片10点がある。

④ SK 12 (挿図59・図版40)

遺構 BM・N11で検出し、南側が用地外で全体の1/2程を全体を調査した。弥生時代後期のSB45に切られる。東西方向の長さが130cmの土坑で、深さ79cmを測る。土層は自然埋没した状況を示し、断面形は逆台形をなす。

遺物 土器片11点がある。

⑤ SK 13 (挿図59・図版40)

遺構 BJ 11で検出し、全体を調査した。54×46cmの楕円形を呈し、深さ23cmを測る。底面は平坦で、断面形は逆台形をなす。

遺物 土器片3点がある。

⑥ SK 14 (挿図59・図版40)

遺構 BG 10で検出し、全体を調査した。140×108cmの丸みを帯びた長方形を呈し、深さ116cmを測る。土層は自然埋没した状況を示し、断面形は逆台形をなす。

出土遺物はない。

⑦ SK 15 (挿図59・図版40)

遺構 BC 9で検出し、全体を調査した。114×90cmの楕円形を呈し、深さ59cmを測る。底面は平坦で、緩やかな壁面をなす。底面に密着した石1個、底面から14cm浮いた位置で石1個が認められた。

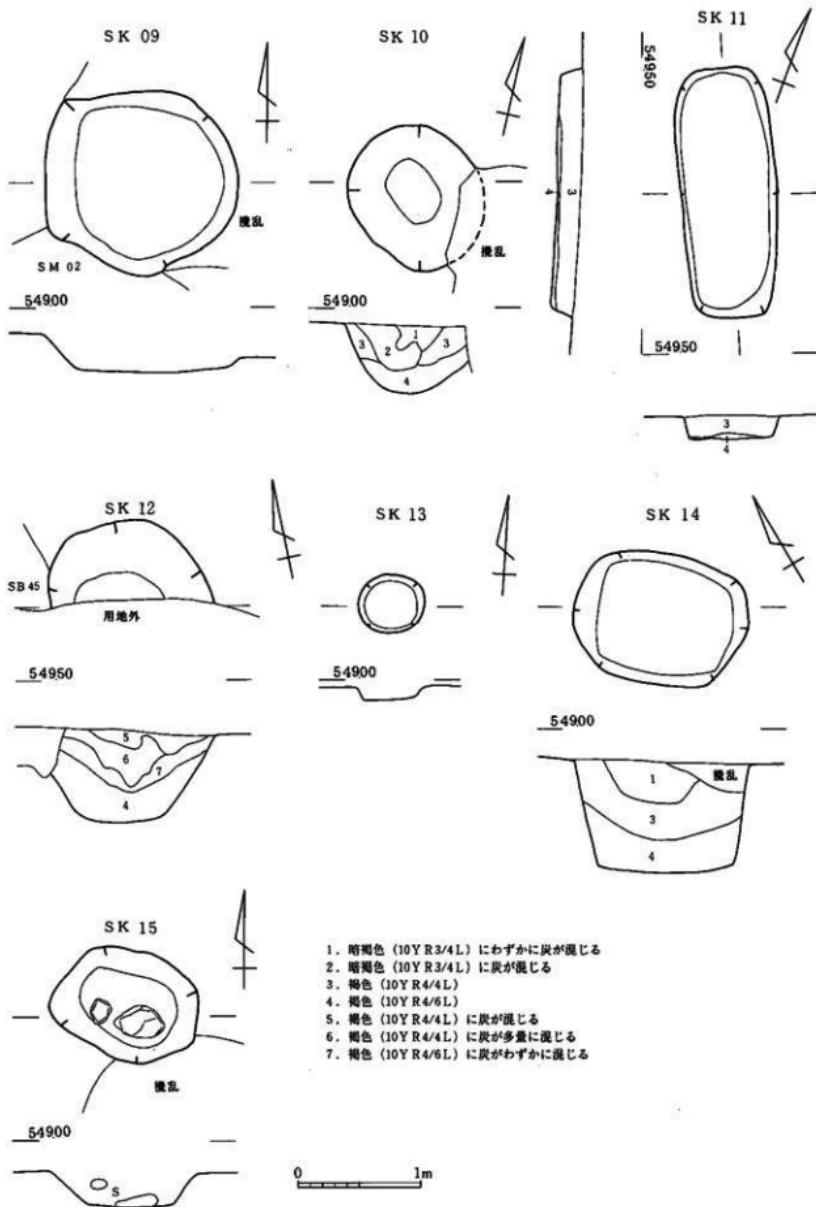
遺物 土器片5点がある。

以上が第IV地区で検出された土坑である。時期を決定できる遺物の出土がないので、詳細な位置づけが困難ではあるが、遺構の状況などからいくらかの判断を下すことはできる。比較的深い掘り方をもつSK 14は、縄文時代の落とし穴の可能性が高い。覆土の様相も弥生時代の竪穴住居址とは異なっていたので、縄文時代とする根拠とした。円形や楕円形を平面形とするSK 09・10・12・13・15も覆土の様相は弥生時代とは異なっており、縄文時代に位置づけることが可能と考える。SK 12の切り合い関係もその判断を裏づけている。SK 11以外の用途は不明である。

長方形の平面形を呈するSK 11は、きわめて感覚的な判断であるが、弥生時代後期の墓壙である可能性を指摘しておく。ただし、断面の土層や底面に小口痕など木棺の痕跡がないかと精査したが、確認できなかった。

(4) 遺構外出土遺物

遺構に直接結びつかない遺物はきわめて少なく、打製石斧2点(31-4・5)がある。



插図59 SK 09～15

IV まとめ

今次調査で検出された遺構・遺物はすでに述べられたとおりである。時間などの制約により、十分な説明や検討が加えられていないのは遺憾である。ここでは、調査によって得られた成果・問題点を時期毎に指摘してまとめとしたい。

1) 縄文時代

縄文時代では、縄文時代中期初頭に位置づく竪穴住居址 S B 4 1 が 1 軒調査された。該期の遺構は調査例が徐々に増加しており、その様相が分かるようになってきている。そうした中で、竪穴住居址がある程度まとまるいわば集落としての発見される例は少なく、竪穴住居址が単独で検出されることが多い。調査範囲が遺跡全面に及ぶことがなく部分の調査にとどまっているため、調査範囲外に存在する遺構を考慮しなければならないが、大規模な集落を構成するとは想定できない。やはり、単独ないしは数軒単位で集落が構成されると考えて多寡ないといえる。検出された位置は台地の肩の部分であり、その場所が選地されていることも考えられる。同じ座光寺地区の大久保遺跡でも同様な位置で竪穴住居址が調査されており（飯田市教育委員会1997）、もう少し類例が増えることによって、該期集落の様相もはっきりしていくと考える。

遺物については、S B 4 1 から出土した土器・石器があるが、該期の十分な組成を示すものではない。土器は、集合沈線文が施される個体が主体を占め、中期初頭に位置づける決め手となった。石器は打製石斧が多く、横刃型石器・打製石錐がある。黒曜石を使った小型石器では、打製石錐を作っている途中で破損したと考えられる個体があり、黒曜石の大半は使用痕などが認められない剥片である。黒曜石の石器については前期から継続するが、打製石斧・横刃型石器・打製石錐は中期に盛行する石器といえる。前期の様相は不明の点が多いが、こうした石器類は基本的にないと考えられる。中期的な石器類の初現時期とも考えられるが、前後の時期の土器編年を整備した上で出現時期などを考える必要がある。石器の組成は社会の構造を把握する上ではきわめて重要な資料といえる。その用途も含めて総合的な検討が望まれる。

2) 弥生時代

弥生時代後期後半に位置づく中島式土器の標識遺跡ということもあり、調査された大半の遺構・遺物は該期のものである。調査されたのは広大な遺跡範囲のうち、台地先端部に当たる箇所を通過する路線幅を対象したにすぎない。いわば、遺跡の一部分についてトレンチ調査がされただけであるが、そこから得られた情報は貴重なものである。集落や遺物について若干の考察を試みたい。

① 土器の編年について

竪穴住居址などから土器が出土しているが、壺に関しては完形に復元できるものがないが、該期の十分な組成を示すものではない。しかし、煮沸形態として最も時代を反映する壺は、炉址の埋設土器として普遍的に使われていることもあり、比較的多くの資料が得られている。そこで、壺を主体として座光寺中島遺跡の土器について考えてみる。なお、一部については既存の出土例も参考にした。

壺の形態分類は以下であり、挿図60で示した。

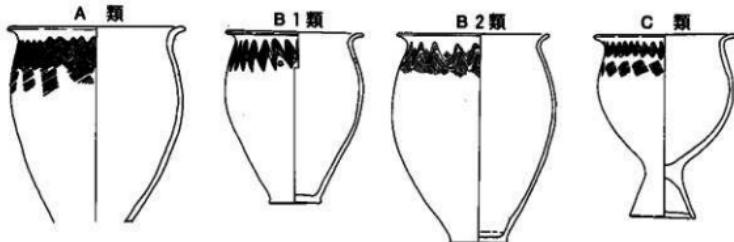
A類：緩やかに外反する口縁部をもち、胴部は砲弾形を呈する平底壺。

B類：強く外反する口縁部をもち、胴部は砲弾形を呈する平底壺。口縁部と胴部の関係により細分される。

B1類：口縁部に最大径をもつか胴部と等しいもの。

B2類：胴部に最大径をもつもの。口縁部の外反がやや緩くなり、胴部が丸みを帯びるようになる。

C類：外反する口縁部をもつ台付壺。今次調査では良好な出土例はみられなかつたので、酒屋前遺跡7号住居址（長野県教育委員会1972）のものを参考に示した。



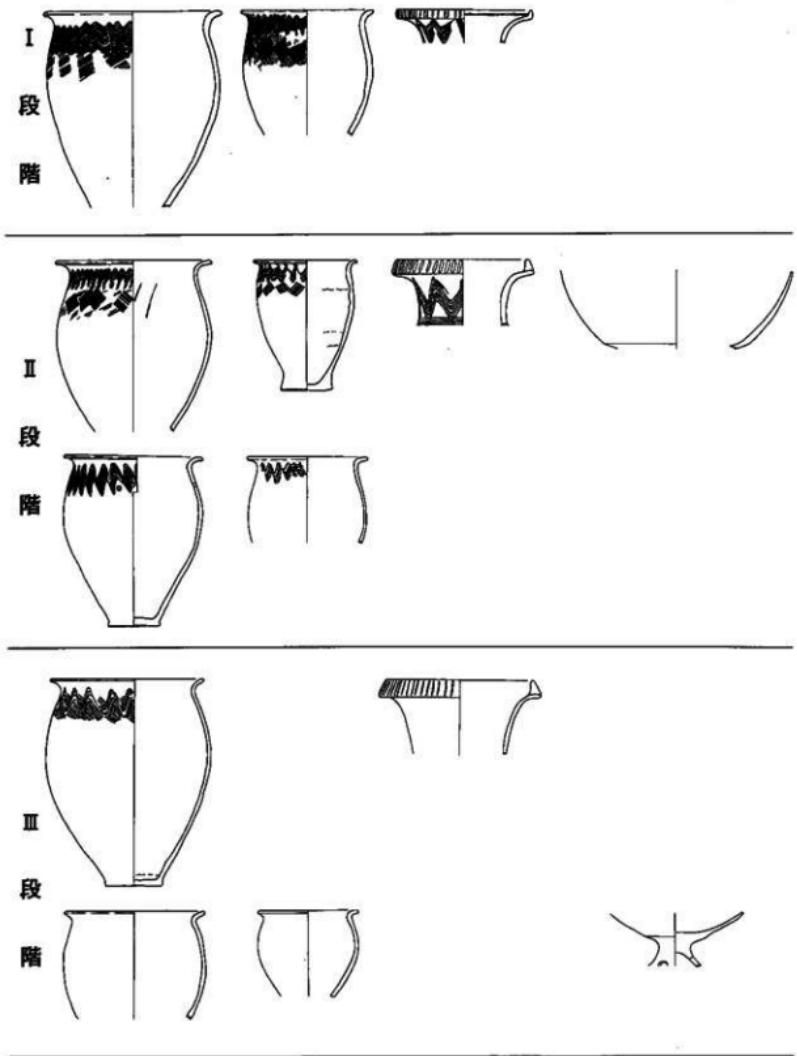
挿図60 壺の形態分類

堅穴住居址には切り合い関係を持つものがあり、すべて同時期に存在したものではない。そこで、切り合い関係を参考にしながら時期差を抽出してみたい。まず、炉址の埋設土器に着目して分析し、さらに出土状態に注意しながら遺構出土遺物の一括性を検証することとした。

切り合い関係がある堅穴住居址はSB21をSB20とSB22が切る。よって、SB21が古く、SB20・22が新しいといえる。SB21炉址の埋設土器は胴部のみの個体であるので分類に該当させることはできないが、炉址の中に入っていた個体（9-12）はB1類である。圓化個体は床面及びその直上からの出土であり、極端な時期差はないものと考えられる。B1類が2点（9-13、10-1）ある。SB22炉址の埋設土器はB2類で（11-4）、SB20の炉址は抜き取られていたが、その脇の床面上から出土した個体はB2類（8-8）である。SB29をSB30が切る。SB30炉址の埋設土器はA類で、SB29炉址の埋設土器はB2類で（18-2）、伴出遺物もB2類（18-1）である。

以上から、A類・B1類よりB2類が後出すると考える。A類・B1類の新旧関係は今次調査では確認できなかつたが、座光寺原式土器の壺の主体がA類であることを考慮すれば、A類が先行するといえる。総合的に判断すれば、A類→B1類→B2類との前後関係が把握される。これは、殿原遺跡で示された壺Bによる3段階区分案（飯田市教育委員会1987）とも整合する。殿原遺跡を参考にすれば、壺の構造文の文様構成で細分できる可能性を示唆している。

以上をふまえて今回は3段階編年案を提示し、挿図61で示した。



挿図61 座光寺中島遺跡出土土器編年表

I段階

S B 17・29・39出土土器を標識とする。壺A類を主体とする時期である。その文様構成は、頸部から胴上部に柳描文の波状文と斜走短線文が施文される。壺は口縁部が折立するいわゆる受口壺で、頸部の外反がやや緩やかな形態をなす。台付壺の脚台部があるので、少量の壺C類があると考えられる。

II段階

S B 18・21・31出土土器を標識とする。壺B1類を主体とする時期である。その文様構成は、柳描波状文と斜走短線文が組み合わされるものと波状文のみのものがあり、これを指標として2時期に細分できる可能性がある。壺A類はわずかながら残存すると考えられる。壺は受口壺が主体で、頸部が強く外反する。高坏かわずかながら認められ、深い坏部が内湾して立ち上がる。

III段階

S B 22・25・26・30出土土器を標識とする。壺B2類を主体とする時期である。柳描波状文が施文される個体と無文のものがあり、2時期に細分する指標となる。壺は受口壺があり、前段階に比べると頸部の外反がやや緩やかとなる。高坏もわずかにあり、坏部が浅い形態をなす。

座光寺中島遺跡には、型式設定時に提示された資料（宮沢1967）と農道調査地点出土資料（下伊那誌編纂委員会1991）があり、今次資料と比較検討してみる。

型式設定時の資料は、壺A類・B1類・受口壺、坏部が深いと考えられる高坏などがある。S字壺があるが、古墳時代前期に位置づくものである。以上からみて、I段階・II段階に併行する資料が提示されている。農道調査地点の10号住居址は、無文の壺B2類に外来系土器である「く」の字口縁壺と頸部に柳描波状文と横線文が施文される壺がある。III段階新に併行すると考えられる。

以上のように、既出資料もI段階からIII段階に位置づくといえる。

最後に編年的な位置づけを示しておく。I段階・II段階は弥生時代後期後半に、III段階を弥生時代後期終末に位置づくと考える。筆者は弥生時代後期の土器編年について考えたことがあり（山下1992）、それと比較すると、I段階は後期IV段階、II段階は後期V段階、VI段階は後期VI段階と併行関係をもつ。

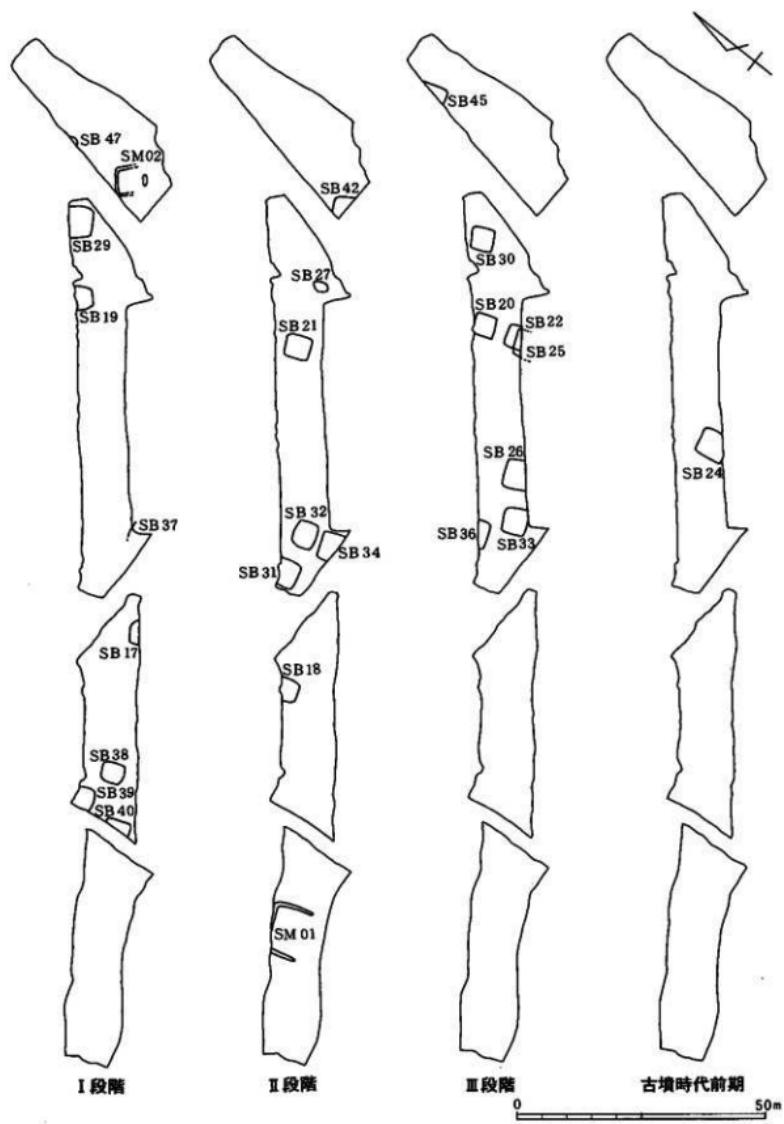
② 石器について

当地方の弥生時代後期は打製石器類が卓越することが知られており、今次調査でも多くの石器が出土した。大半が堅穴住居址から出土しており、他の時代の遺構がきわめて少ないとあって、他時期からの混入を考慮する必要がない良好な資料といえる。

恒川遺跡群の分類に倣って堅穴住居址から出土した石器の点数を数えてみた。なお、全体の傾向を把握するために弥生時代の堅穴住居址29軒を一括した。

打製石斧16点・抉入打製石包丁11点・横刃型石包丁11点・有肩扁状形石器26点・有抉石器1点・有柄石器1点・横刃型石器9点・磨製石斧3点・砥石10点・敲打器19点・凹石3点・磨製石鎌1点・打製石鎌2点・打製石匙1点・石製紡錘車1点である。

まず、有肩扁状形石器を筆頭に収穫具が卓越することが目を引く。それに比して耕起用である打製石斧が少なく、特に石鎌ともいわれる大型のものはきわめて少ない。こうした農具類から農耕や文化を類推しようとする動きがある。（神村1996）より綿密な石器観察をふまえ、さらに進化させる必要がある。磨製石斧があり、特にSB38からは完形の偏平片刃石斧が出土している。磨製石斧類は基本的に中期で消滅すると考えられており、その位置づけには鉄器とのからみもあり、微妙な問題を含んでいる。



挿図62 集落の変遷

③ 集落の変遷について

土器の様相から弥生時代の遺構はⅠ段階～Ⅲ段階の3時期に変遷することが明らかとなった。その中で、Ⅱ段階・Ⅲ段階についてはさらに新旧の2時期に細分できると考えられる。そこで、所属時期が明らかにできる竪穴住居址と方形周溝墓について古墳時代前期を含めて4時期に位置づけて、挿図62でしその変遷について考えてみる。所属時期が明らかでない竪穴住居址が存在するが、全体の傾向を把握することは可能である。

集落として利用され始めるⅠ段階では、南西部・中央部・北東部の3箇所に竪穴住居址数軒程度のまとまりがみられ、北東部には集落に近接して方形周溝墓が築造される。Ⅱ段階は基本的な集中箇所に変化はないが、南西部に竪穴住居址が少くなり、竪穴住居址からやや離れた位置に方形周溝墓がある。Ⅲ段階になると、中央部・北東部のまとまりが想定され、南西部には調査範囲では竪穴住居址はみられない。古墳時代前期になると集落は縮小し、調査範囲ではSB24の1軒のみとなる。

時期毎に竪穴住居址のまとまりがみられるのは、集落内の集團を表しており、それが農業共同体の単位集團との把握が可能と考える。集團毎に集落内の一定の場所を選地していて、そうした場所はある程度継続したと考えられ、集落内の規制が働いているといえる。單位集團の構成を考えるには住居としての竪穴住居址ばかりでなく、高床倉庫の掘立柱建物址や圓溝址などの用途不明の遺構を有機的に組み立てなければならない。掘立柱建物址が想定される柱穴が集中するのは、竪穴住居址がみられない箇所になる。一単位の遺構と把握するのが困難な程集中しており、何時期にもわたって建てられてきた結果といえ、集團それぞれに倉庫を保有していたと考える。

方形周溝墓は集落縁辺部に2基確認された。集落内の縁辺部に構築されたもので、墓域として意識されたとは考えられない。また、中島ムラの規模からすれば、少ないとも考えられる。方形周溝墓に葬られた人をどう位置づけるかで、そうした想定が変化するともいえる。飯田・下伊那の弥生時代後期の墓制總体から考えていく必要性を指摘しておく。

さきに指摘したように、圓溝址やSB27・28のように通常の竪穴住居址とは異なる遺構が存在する。集落景観を復元する上ではそうした遺構の存在を忘れてはならず、今後に残された課題は大きい。

④ 集落の範囲について

座光寺中島遺跡の範囲は、太線で囲まれた段丘面に当たり、東・南側は段丘や河川の開析谷によって画されている。西側から北側は湿地帯が想定される窪地が南北方向に連続しており、大堤溜池も湿地帯を利用して築造されたものと考えられる。いわば、周囲が地形によって画されており、一集落としての姿を把握することが比較的容易な遺跡といえる。

今次調査地は座光寺中島遺跡の南部に当たり、そこを南西から北東方向へ段丘面を横断する形で調査した。調査前では段丘の先端部に当たるため集落の範囲外とも考えていたが、調査結果で示したように、広範囲に集落が展開することが明らかとなった。農道調査地点での発掘調査と確認調査の様相を加味すれば、中島集落の範囲をある程度把握することが可能である。挿図63でこれまで調査・確認された遺構を示した。ゴシック数字で示したのは農道調査地点で確認された竪穴住居址で、発掘調査された遺構についてはおおよそその調査位置を落としてみた。広域農道調査地点については、調査位置と縮小した全体図を示した。



挿図63 座光寺中島遺跡・座光寺原遺跡調査位置図

調査された範囲は遺跡中央部から南端部に当たり、合計45軒の竪穴住居址が明らかとなっている。中央部に未調査部が広範に存在するが、同様な遺構分布状況であることは容易に想像できる。これを裏付けるように、広域農道調査地点北側の地権者複数の方から、耕作すると土器が出土したりミニバックでも起こすことが難しい堅い面があるとの話を伺うことができた。遺跡北部の様相は明確ではないが、同様に広がっている可能性が高い。そうすれば、南北方向450m・東西方向120mの範囲が集落範囲と想定される。全くおおざっぱな単純計算であるが、広域農道調査地点の約2,200m²で、想定される集落範囲面積30,000m²の約7.3%に当たる。そこで調査された29軒の竪穴住居址を面積で案分すると、全体では400軒の竪穴住居址が存在することとなる。様相が未確定な北側部分を除いても約25,000m²の集落範囲となり、330軒の竪穴住居址が想定される。いずれにせよ、大規模な集落が展開していたと考えられる。前述した土器の様相により遺構は3段階に区分され、細分されることを含めると、5段階で変遷するといえる。時期毎に集落規模に極端な差はない想定されるので、同時存在する竪穴住居址は80軒程度となる。

飯田・下伊那地方の弥生時代後期の大規模な集落は、上郷飯沼の丹保遺跡や伊賀良殿岡の殿原遺跡がある。前者では138軒の竪穴住居址が調査され、集落範囲では350軒程度と推定されている（上郷町教育委員会1993）。後者は二次にわたる調査で93軒の竪穴住居址が検出された（飯田市教育委員会1987・1992）。それぞれの集落の継続時期が異なるので単純比較はできないが、そうした大集落と遜色ない規模を座光寺中島遺跡は有し、拠点的な集落をなしている。

⑤ 集落の移動について

座光寺中島遺跡の集落は繰り返し述べたように、後期後半から終末にかけての3段階5細分に変遷するものである。それ以前の遺構は検出されず、土器すらもないという状況である。いわば、突然大規模な集落が出現したこととなり、人とともに集落が移動したと考えられる。中島集落の以前の居住区と想定されるのは、座光寺原遺跡がある。昭和37年に前年の梅雨前線豪雨（3.6災）の復旧用の土取場となり、事前調査された。古い時期の調査ということもあり、大半が未調査であるが、9軒の竪穴住居址が確認されている（今村1967）。座光寺原遺跡の調査位置は挿図63の網点で示した。全資料の提示がないので、断定はできないが、時期はほぼ中島集落より古い後期前半と考えられる。周辺や未調査部を考慮すれば、ここにも一定規模の集落が展開していたといえる。当該地は座光寺中島遺跡の中心部分から湿地をなす窪地を挟んで300m程北西に離れているだけであり、近接した場所に集落が移動したと想定してておく。

3) 古墳時代

前述したように、弥生時代後期終末以降に突然集落が縮小し、調査範囲では1軒のみとなる。遺跡全体の様相は不明であるが、弥生時代のような大規模集落が展開するとは想定しにくい。

竪穴住居址を調査してみると、次の点で弥生時代とは異なっている。それは、竪穴の規模が大きくなり、床面が軟らかくなり、炉址が地床炉となるなどである。こうした点は、社会や時代の変化をも表しているとも考えられ、集落の縮小とともに今後の検討課題である。

竪穴住居址からは土器・石器が出土した。土器は駿河湾系の棒状浮文をもつ複合口縁壺やS字壺がある。器台が多く、器受部が大きなその形態は、これまで当該地の古墳前期で一般的に知られる形態のも

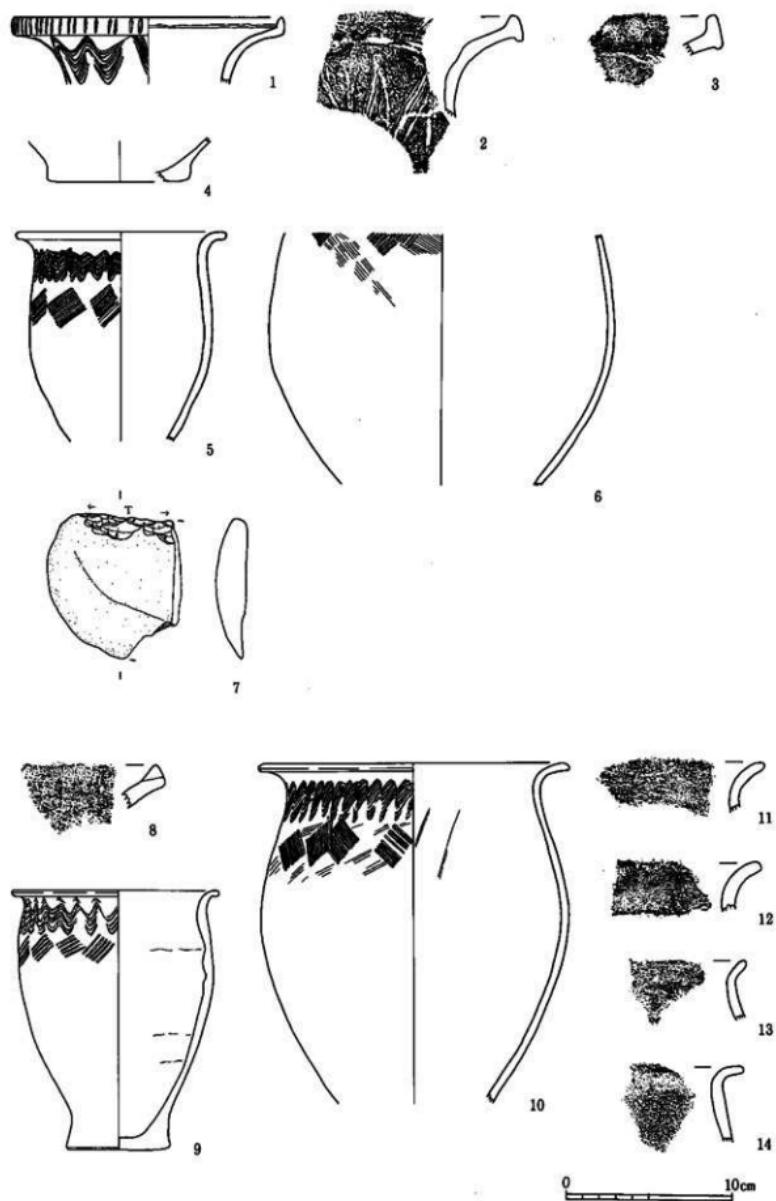
のとは異なっている。その出自については不明であるが、弥生時代後期の尾張から美濃で一般的な大型器台にその系譜を求めるかもしれない。

時期的な位置づけであるが、古墳時代前期でも弥生時代終末から連続するか断絶をもつかでその意味合いが変わってくる。土器様相がこれまで当地方で調査されている竪穴住居址とは異なるため、その位置づけに苦慮するが、弥生時代後期終末とは時期的に断絶があるのではと考えている。

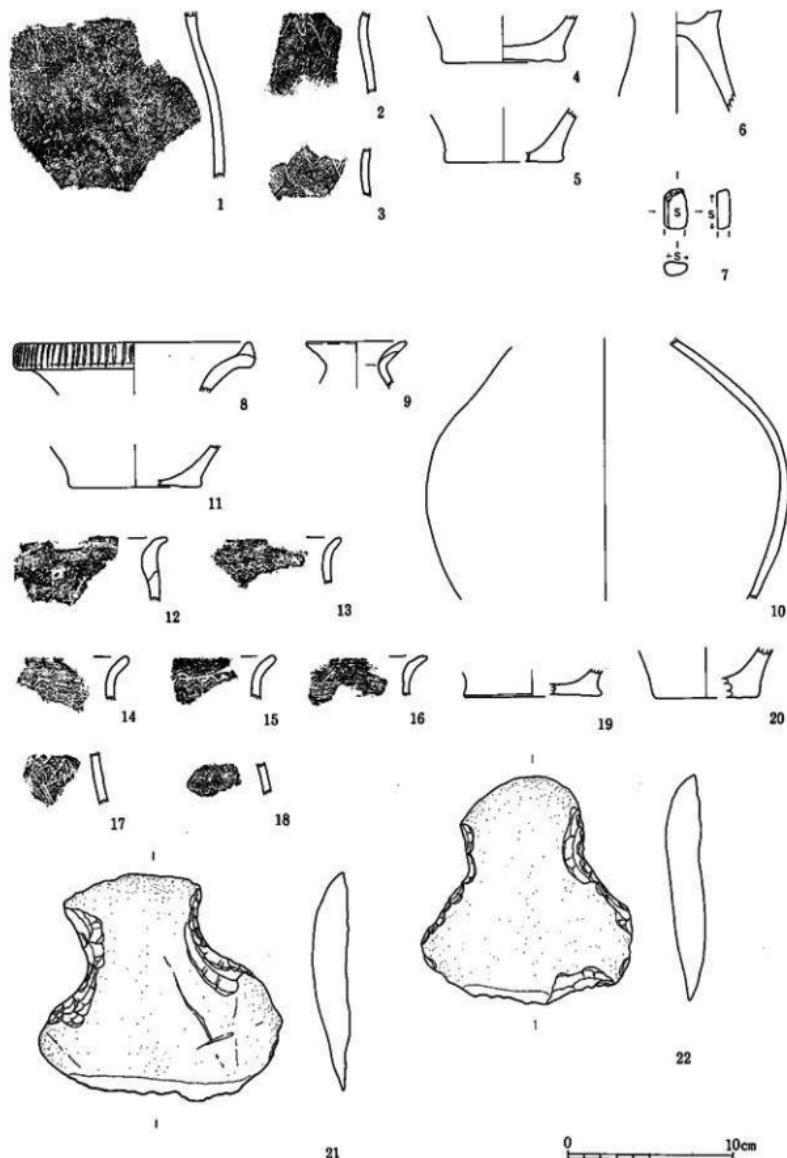
座光寺中島遺跡は耕作による深耕されてはいるが、保存状態の良好な遺跡で、伊那谷弥生時代後期を代表する集落遺跡であることが改めて明らかとなった。道路事情の悪さなどにより、大規模開発の波からは逃げてきたことが大きな要因となっている。今次調査の原因となった広域農道が開通すれば、これを契機として開発による破壊にさらされるおそれが想定される。その保護について十分な配慮を払っていく必要性を強調して、終わりの言葉とする。

引用・参考文献

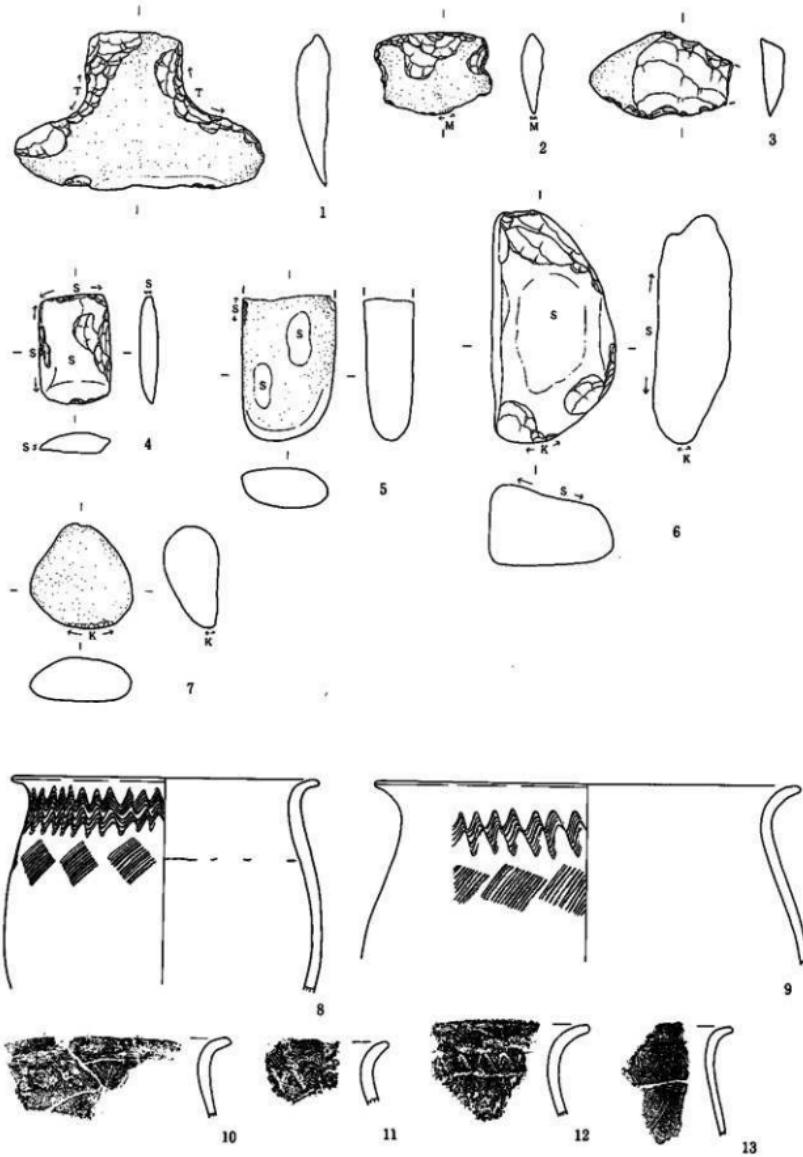
- | | | |
|-----------|-------|--------------------------------------|
| 飯田市教育委員会 | 1986 | 『恒川遺跡群』 |
| 飯田市教育委員会 | 1987 | 『殿原遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1988 | 『恒川遺跡 田中・倉垣外地籍』 |
| 飯田市教育委員会 | 1990 | 『高岡遺跡 - 高岡3・4号古墳 -』 |
| 飯田市教育委員会 | 1991A | 『恒川遺跡群 新屋敷遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1991B | 『恒川遺跡 田中・倉垣外地籍』 |
| 飯田市教育委員会 | 1992 | 『殿原遺跡 店舗建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書』 |
| 飯田市教育委員会 | 1996 | 『三尋石遺跡 三尋石(Ⅱ)遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1997 | 『大井遺跡 大久保遺跡』 |
| 今村善興 | 1967 | 『飯田市座光寺原遺跡』『長野県考古学会誌』4号 |
| 上郷町教育委員会 | 1988 | 『ツルサシ・ミカド・増田・垣外遺跡』 |
| 上郷町教育委員会 | 1993 | 『丹保遺跡』 |
| 神村透 | 1996 | 『下伊那における弥生後期の石器』『ヒト・モノ・コトバの人類学』 |
| 下伊那誌編纂會 | 1991 | 『下伊那史』第一巻 |
| 座光寺考古学研究会 | 1976 | 『飯田市座光寺中島遺跡の調査報告』『伊那』第24巻3号 |
| 宮沢恒之 | 1967 | 『中島遺跡』『長野県考古学会誌』4号 |
| 長野県教育委員会 | 1972 | 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 - 飯田市地内その2 -』 |
| 山下誠一 | 1992 | 『飯田・下伊那の後期弥生土器』『長野県考古学会誌』第65・66号 |



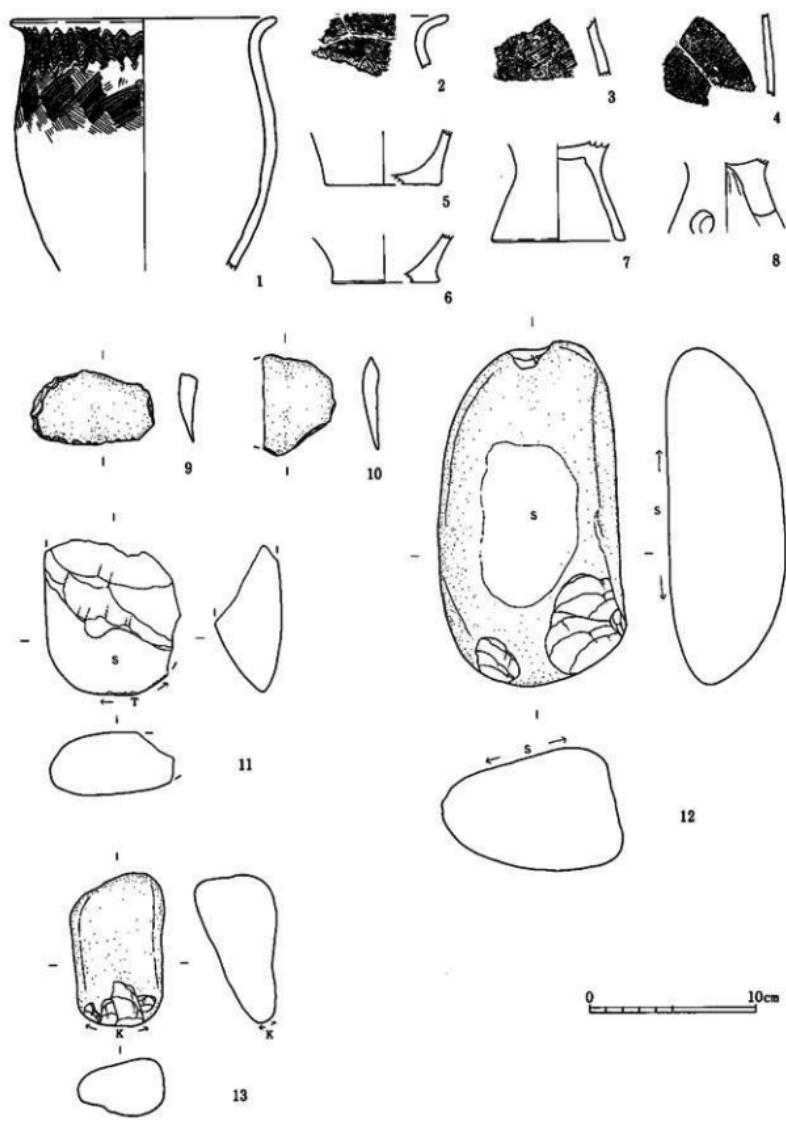
第1図 SB 17 (1~7)・SB 18 (8~14) 出土遺物



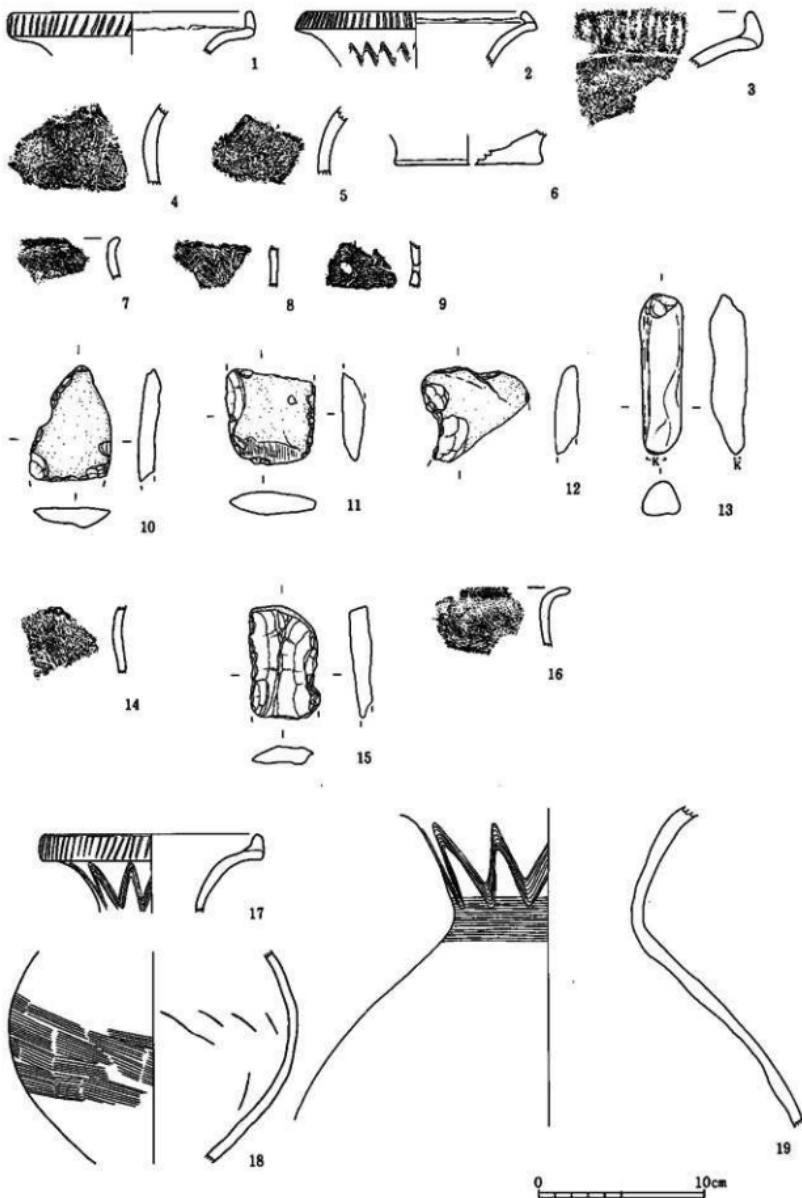
第2図 SB 18 (1~7)・SB 18 (8~22) 出土遺物



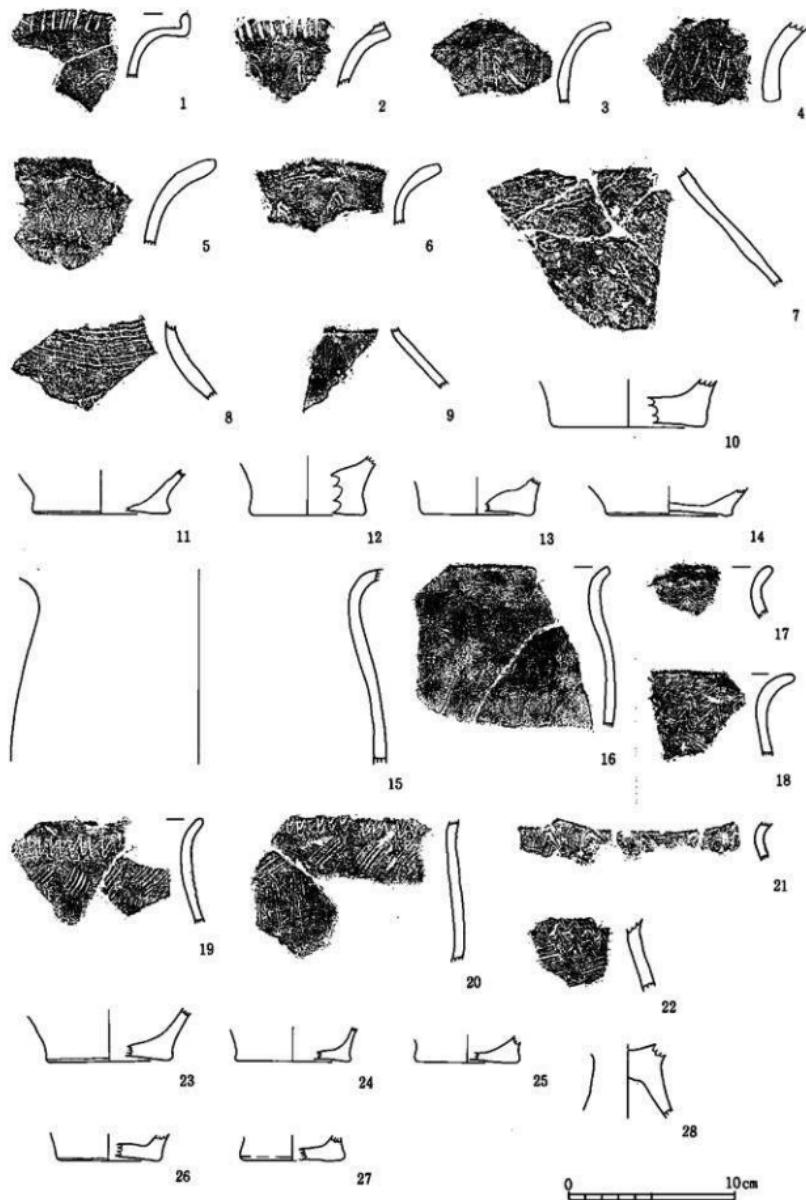
第3図 SB 38 (1~7)・SB 39 (8~13) 出土遺物



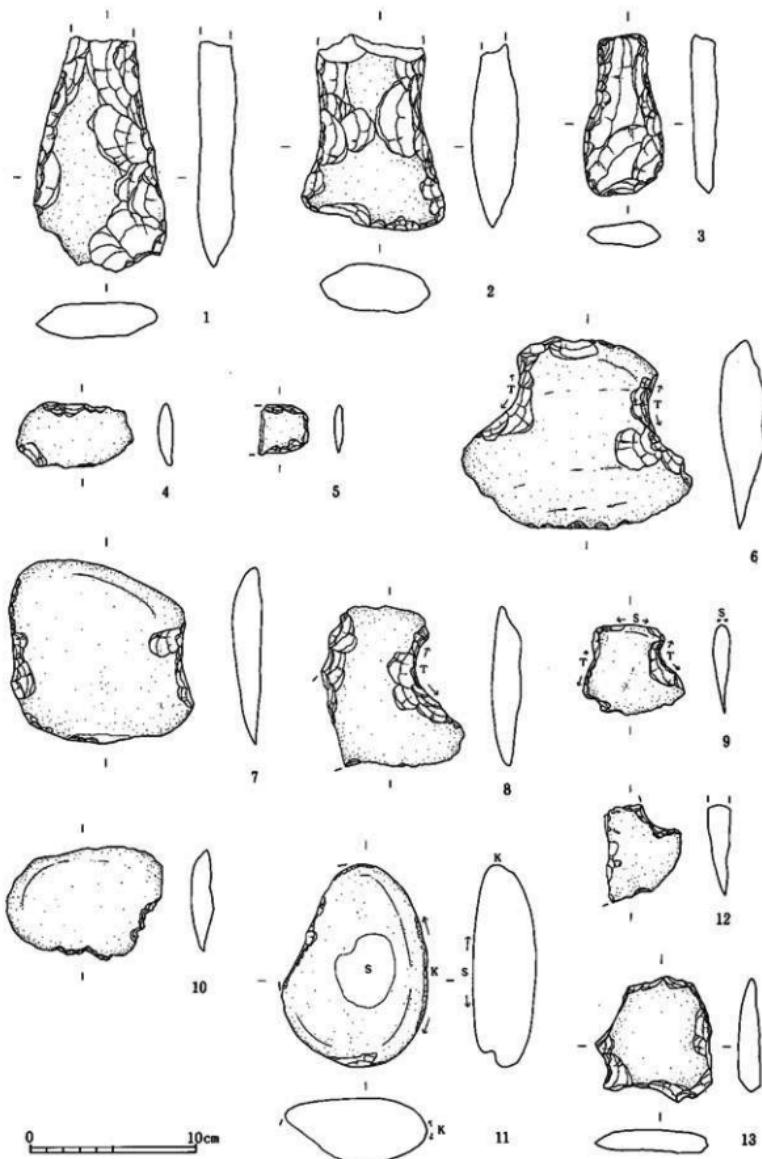
第4図 SB 39出土遺物



第5図 SB 40 (1~13)・SD 01 (14)・SK 05 (15)・
第I地区遺構外 (16)・SB 19 (17~19) 出土遺物



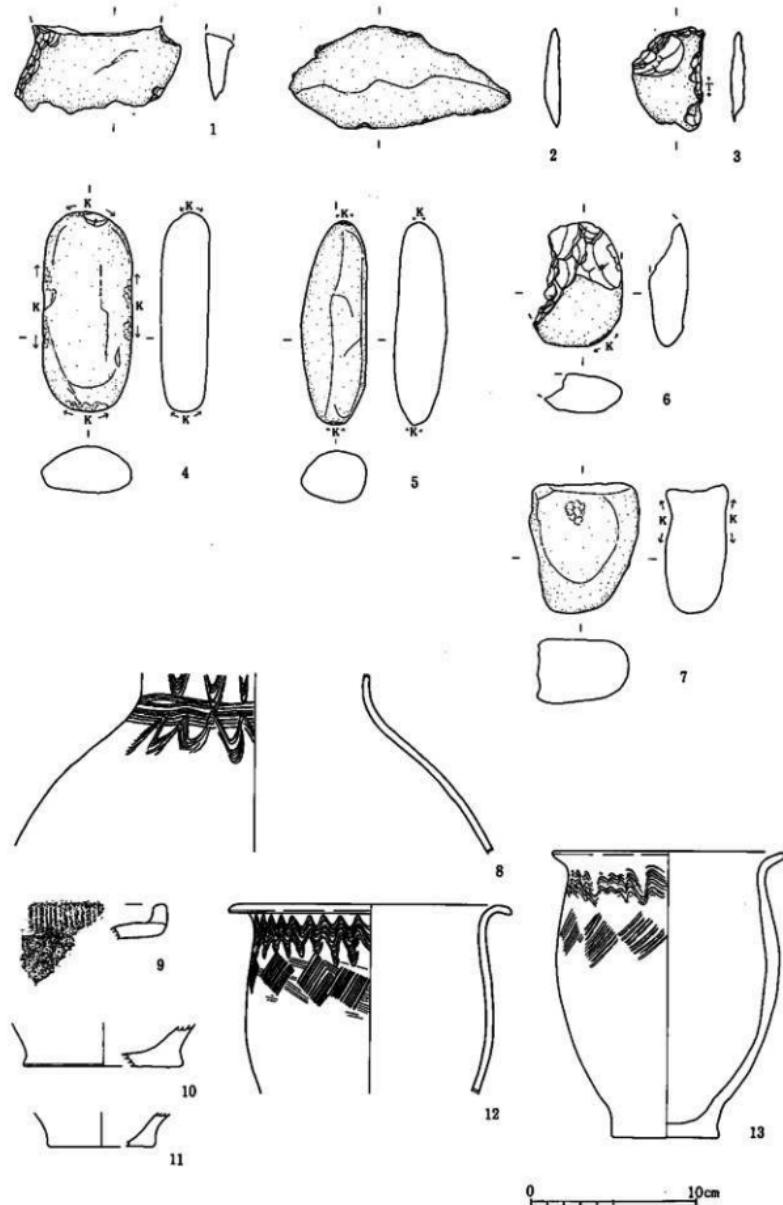
第6図 SB 19出土土器



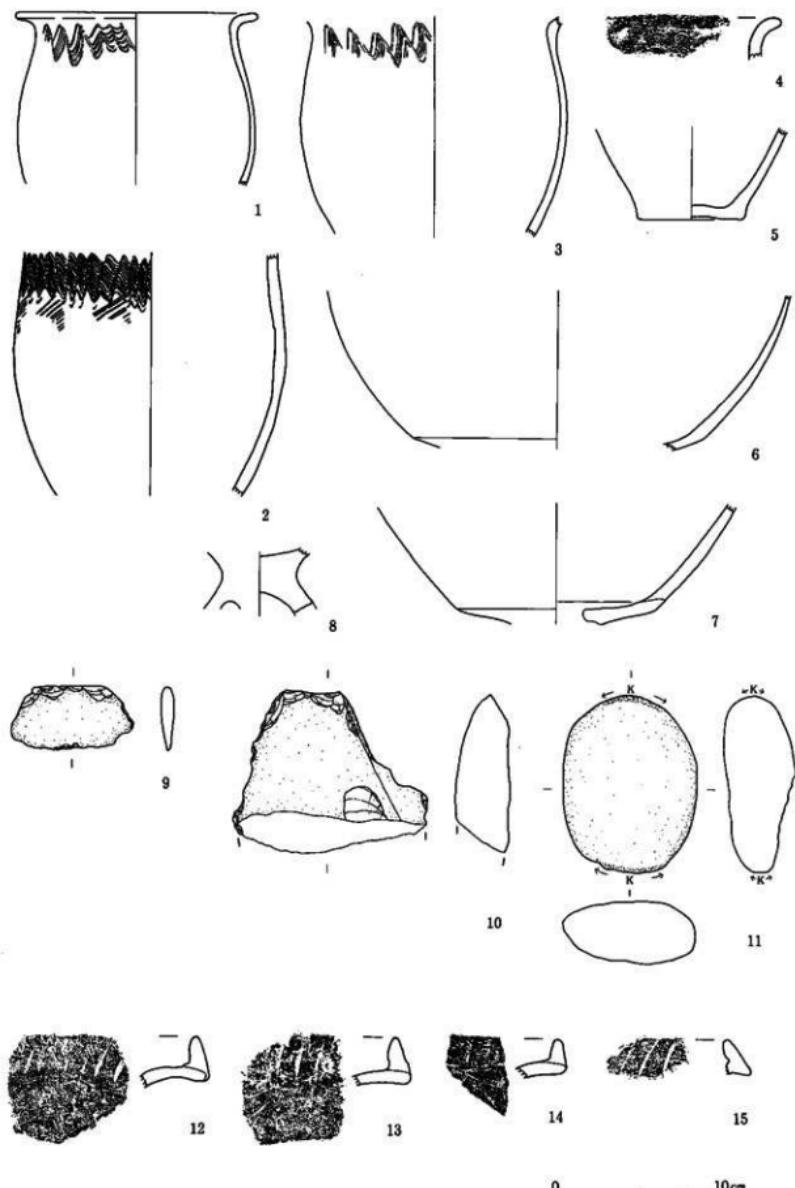
第7図 SB 19出土石器



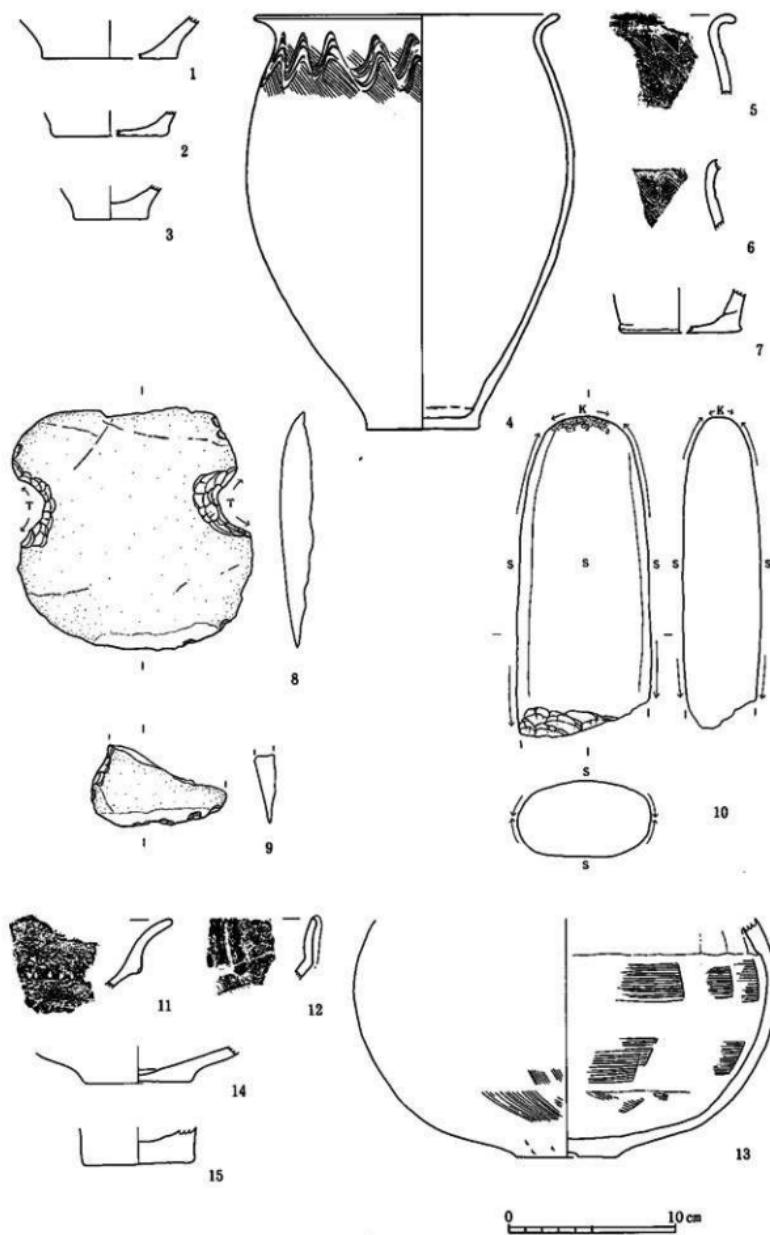
第8図 SB19 (1・2)・SB20 (3~14) 出土遺物



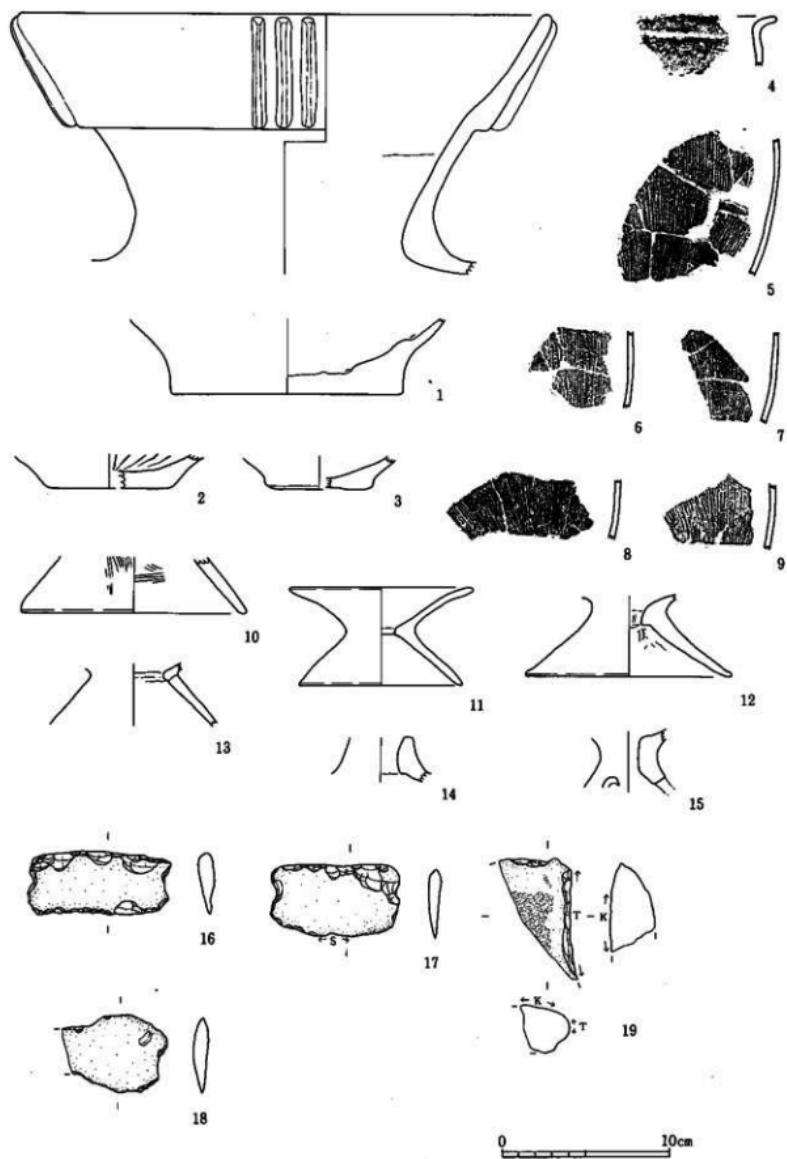
第9図 SB20 (1~7)・SB21 (8~13) 出土遺物



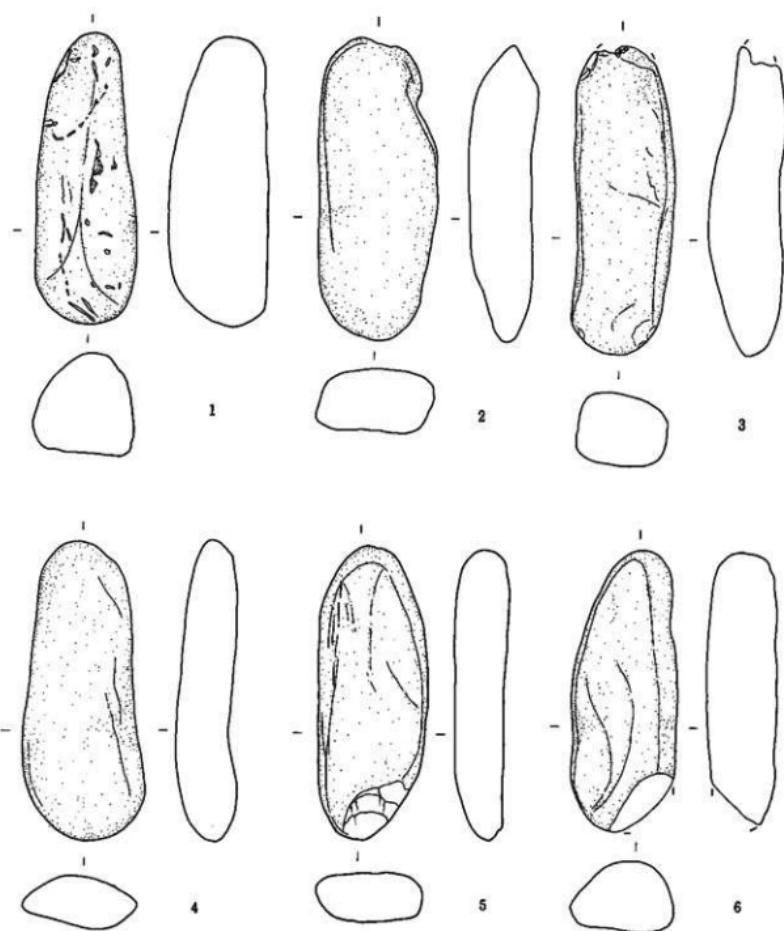
第10図 SB 21 (1~11)・SB 12 (12~15) 出土遺物



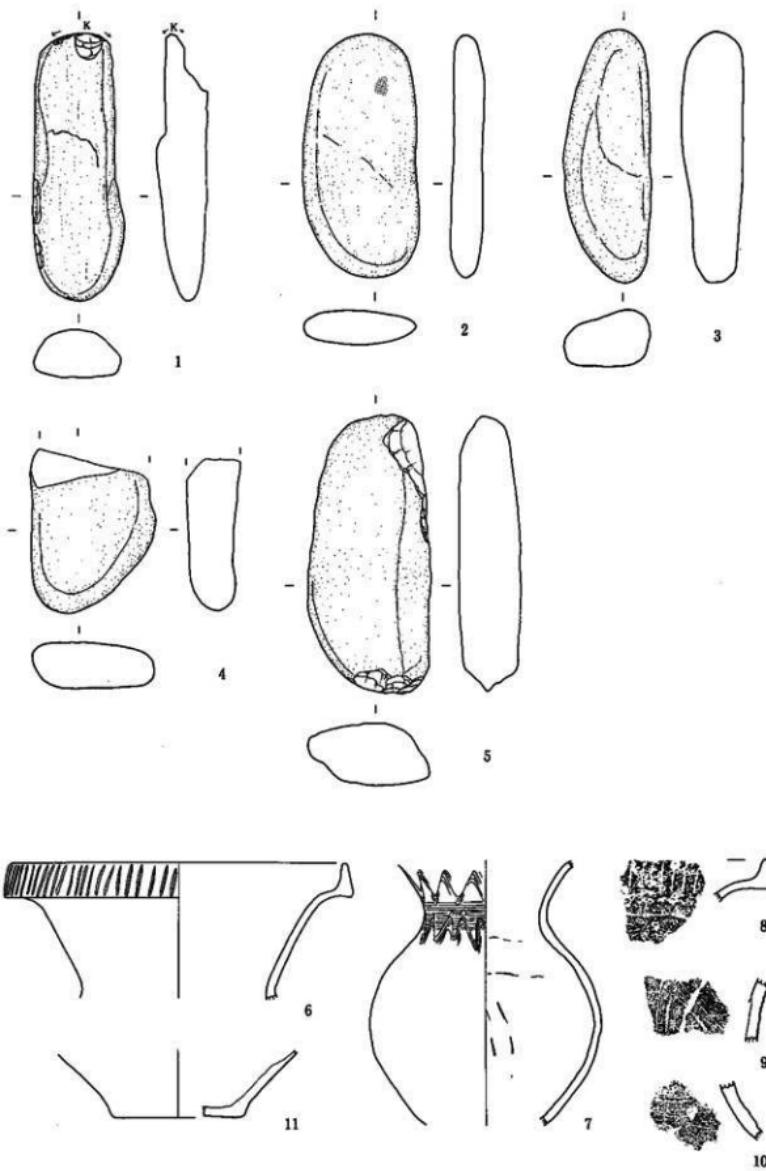
第11図 SB22 (1~10)・SB24 (11~15) 出土遺物



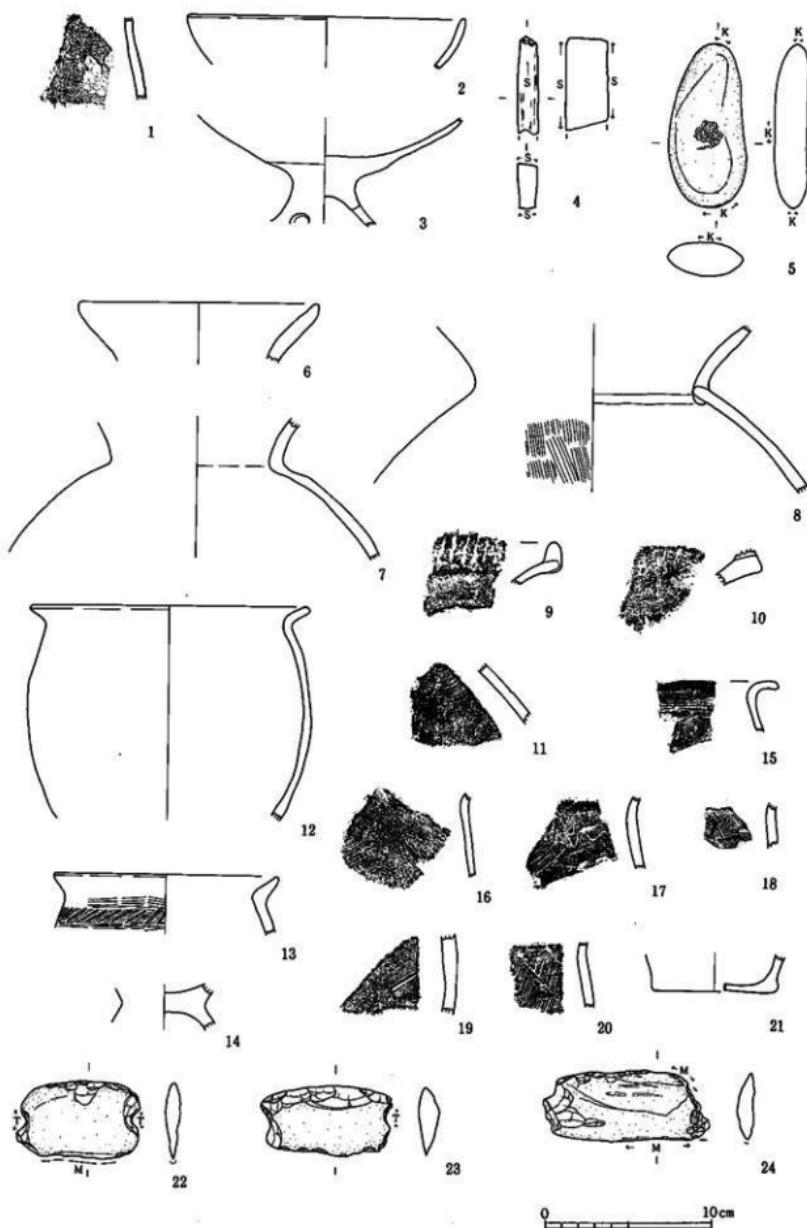
第12図 SB 24出土遺物



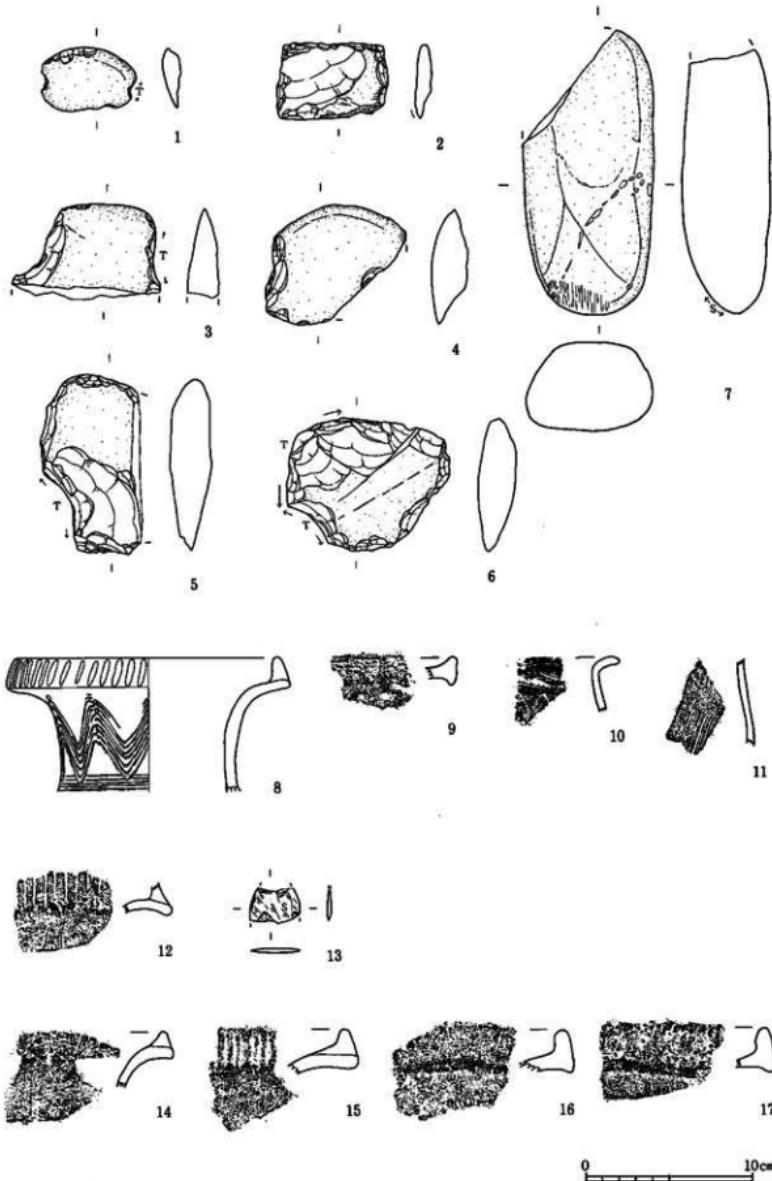
第13図 SB 24 出土石器



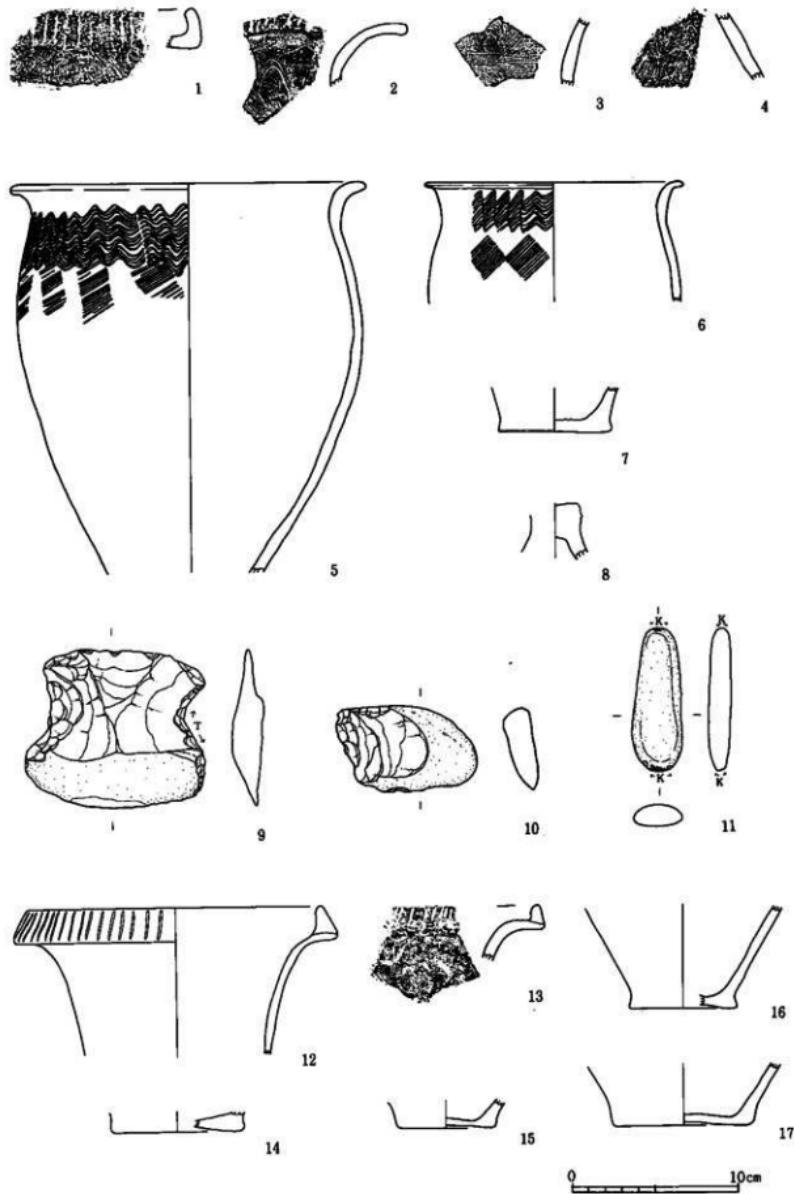
第14図 SB 24 (1~5)・SB 25 (6~11) 出土遺物



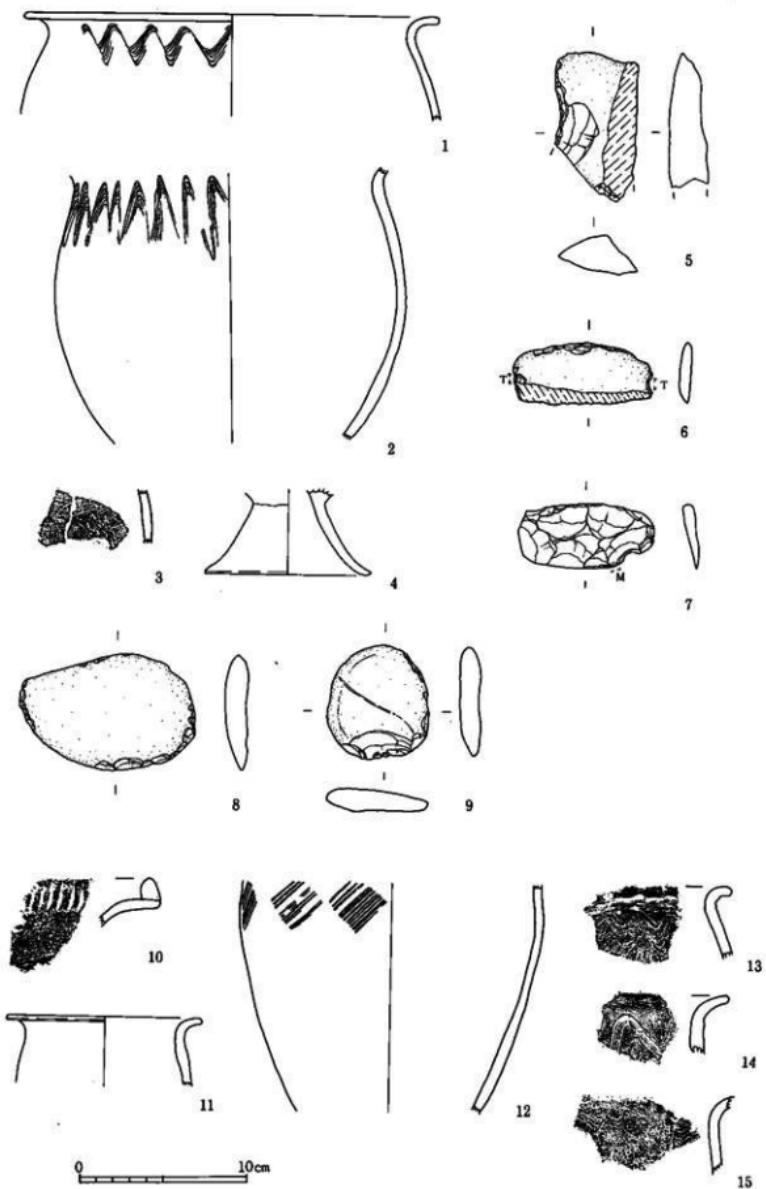
第15図 SB 25 (1~5)・SB 26 (6~24) 出土遺物



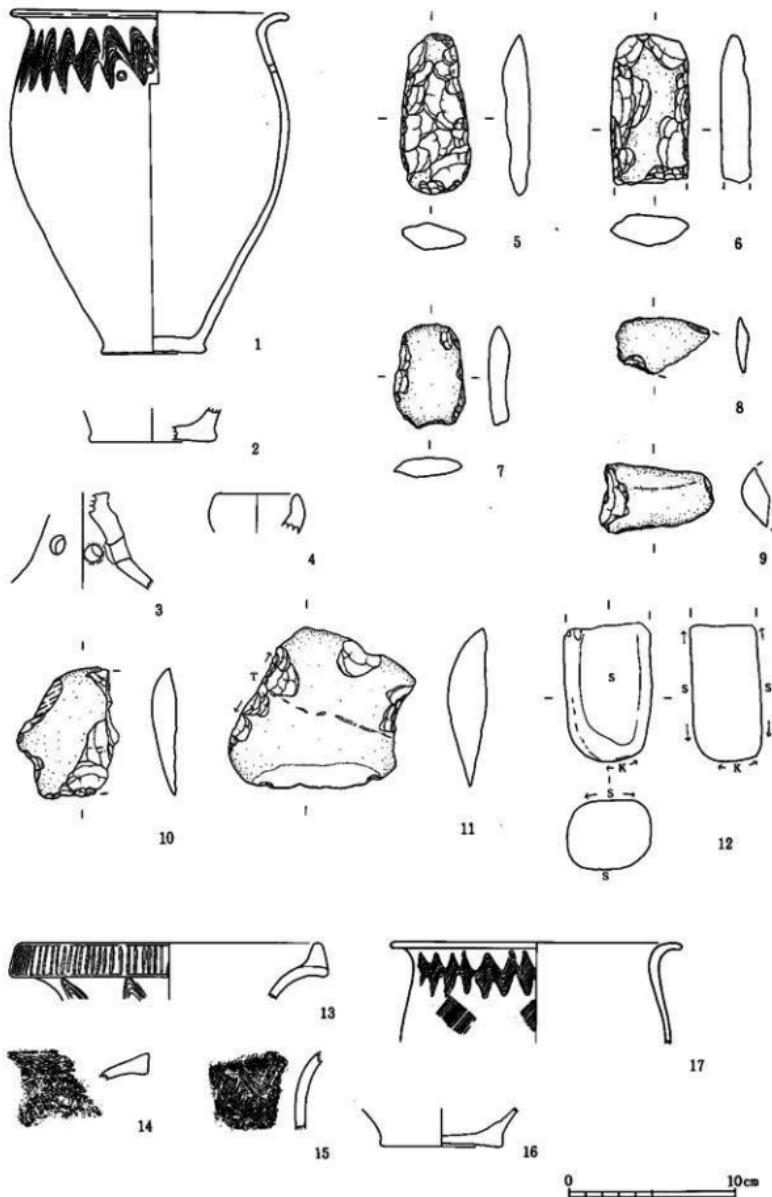
第16図 SB 2 6 (1~7) · SB 2 7 (8~11) · SB 2 8 (12·13) ·
SB 2 9 (14~17) 出土遺物



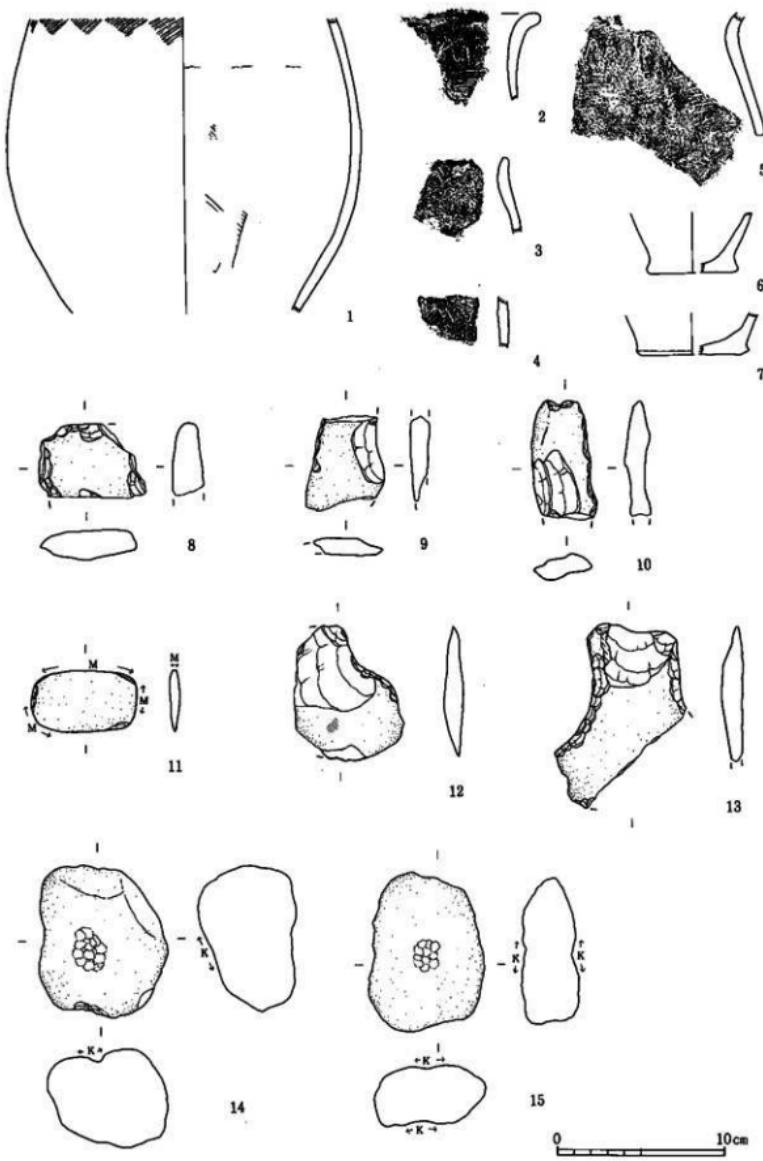
第17図 SB 29 (1~11)・SB 30 (12~17) 出土遺物



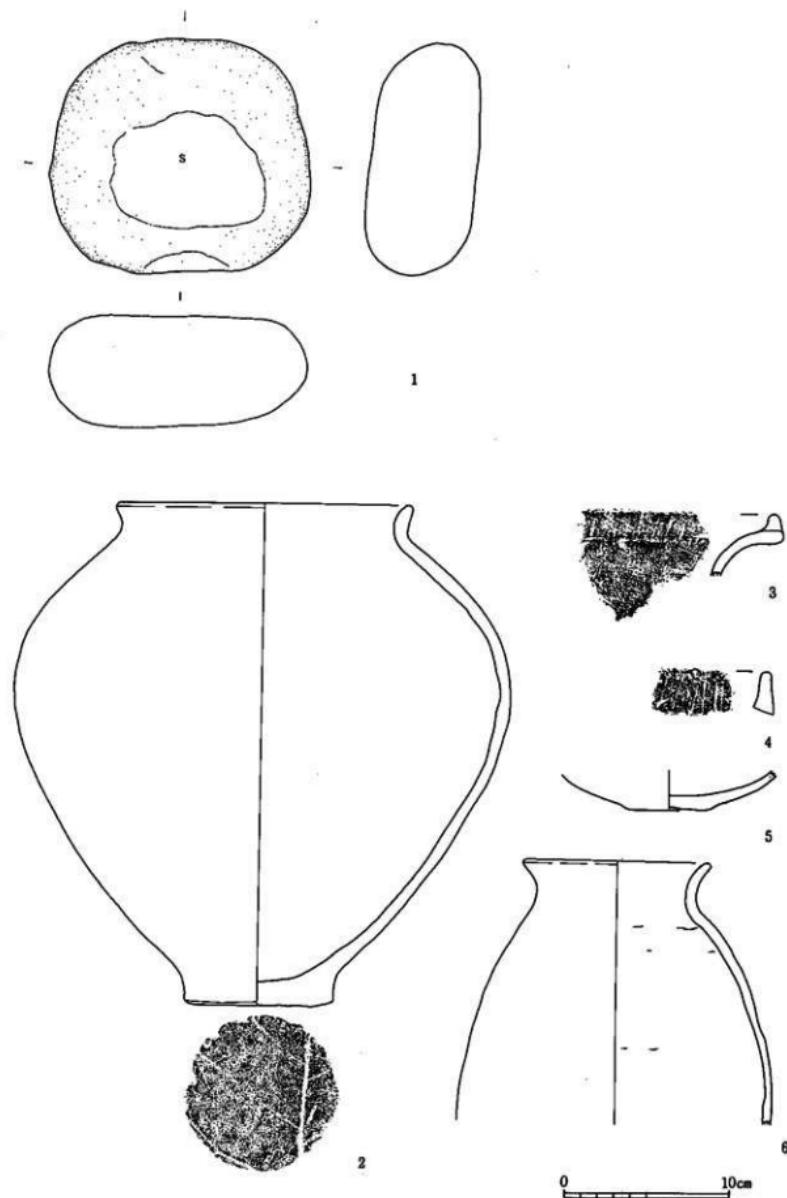
第18図 SB 30 (1~9)・SB 31 (10~15) 出土遺物



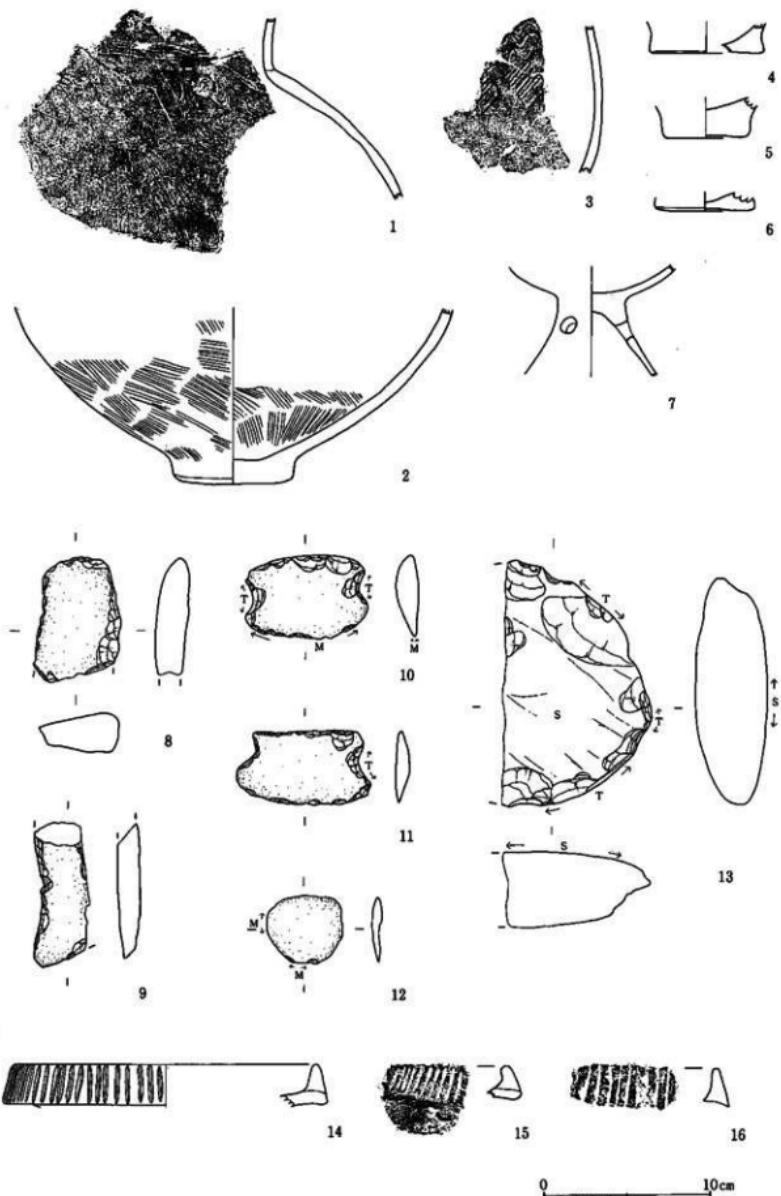
第19図 SB 3.1 (1~12)・SB 3.2 (13~17) 出土遺物



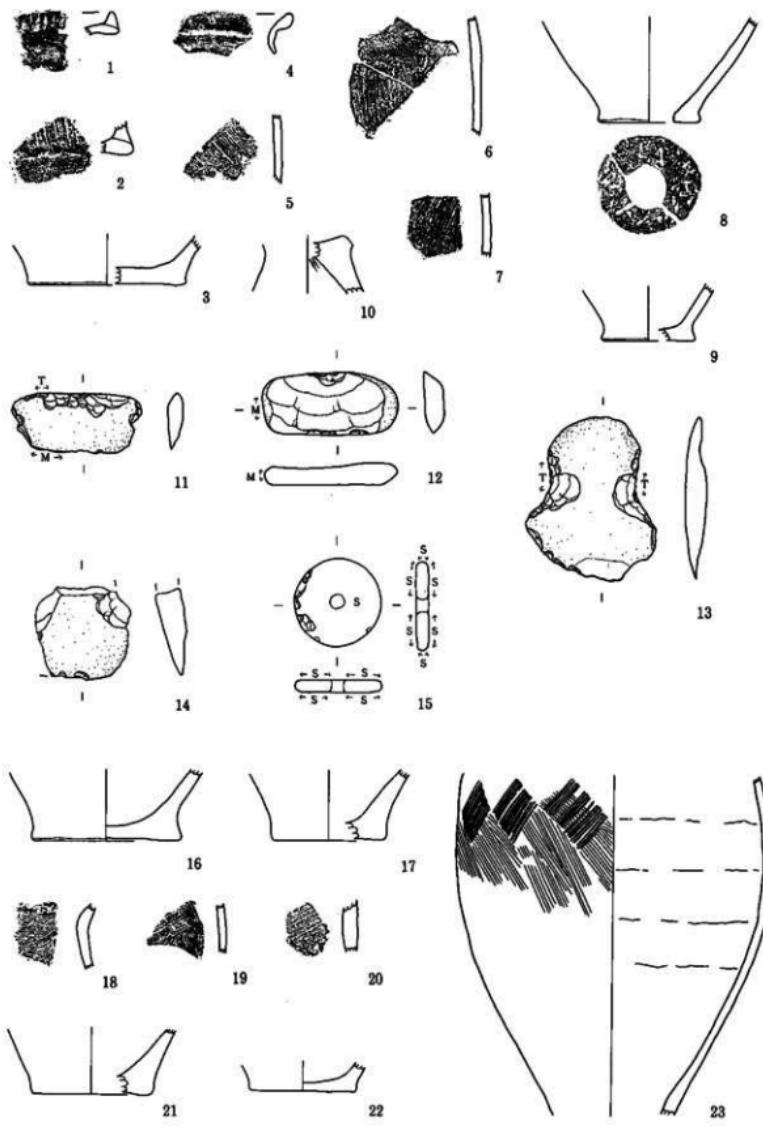
第20図 SB 3-2出土遺物



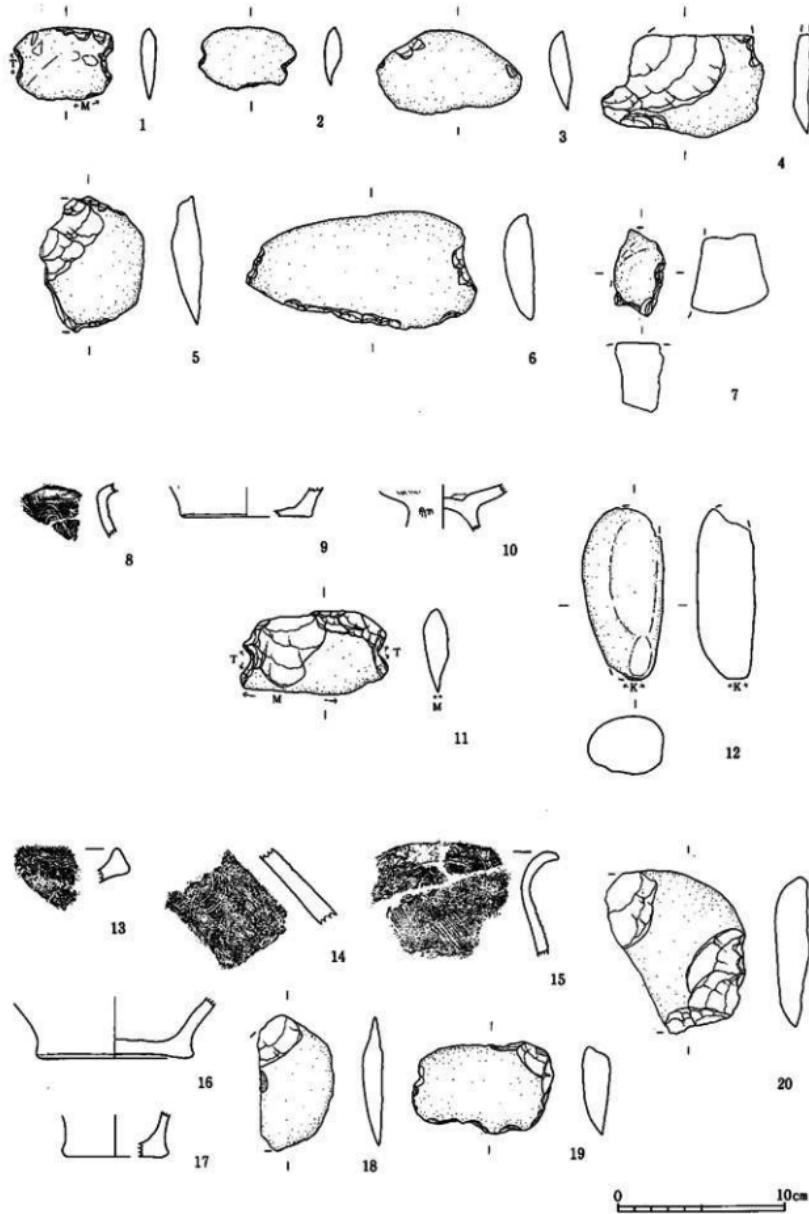
第21図 SB 32 (1)・SB 33 (2~6) 出土遺物



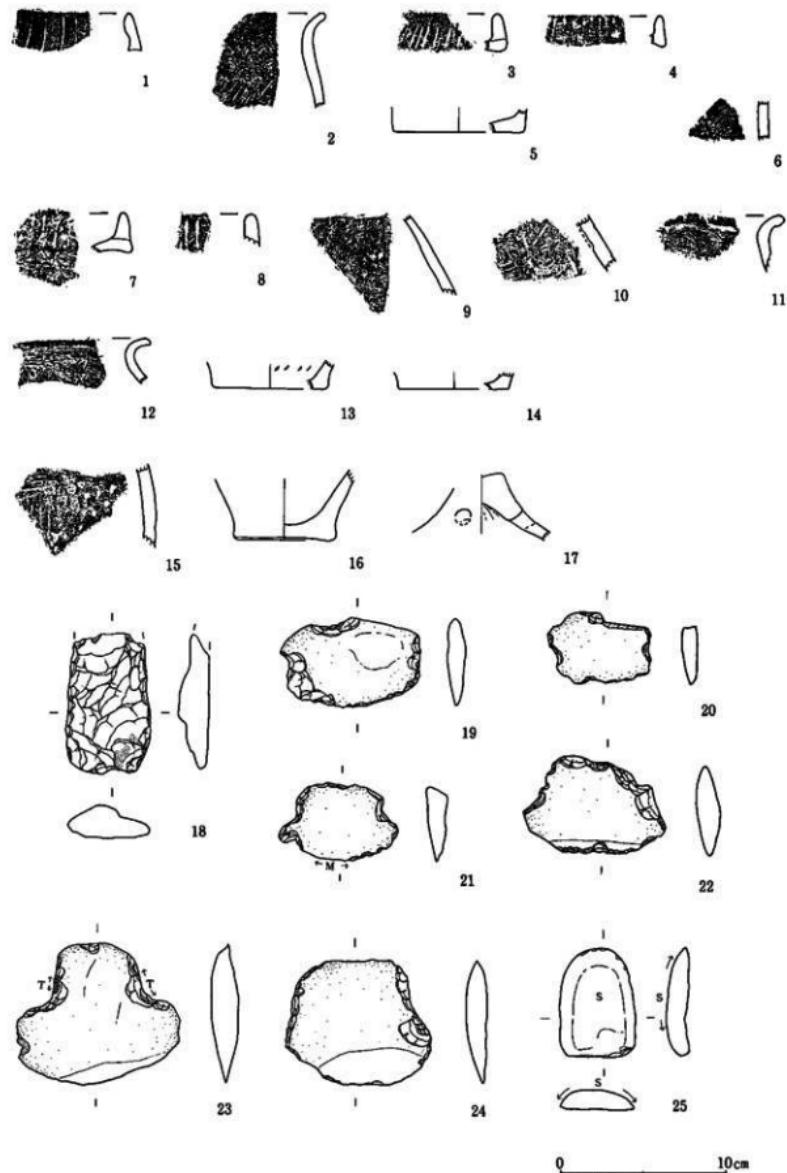
第22図 SB 33 (1~13)・SB 34 (14~16) 出土遺物



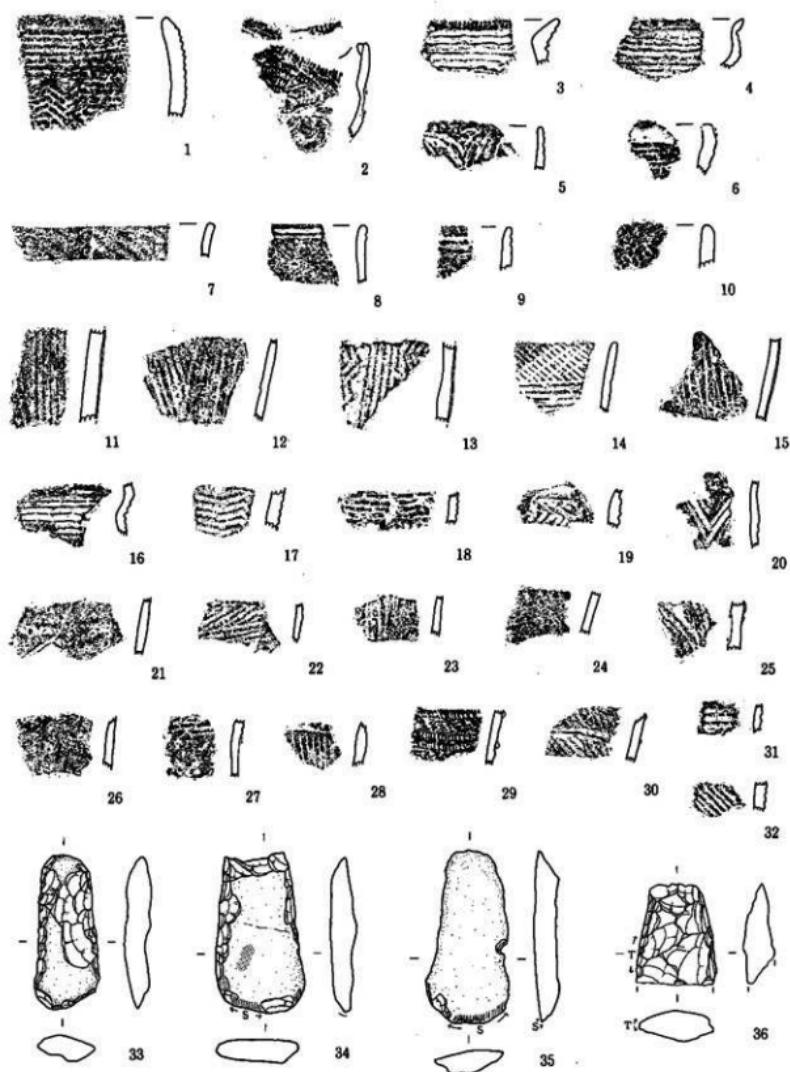
第23図 SB 3.4 (1~15)・SB 3.5 (16~23) 出土遺物



第24図 SB 35 (1~7)・SB 36 (8~12)・SB 37 (13~20) 出土遺物

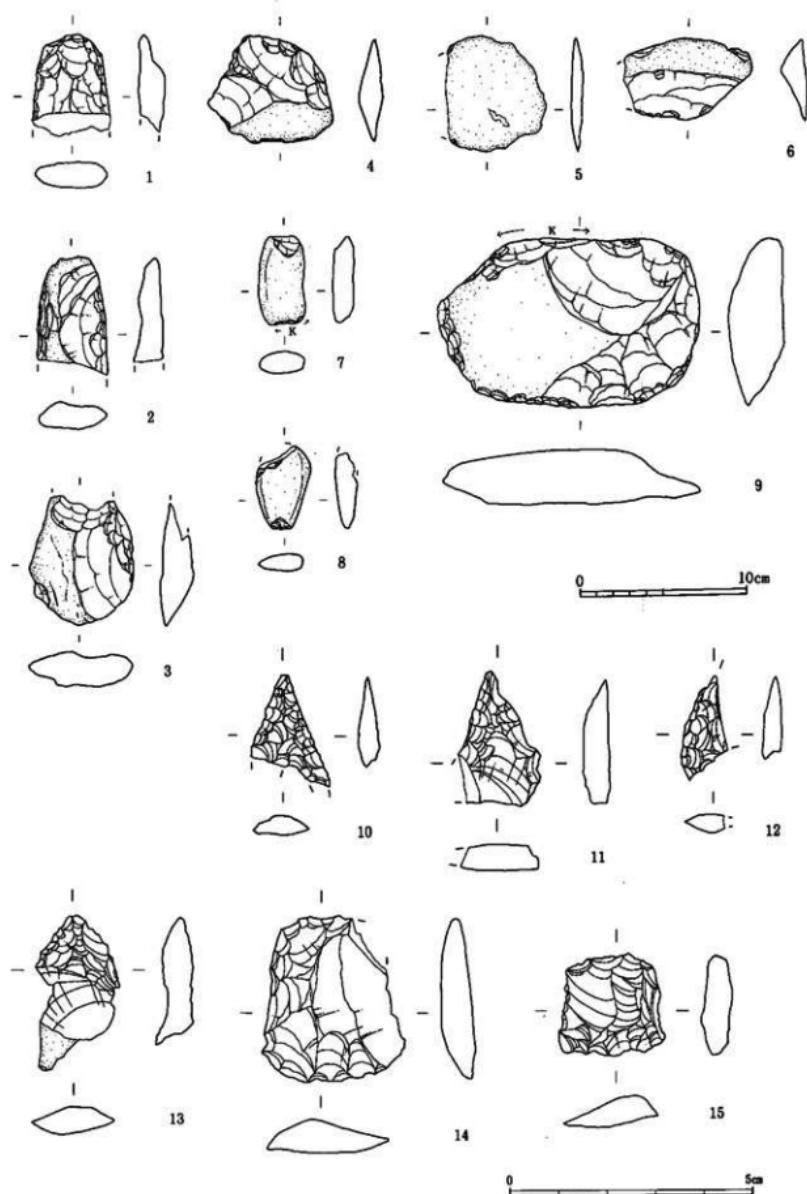


第25図 SD (1~6)・柱穴 (7~14)・第II地区遺構外 (15~25) 出土遺物

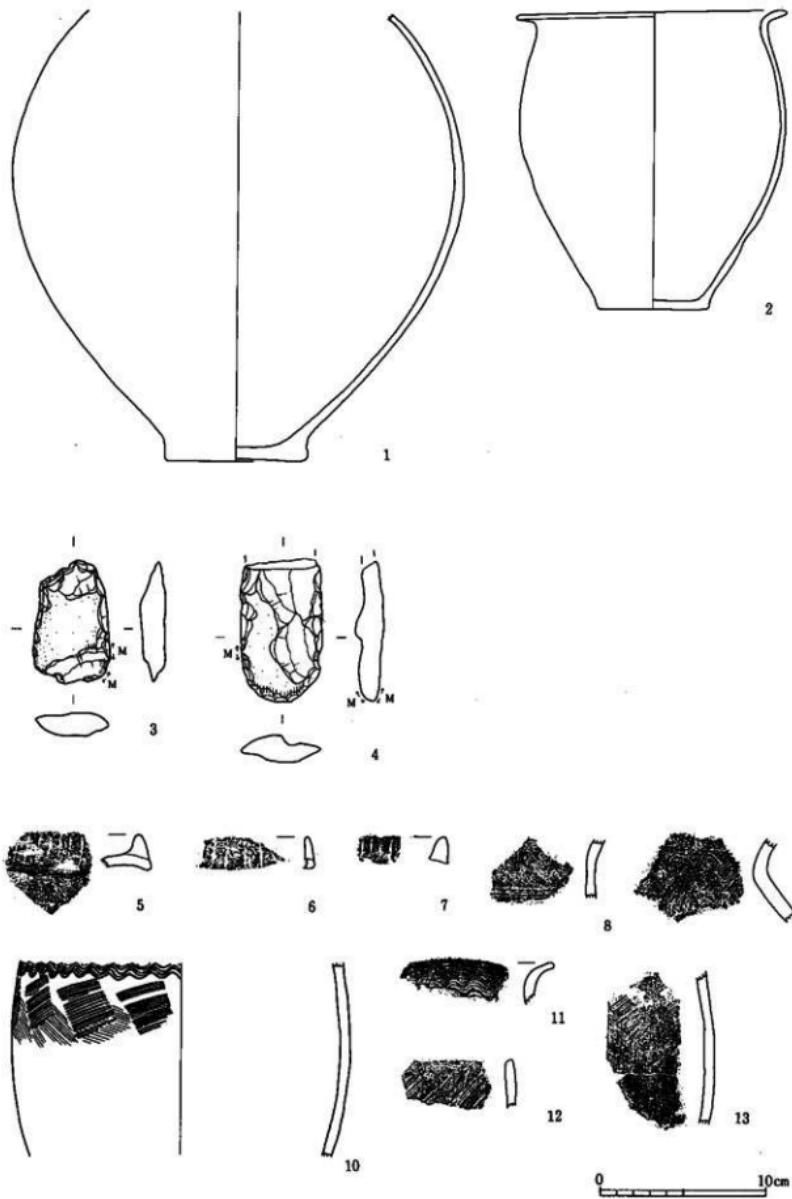


0 10cm

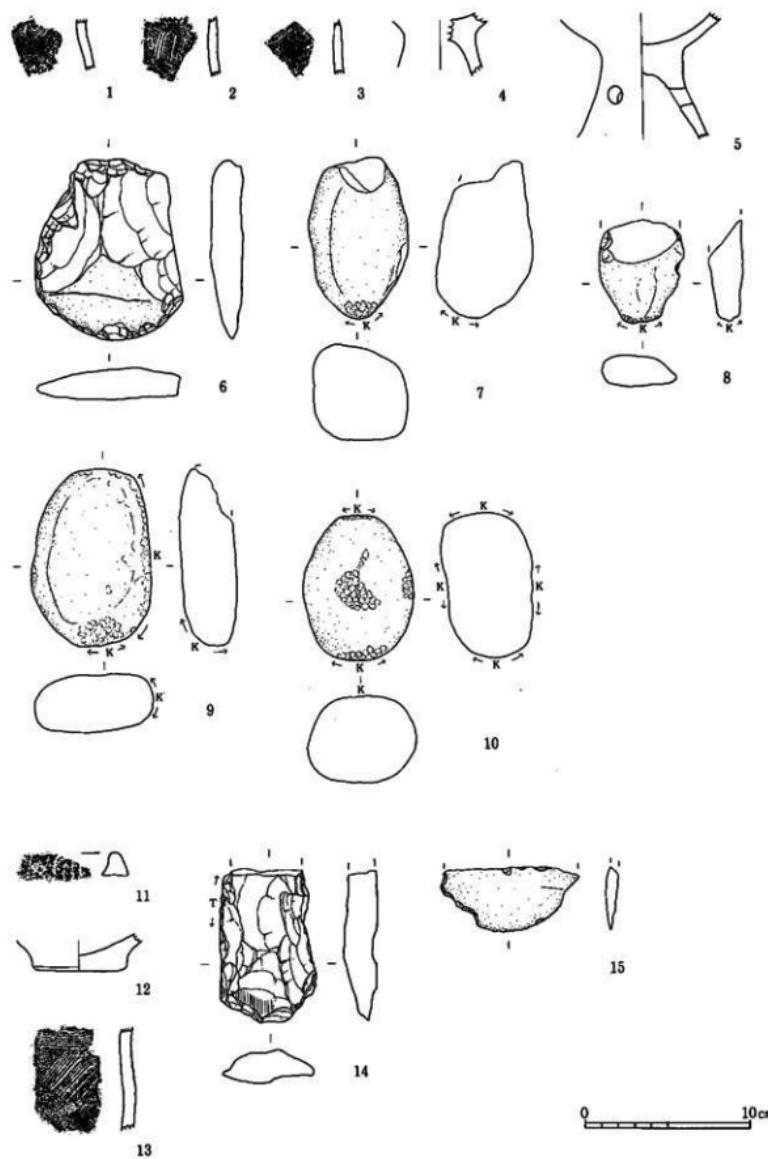
第26図 SB 41出土遺物



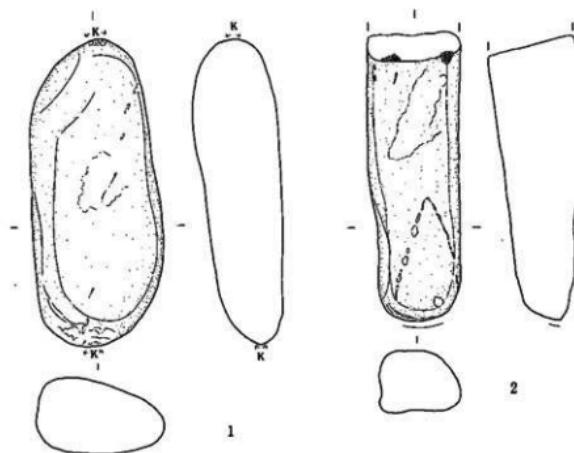
第27図 SB 41出土石器



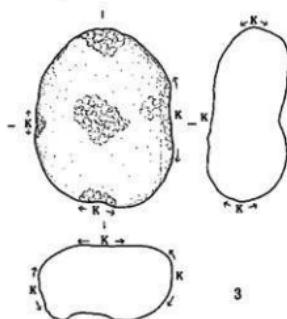
第28図 SM 01 (1・2)・第Ⅲ地区造構外 (3・4)・SB 4 2 (5~13) 出土遺物



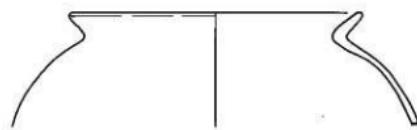
第29図 SB 4.2 (1~10)・SB 4.3 (11~15) 出土遺物



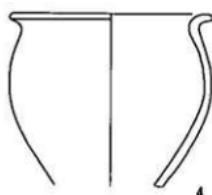
2



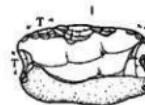
3



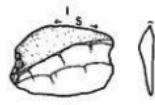
5



4



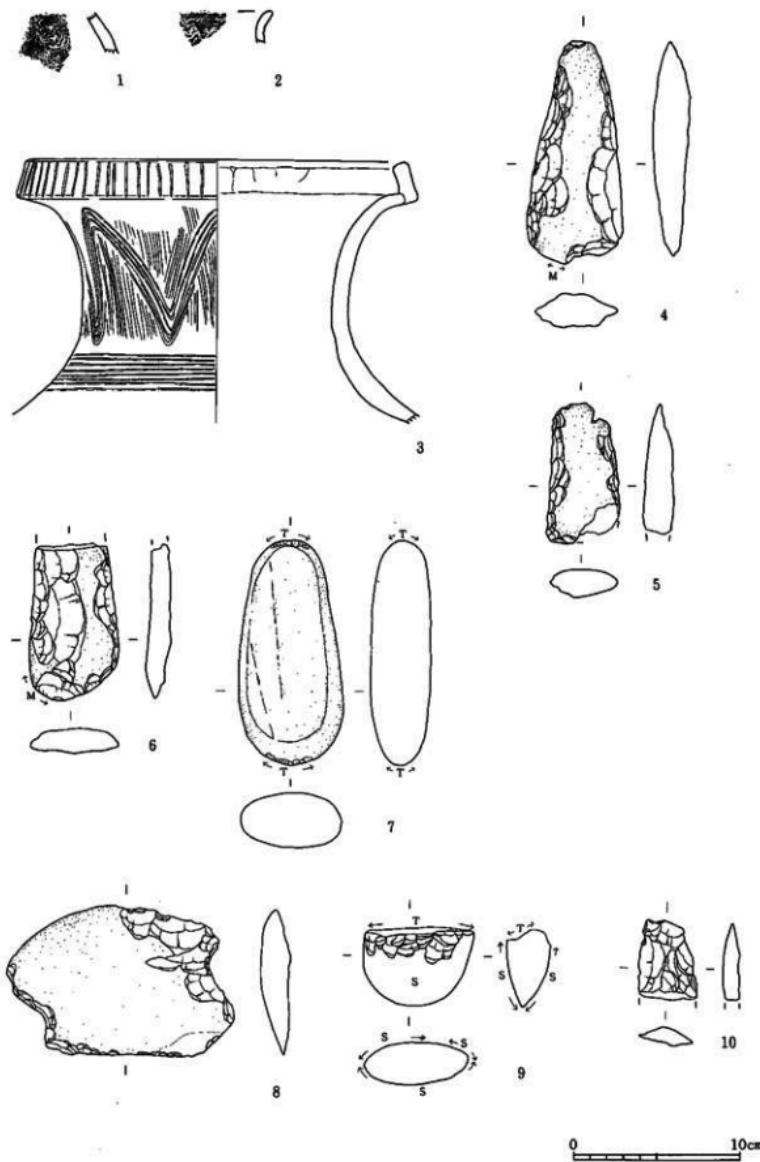
6



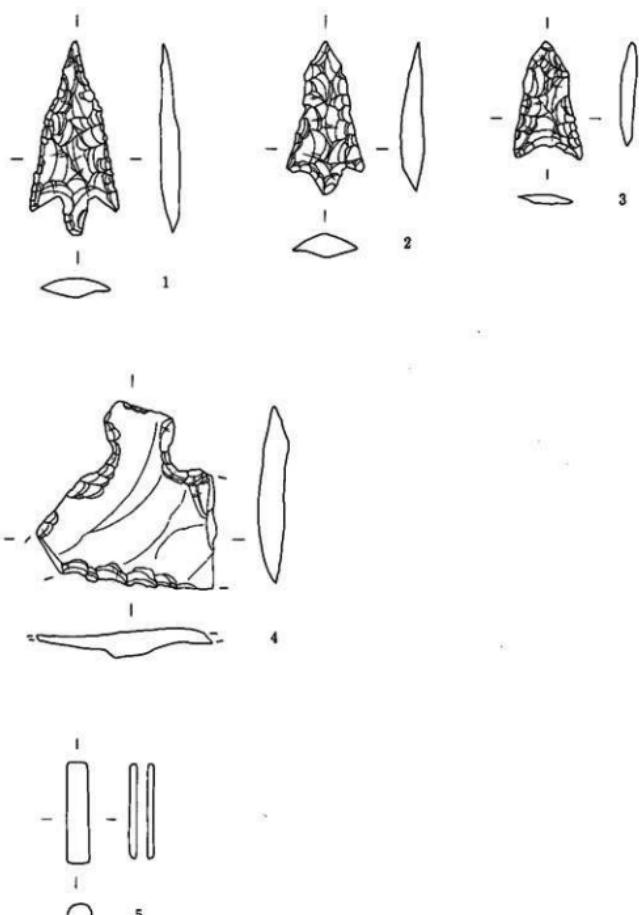
7



第30図 SB 4 3 (1・2)・SB 4 4 (3)・SB 4 5 (4～7) 出土遺物

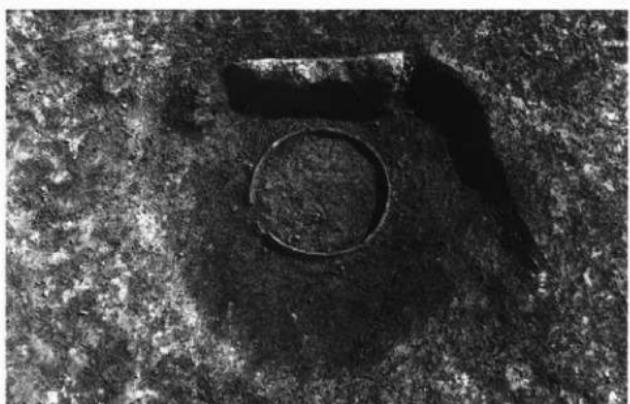
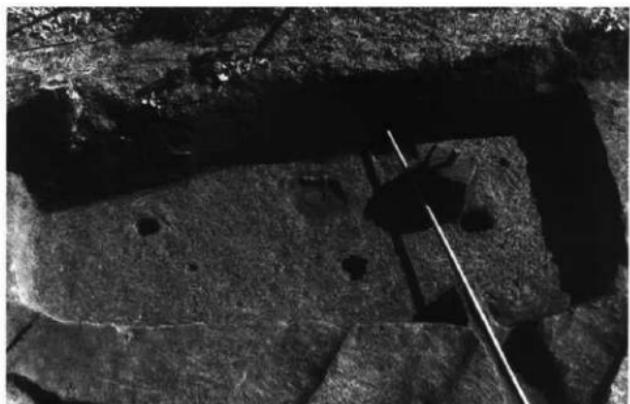


第31図 SB 47 (1・2)・SM 02 (3)・第IV地区遺構外 (4・5)・
トレンチ (8~10) 出土遺物



0 5cm

第32図 小型石器・管玉





S B 1 8



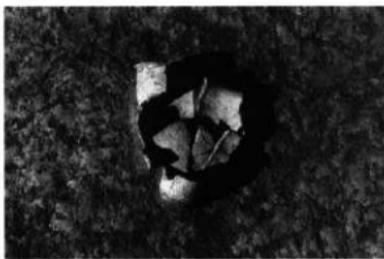
S B 1 8 炉址



S B 1 8 炉址断ち割り



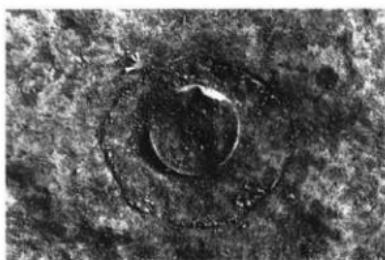
S B 1 8 炉址断ち割り



S B 1 8 壺出土状態



SB 38



SB 38 炉址



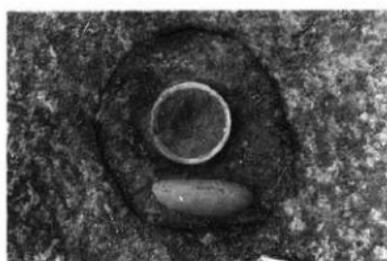
SB 38 炉址断ち割り



SB 38 入口部



S B 3 9



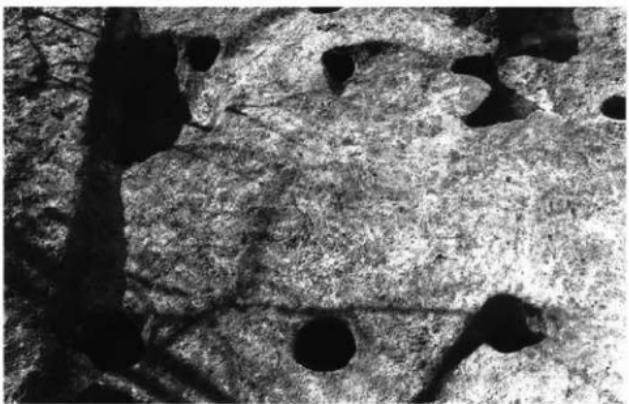
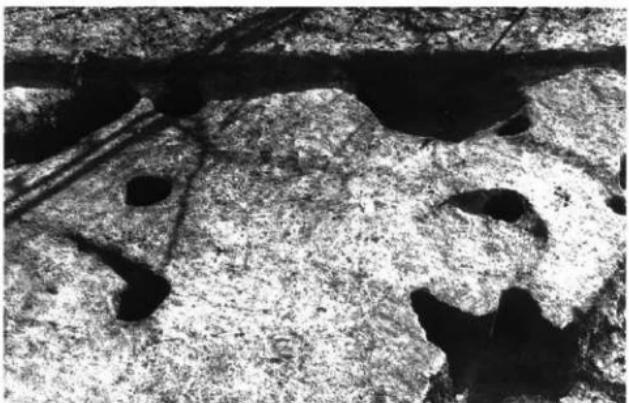
S B 3 9 炉址



S B 3 9 炉址断ち割り



S B 3 9 遺物出土状態





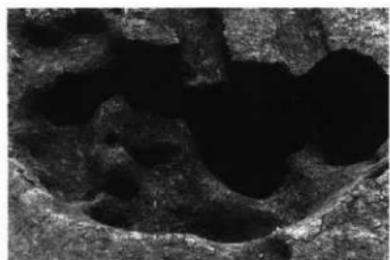
SD 01 (西から)



SD 01 (東から)



SD 11



SK 01



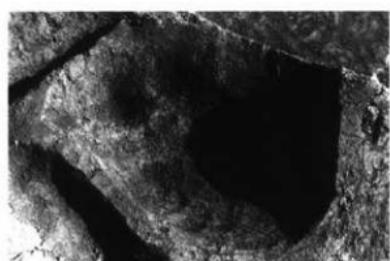
SK 02



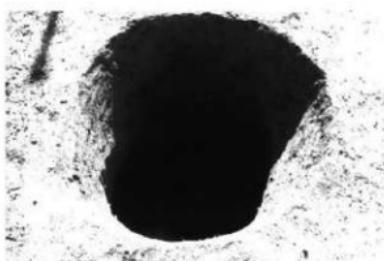
SK 03



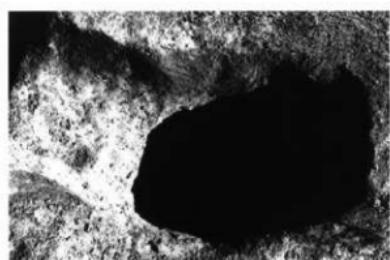
SK 04



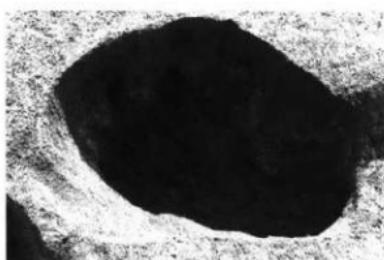
SK 05



SK 06



SK 07



SK 08



第Ⅰ地区南西部全景（南西から）



第Ⅰ地区南西部全景（北東から）



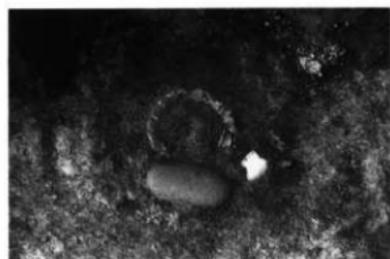
第Ⅰ地区北東部全景（南西から）



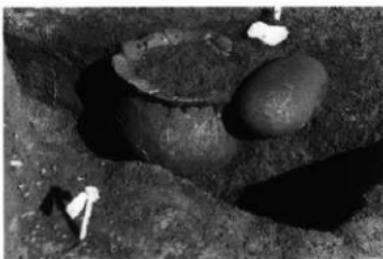
第Ⅰ地区北東部全景（北東から）



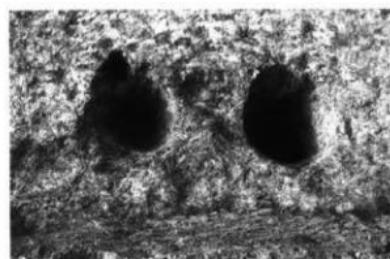
S B 1 9



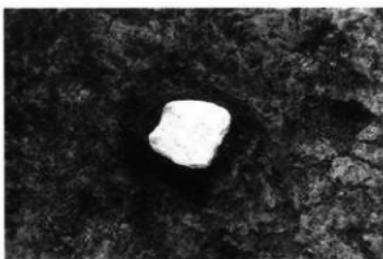
S B 1 9 炉址



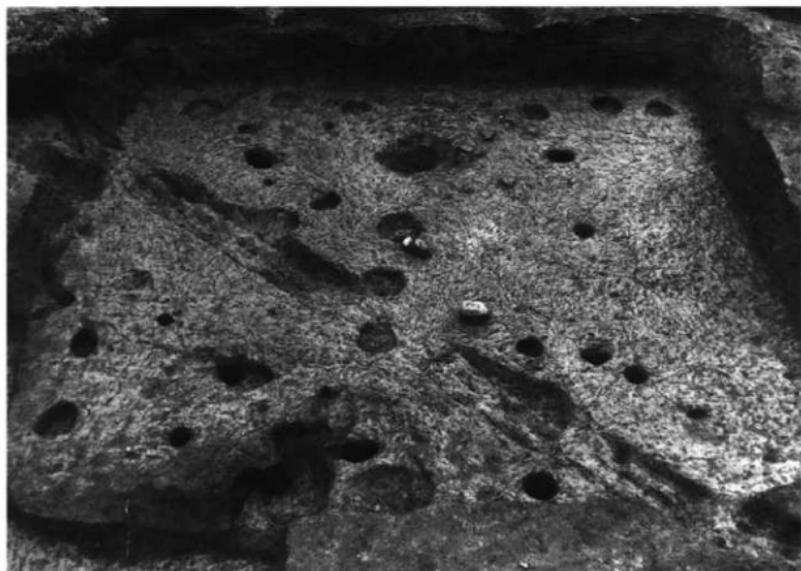
S B 1 9 炉址断ち割り



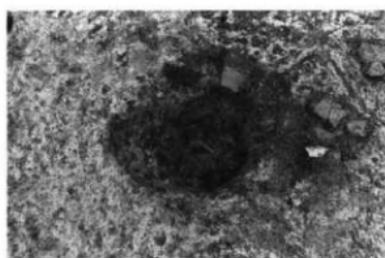
S B 1 9 入口部



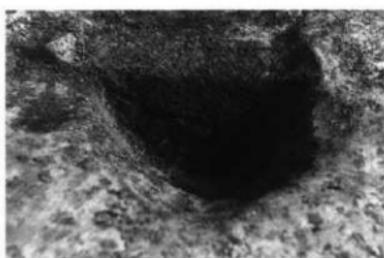
S B 1 9 石器出土状態



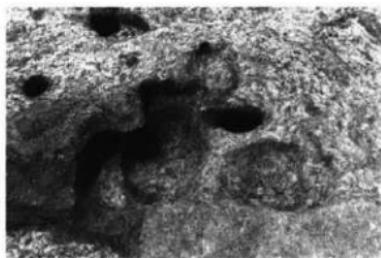
SB 20



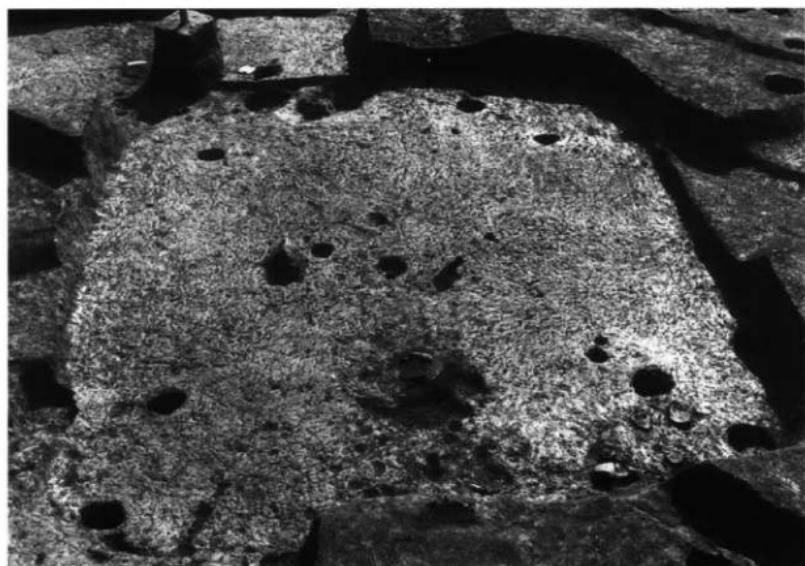
SB 20 炉址



SB 20 炉址断ち割り



SB 20 入口部



S B 2 1



S B 2 1 炉址断ち割り



S B 2 2



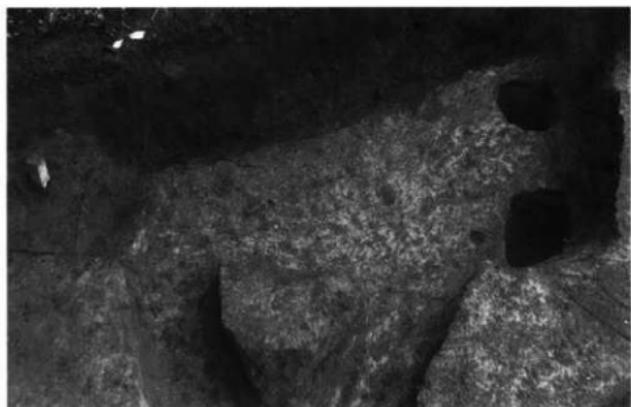
S B 2 2 炉址



S B 2 2 炉址断ち割り



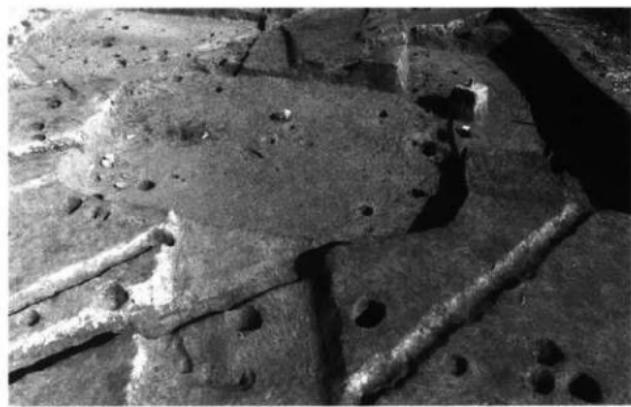
S B 2 2 石器出土状態



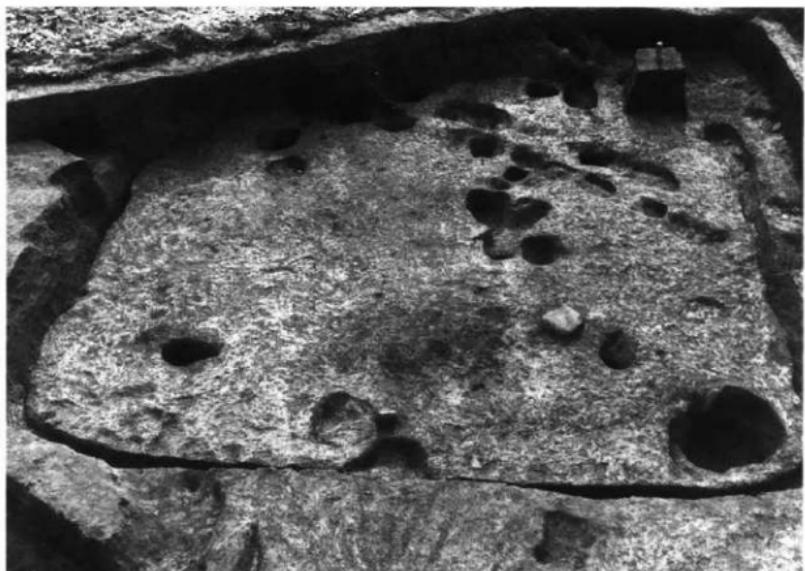
S B 2 3



S B 2 2 • 2 5



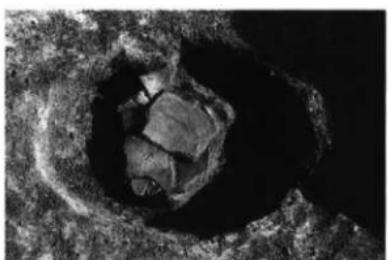
S B 2 0 • 2 1 •
2 2 • 2 5



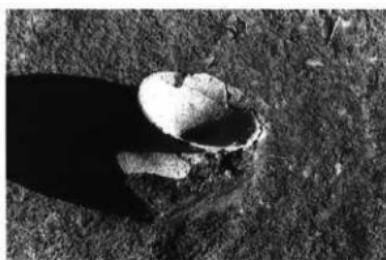
S B 2 4



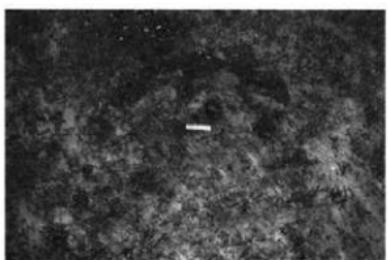
S B 2 4 編物用石錐出土状態



S B 2 4 壺出土状態



S B 2 4 器台出土状態



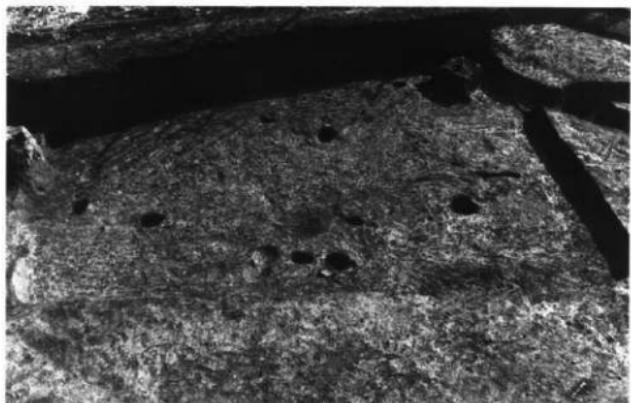
S B 2 4 管玉出土状態



S B 2 5



S B 2 5 遺物出土状態



SB 26



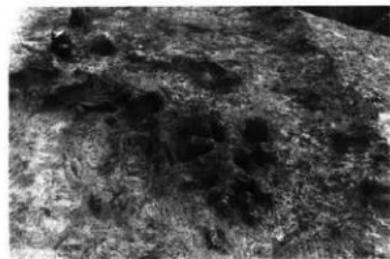
SB 26 炉址



SB 26
炉址断ち割り



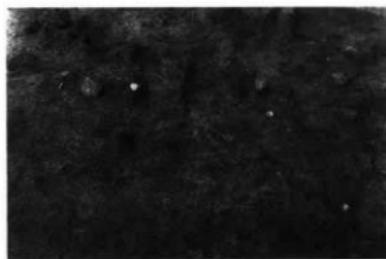
S B 2 6 炭分布状态



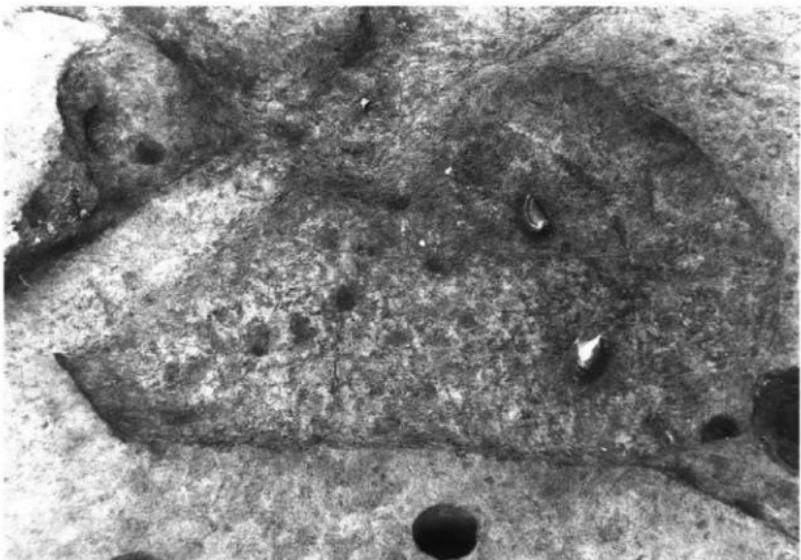
S B 2 6 炭分布状态 (部分)



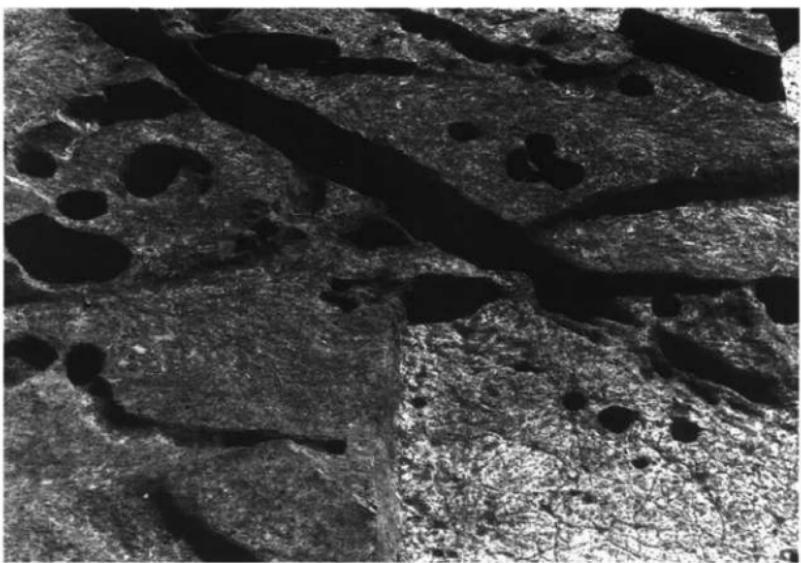
S B 2 6 炭分布状态 (部分)



S B 2 6 炭分布状态 (部分)



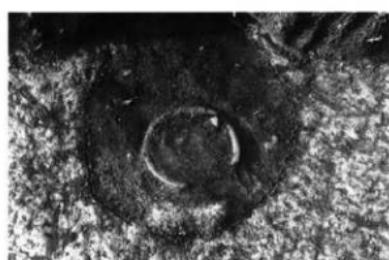
SB 27



SB 28



S B 2 9



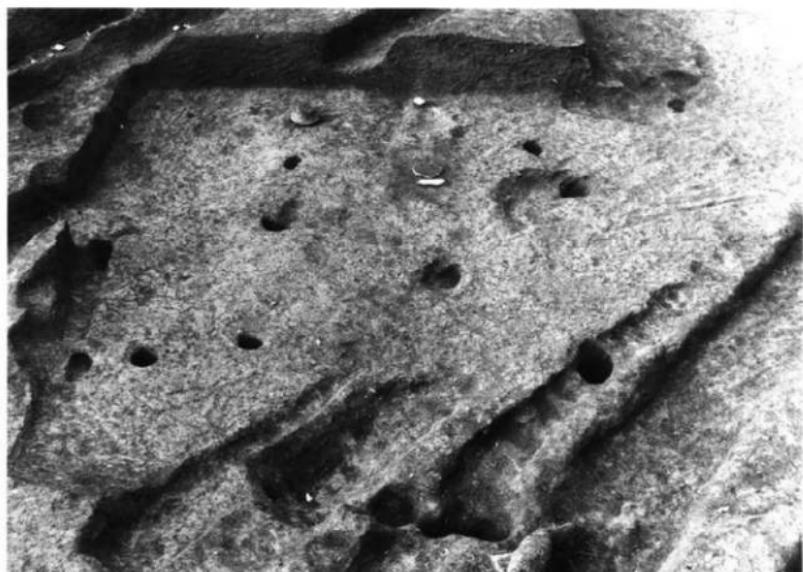
S B 2 9 炉址



S B 2 9 炉址断ち割り



S B 2 9 遺物出土状態



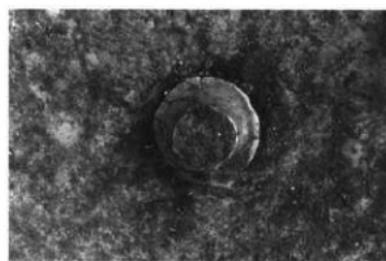
S B 3 0



S B 3 0 炉址



S B 3 0 炉址断ち割り



S B 3 0 壺出土状態



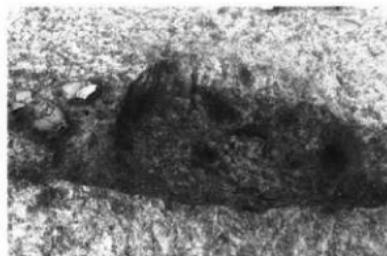
SB 31



SB 31 炉址



SB 31 炉址断ち割り



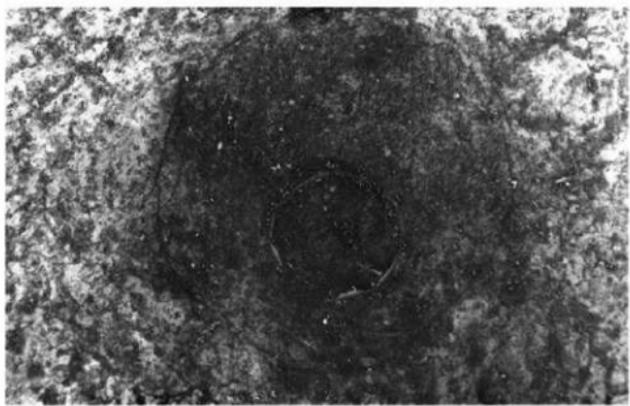
SB 31 入口部



SB 31 壺出土状態



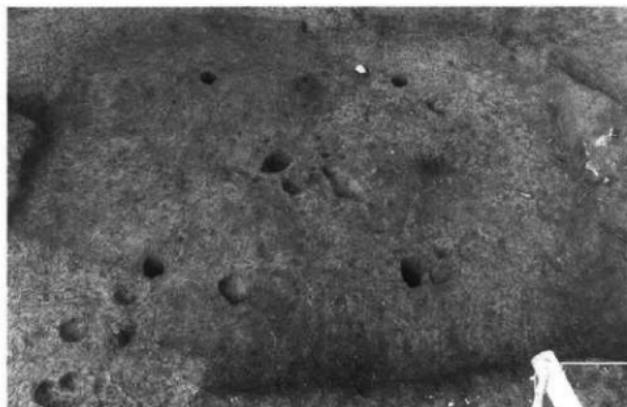
SB 32



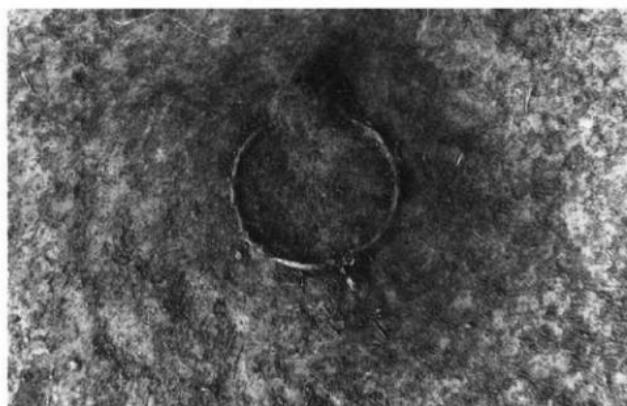
SB 32 炉址



SB 32
炉址断ち割り



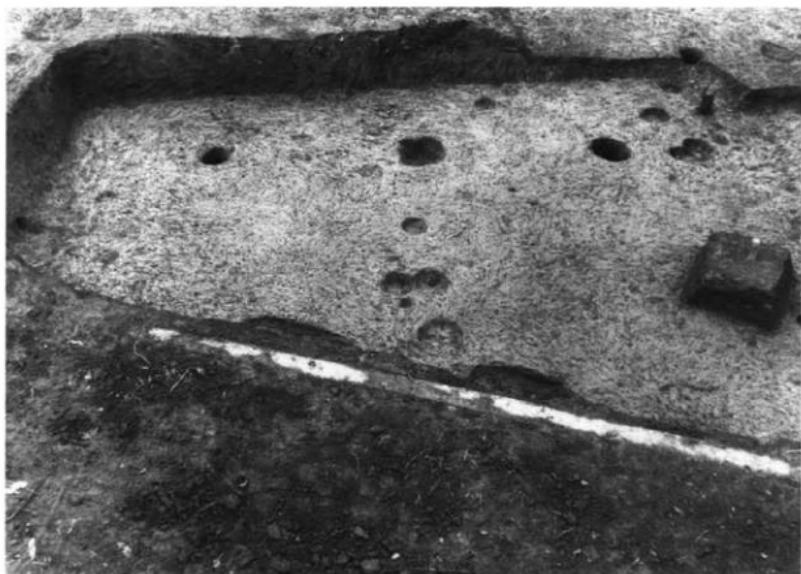
S B 3 3



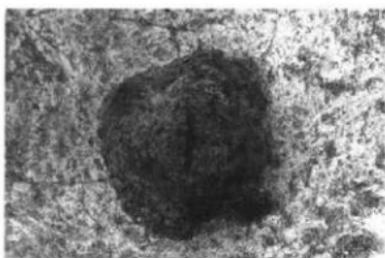
S B 3 3 炉址



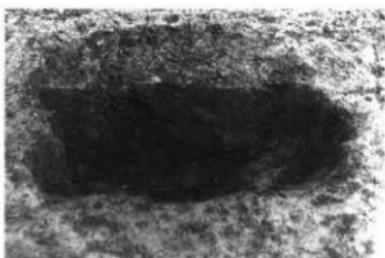
S B 3 3
炉址断ち割り



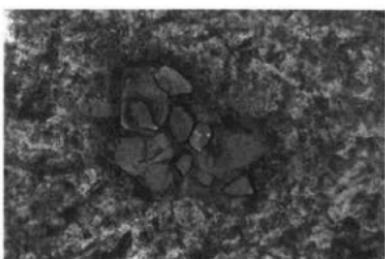
S B 3 4



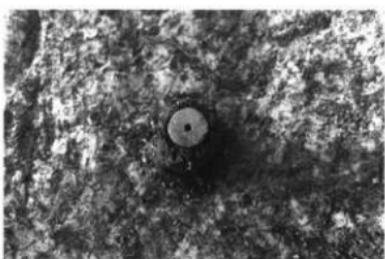
S B 3 4 炉址



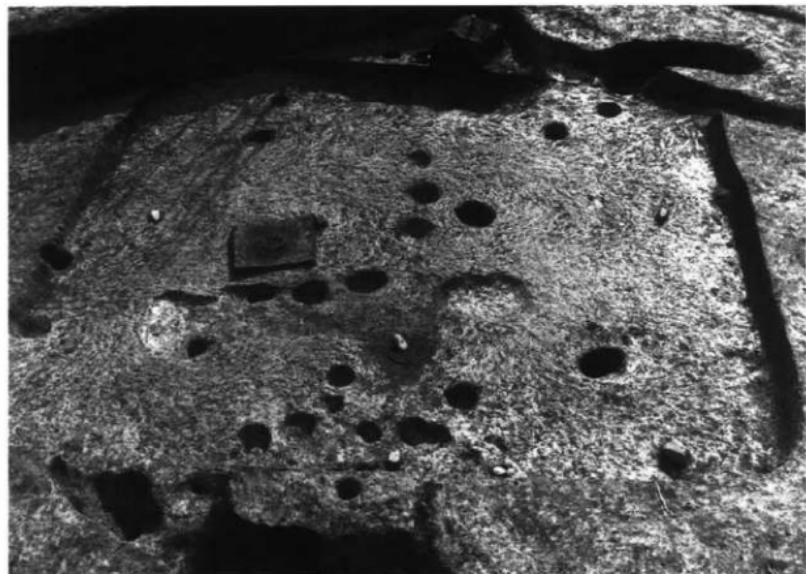
S B 3 4 炉址断ち割り



S B 3 4 織機車出土状態



S B 3 4 紡錘車出土状態



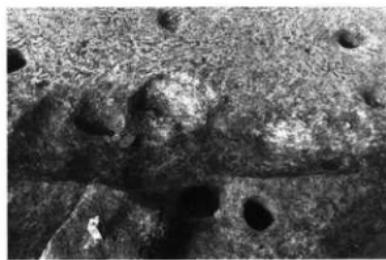
S B 3 5



S B 3 5 炉址



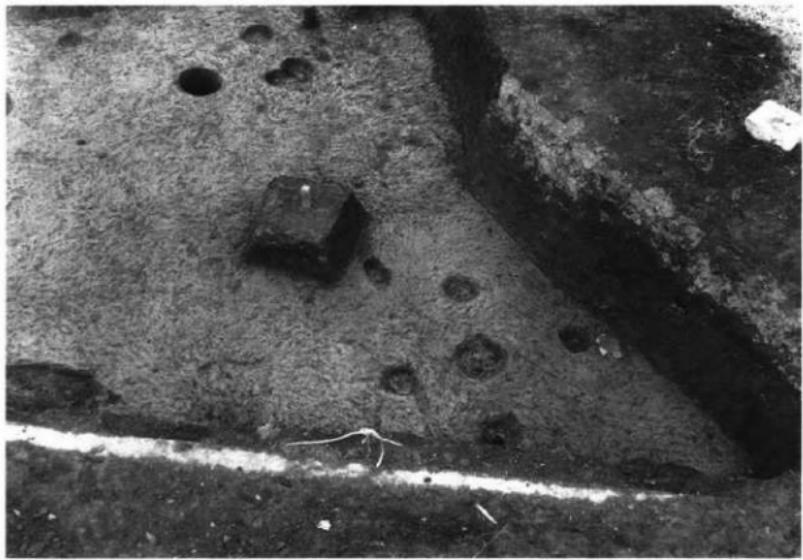
S B 3 5 炉址断ち割り



S B 3 5 入口部



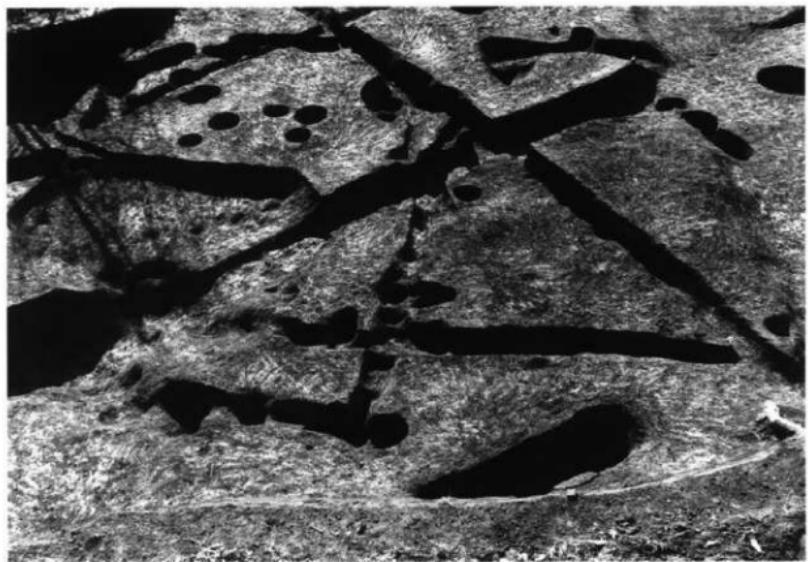
S B 3 6



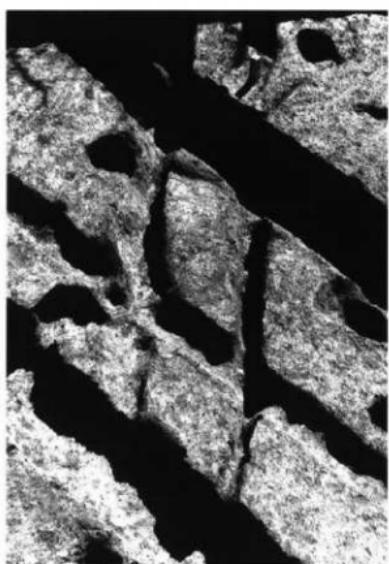
S B 3 7



SD02



SD03·04·05



SD 07-08



SD 09



SD 10



第II地区南西部全景（南西から）



第II地区南西部全景（北東から）



第II地区中央部全景（南西から）



第II地区中央部全景（北東から）



第Ⅱ地区北東部全景（南西から）



第Ⅱ地区北東部全景（北東から）



S B 4 1



S M 0 1 (南東から)



S M 0 1 (北東から)



S M 0 1 土器棺出土状態



第Ⅲ地区南西部全景
(北東から)



第Ⅲ地区北東部全景
(南西から)



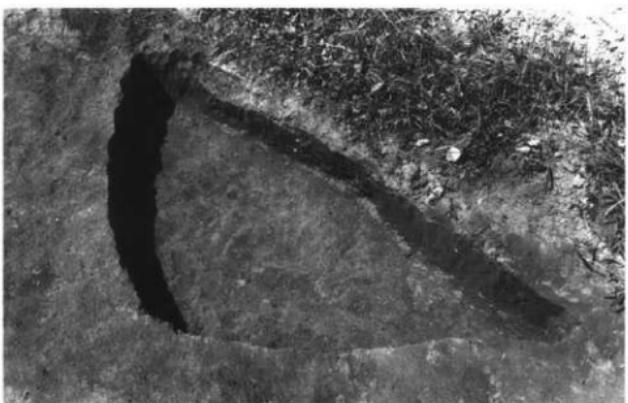
第Ⅲ地区北東部全景
(北東から)



S B 4 2



S B 4 3 · 4 6

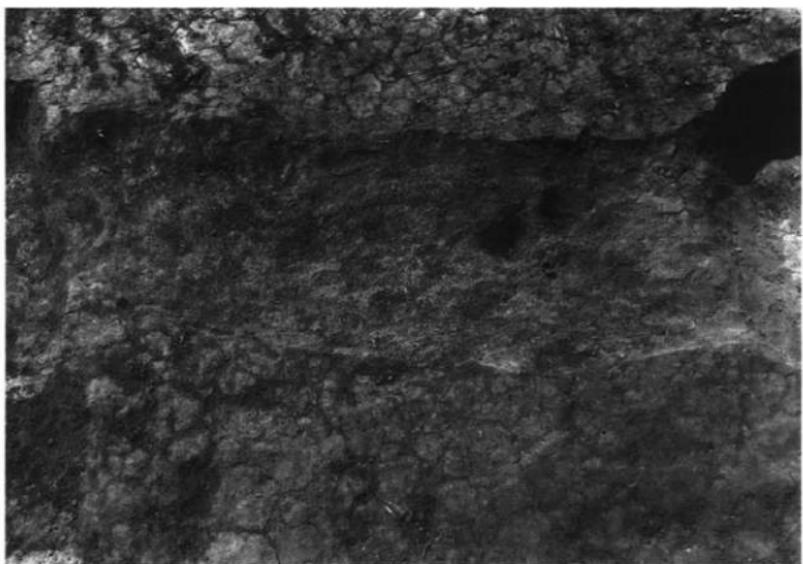




S M 0 2



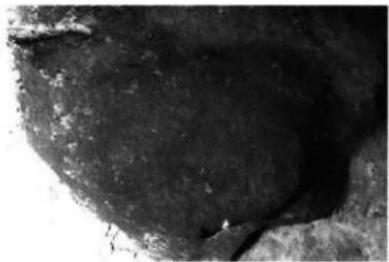
S M 0 2 壺出土状態



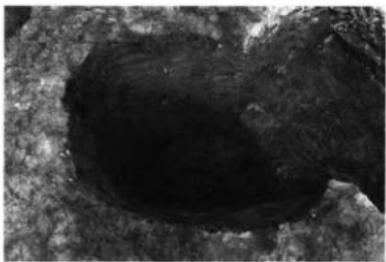
S D 1 2



S D 1 3



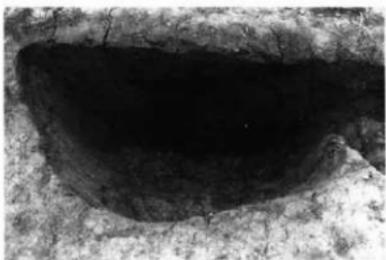
SK 09



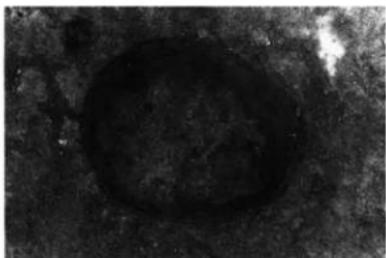
SK 10



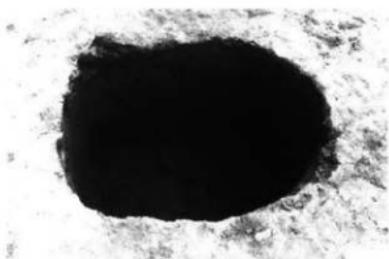
SK 11



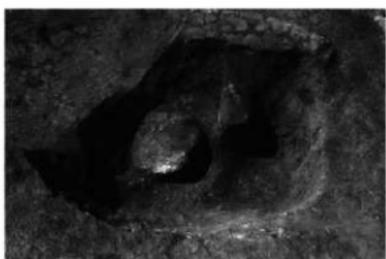
SK 12



SK 13



SK 14



SK 15



第Ⅳ地区全景（南西から）



第Ⅳ地区全景（北西から）



第Ⅰ地区北部
(上空から)



第Ⅰ地区北部・
第Ⅱ地区中央部
(上空から)



第Ⅰ地区南部・
第Ⅲ地区北部
(上空から)